す05-01-02

涼暮 皐

セブンスターズの印刻使い2

HJ文庫

HOBBY
JAPAN

涼暮 皐 すずくれこう

埼玉県に棲息。海がない県なので山に行き、スキーなどのウィンタースポーツに精通する。新潟で。なんやかんや作家に。
その頃から滑ることを得意としていたという説が濃厚。
吹雪の山荘で起きた事件の折、助けてくれたサンタクロースへの恩返しを果たす。

四季童子 しきどうじ

最近、肩こりがすごい事になってます。大抵の人に「こんな硬い肩、見たことない」と言われます…。
犬に踏んでもらうと気持ちいいです。
肉球が気持ちいいだけでほぐれないけど。

HJ文庫の最新情報はここから!
http://hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

9784798611327

ISBN978-4-7986-1132-7

C0193 ¥619E

1920193006193

定価：本体619円＋税

学園迷宮の攻略後、アスタの下に、かつての仲間である《七星旅団（セブンスターズ）》の七番目《天災》メロ＝メテオヴェルヌが来訪する。一流の冒険者として未だ活躍している彼女だが、家に転がり込んできた時には無一文。彼女がいることでお金が心もとなくなったアスタは、高額のバイト料につられて郊外のダンジョンへ、メロと共に赴くことになったのだった――。

イラストイメージ

HJ文庫の人気作外伝から完全新作まで
すべて無料で読めちゃう小説サイト
読める！HJ文庫
yomeru-hj.net

見逃せない連載ラインナップ（2016年1月現在）
◆高1ですが異世界で城主はじめました 外伝 著／錦 裕之
◆六畳間の侵略者!? へらくれす！ 著／健速
ほか、毎月新作が続々登場！

http://yomeru-hj.net/ PC&スマートフォン対応で毎週火曜＆金曜更新中！

涼暮 皐　作品

セブンスターズの印刻使い1

セブンスターズの印刻使い2

HJ文庫1月の新刊

NEW 征天の無双神器	著／坂本一馬
セブンスターズの印刻使い2	著／涼暮 皐
蒼鋼の冒涜者〈ブルースチール・ブラスフェマ〉3	著／榊 一郎
六畳間の侵略者!? 21	著／健速
六畳間の侵略者!? 21　ドラマCD付き特装版	著／健速

HJ
す05-01-02

涼暮 皐

セブンスターズの印刻使い2

HJ文庫
HOBBY JAPAN

涼暮 皐 すずくれこう

埼玉県に棲息。海がない県なので山に行き、スキーなどのウィンタースポーツに精通する。新潟で。なんやかんや作家に。
その頃から滑ることを得意としていたという説が濃厚。
吹雪の山荘で起きた事件の折、助けてくれたサンタクロースへの恩返しを果たす。

四季童子 しきどうじ

最近、肩こりがすごい事になってます。大抵の人に「こんな硬い肩、見たことない」と言われます…。
犬に踏んでもらうと気持ちいいです。
肉球が気持ちいいだけでほぐれないけど。

カバーイラスト／四季童子　装丁／ coil

9784798611327

ISBN978-4-7986-1132-7

C0193 ¥619E

1920193006193

定価：本体619円＋税

学園迷宮の攻略後、アスタの下に、かつての仲間である《七星旅団（セブンスターズ）》の七番目《天災》メロ＝メテオヴェルヌが来訪する。一流の冒険者として未だ活躍している彼女だが、家に転がり込んできた時には無一文。彼女がいることでお金が心もとなくなったアスタは、高額のバイト料につられて郊外のダンジョンへ、メロと共に赴くことになったのだった――。

HOBBY JAPAN

涼暮 皐　作品

セブンスターズの印刻使い1

セブンスターズの印刻使い2

セブンスターズの印刻使い2

涼暮 皐

HJ文庫

HJ文庫

「――やっ、アスタ！　久し振りっ！」
扉の外で、ひとりの少女がこちらに片手を挙げている。ものすごく見覚えのある姿だ。
メロ
メロ＝メテオヴェルヌ
《七星旅団》の七番目であり《天災》と呼ばれる。天真爛漫で傍若無人で唯我独尊。現在も冒険者として活躍している。
セブンスターズの
印刻使い
Rune Master of the SevenStars
2

「《防御》Ehiwaz、《野牛》Tiz……っ」
根源的な力を意味する《野牛》で
強化した《防御》の防壁が、直後、
アルベルの発した魔弾を完全に防いだ。
魔術的に、血液は媒介としてて
かなり優秀な概念を持っている。

「……汚いな。本当に生き汚い。吐いた血まで魔術の媒介かい？　頭の回ることだ」

魔弾を防がれたアルベルが、わずかに悄々しげな表情で呟いた

アルベル

アルベル＝ボルドゥック

《七曜教団》の《木星》を名乗る人物。アスタを元《七星旅団》と知っており、「世界を救うため」アスタの前に立ちはだかる。

そこに、やたら煽情的な姿をしたメロを見つけた。
下着姿の上に、前掛け（エプロン）を、一枚だけ着けたというふざけた格好。
わあ、こいつ殴りたい。

セブンスターズの印刻使い2

涼暮 皐

HJ文庫
612

口絵・本文イラスト　四季童子

contents ★★★★★★★★

プロローグ　ある少女からの手紙　003

第一話　天災は突然に　009

第二話　オーステリア学院の日常　047

第三話　銀色鼠（シルバーラット）　081

第四話　異変　135

第五話　もうひとつの、七つの星　214

第六話　治癒の能力を持つ少女　257

プロローグ　ある少女からの手紙

――や。久し振りだね、アスタ。あたしだよ。

一年くらい前に、アスタが突然姿を消して以来かな。手紙なんて普段は書かないんだけど、だからこそ書いたら驚くかと思って。そしたらもう迷わなかったね。

それにしても、だよ。どこに消えたのかと思ったら、まさか魔術学院に通ってたみたいだし。

とは思わなかったね。しかもこのこと、あたし以外はみんな知ってるはずだよね？

……正直、納得いかないなあ。

あたしは仲間外れにされるのがいちばん嫌いだって、アスタだって知ってるでしょ？

これはちょっと一回、直で話さなきゃいけないと思うよ。うん。

とゆーかさ、なんで今さら学生？　似合わないなんてモンじゃないよ。

って思ったけど、まあ、目当てはたぶん本だよね。オーステリア学院っていえば魔術研究の頂点だし、一応。貴重な魔術書もきっと保管してるだろうから、その辺りかな。

学院の蔵書の中になら、何か見つかるかもしれないよね。そりゃアスタも学院に通いたくなるか。うん、わからなくはないよ。

望み薄だとは思うけどさ。教授も知らない本が、学院で見つかるとも思えないし。

それとも、もしかして禁書庫のほうが目当てだったり？

なんだったかな。ガードナーだっけ。あの家が隠してる何かがあるって噂、どこかで聞いたことあるし。だとしたら、ずいぶん無謀なコト考えたなーと思うけど。

ていうか遠回し？　うん？　いや、よくわかんないけどさ。

いや。てか、それはいいや。そんな話がしたいんじゃなかった。

手紙なんて書いたことないから、なんかぜんぜん関係ないこと書いちゃったよ。やっぱ向いてないなあ。……じゃなくて。それはいいや、だ。ああ、これ書くの二回目になってる。

えっと。問題はそこじゃない。あたしはそんなことを問題にしないんだよ。

重要なのは別のとこ。わかってるとは思うけどさ。

――ね、アスタ？

そんな面白そうなコトしてるなら、どうして教えてくれなかったのさ？　あたしばっか

除け者なんて許せないよ。うん。あたしは怒りました。
アスタばっかり学校に通ってるなんてずるい。あり得ない。
あたしだって行きたい。
ていうか行ってもいいよね？
どっか行っちゃって構ってくれないし。端的に言って暇なので、あたしは。
うん、だから決めたよ。
あたしも、アスタと同じ学院に通うことにする。
とゆーわけで、まあ、報告まできると思うし。面倒臭い諸々は一切邪魔させないから。できるけど。
この手紙がいつ届くかわかんないけど、あたしが着くよりは先でしょ、たぶん。
そのときは先輩として、街でも案内してもらおうかな。
そんだけ。

――って思ったけど、追伸。
もう聞いたかな？　マイ姉がまた何かするって言ってたよ。あたしも最近はあんまり

会わないからさ、詳しいことはよくわかんないんだけど。どーもマイ姉もエレ兄も、こそこそ何かしてるみたいなんだよねー。ま、そっちはあとで噛めばいいけど。

なんだっけな。世界の平和を守るのだー、みたいなこと言ってたかな。まあ、マイ姉はいつもブッ飛んだコトばっかするからね。常識人のあたしとしては困っちゃうよ。ほんとに。この前も、なんか悪の秘密組織の隠れ家を壊しに行く？　とか言ってたし。やれやれ。まー、だからよくわかんないけど、きっといつも通りアスタも巻き込まれんじゃない？　準備くらいはしておいたほうがいいと思うよー？　優しいあたしからの忠告ね、これ。

それじゃ。近いうちにまたね。

アスタ＝プレイアスへ

親愛なるメテオ＝メテオヴェルヌより

第一話　天災は突然に

「――あいつが学院に来る、ね……」

要約すれば、そういう内容の手紙だった。俺は明るい笑みを顔に浮かべ、呟いてから立ち上がる。肘を机の角にぶつけたが、あまり気には留まらない。

煙草屋の二階。親父さんから間借りしている、狭い自室でのことだった。

今の俺は、きっと会心の笑顔になっているはずだ。鏡で確認する気はさらさらないが、たぶんそう。だって、こんなにも晴れやかな心持ちなのだから。

る諸々の想いが、吐き気となって喉から漏れ出てきそうなくらい気分が、うん。

最悪だった。つい今し方、五度ほど読み返した手紙を丁寧に畳む。

そして俺は――それを全力で灰皿に叩き込んだ。

「よし」やはり満面の笑みで俺は言う。「見なかったことにしよう」

即座にルーンを用いて、読んだ手紙を燃やす。これまた最高の出来で成立した魔術が、一片の紙を一瞬で灰に変える。いや、珍しく魔力の巡りが好調だ。

これでいい。証拠の隠滅は完璧だ。俺は何も見なかった。手紙なんて貰ってない。手紙なんて言語を俺は知らない。むしろ文字が読めない勢い――なんて仮にも文字使いとしてあり得ない言い訳を自らに言い聞かせる。その程度で、事実が消えるわけもないのに。だから現実逃避は、その辺りが限度だった。

「……」

無言になって、俺は先程まで座っていた椅子に再び腰を下ろす。そして頭を抱えた。

――え、マジで？　マジであいつ来るの？　ここに……？　あえて比喩するなら、悪いと分かっている試験の結果を待っているような気分か。赤点でも往生際悪く神に祈っているみたいな。

はもう確定しているのに、そちろん手紙の送り主だ。

何が問題なのかと言えば、普段は手紙なんて、まったく書かないタイプの人間だからだ。にくい文章の羅列。何が親愛なるだ。普通それは相手につけるものではない。アホか。いやそれとも意図的だったのか。

それでも用件だけは理解できた。できてしまった。

奴は、このオーステリアに襲来するつもりであるらしい。

その事実が、いったい俺にとってどれほどの衝撃であることか。それを言葉にするのは文字通りの《襲来》だ。

難しい。どう表現すればわかってもらえるのやら。

「ああ……厄介ごとに巻き込まれるのが目に見える。知られたくなかったのに……」

時間の問題だったにせよ。あの自己中心的な快楽主義者にかかれば、俺の平穏で平和な学院生活が一瞬で破壊されることは想像に難くない。

もうすでに平穏でも平和でもないという気もするが、それはなぜなら。彼女は、そういう次元の存在じゃない。

彼女はそのもの、《天災》なのだから。

「……」

別段、俺はこの手紙の差出人が嫌いというわけではない。苦手ではあるし、俺にとっては天敵と言ってもいいくらいの奴なのだが、人間的にはむしろ好ましいと思っている。

それも当然か。本当に嫌いな相手なら、ここまで付き合いが続くわけもない。

――彼女は、かつて俺が冒険者だった頃の仲間だった。同じパーティに所属していた。

では何が問題なのかと言えば、それは彼女の人格的な部分の話になる。別に性格が悪いというわけではないだろう。

ただ、なんというか、こう……よくも悪くもブッ飛んでいるというか。

ネジが外れているというか、そもそもそんな抑えがないというか、控えめに言っても頭

おかしい領域というか。

そこに在るだけで事件を呼び寄せるような——いや、むしろ自ら嬉々として事件を引き起こすような。面白ければなんでもいいし、つまらないことは全て許さない。世界を快と不快の二元論で捉えていて、だからいつだって彼女流の面白いを求めてやまない。世界の中心は彼女であり——だから周囲の人間は、そのことに巻き込まれてしまう。

そんな奴だった。

言葉通りの冒険者だ、とでも表現すればいいだろうか。

いったい何度、俺は命を呼び寄せるような——いや、むしろ自ら嬉々として事件を引き起こすような。面白ければなんでもいいし、つまらないことは全て許さない。世界を快と不快の二元論で捉えていて、だからいつだって彼女流の面白いを求めてやまない。世界の中心は彼女であり——だから周囲の人間は、そのことに巻き込まれてしまう。

そんな奴だった。

言葉通りの冒険者だ、とでも表現すればいいだろうか。

「……一服するか」

彼女との思い出という意味ではなく、彼女と一緒にいるとよく走馬燈を見落としかけたことか。本当に冗談ではない。

ともあれ、そのお陰で冷静さを取り戻すことができた。

「……、……」

机の隅に放られている名の走馬燈が、頭の中を駆け巡る。走馬燈のように思い浮かべたという意味だ。あり得ん。

親父さんの店の棚から、煙草の箱を手に取る。生憎と、残ひと箱頂いてくるとしよう。

そう考えて、最後の一本に火をつけた。一度だけそれを吸い、それから手に持って俺は

扉のほうまで移動する。足音と、気配を完全に殺して。――さて。

――扉の外に、誰かがいる。

普通に考えれば、もちろん煙草屋の親父さんに決まっている。この家に俺たち以外の人間はいない。何より敷地の周囲には、俺がルーンを用いて構築した結界が張られている。誰かが侵入してくれば、それを察知できるということだ。

にもかかわらず、結界にはなんの反応もない。普通に考えれば誰もいない。けれど、誰かがいる。その気配を、俺は一瞬だけ感じ取っていた。親父さんではないだろう。

扉の外にいる誰かが、気配を殺していることからそれがわかる。俺が気づけたのは、本当に偶然としか言いようがなかった。直前で頭を冷やしたお陰だろう。

もちろん親父さんがそんなことをする理由はない。そもそも仮にこれが親父さんなら、きっと俺は二階に上がって来るより先にその接近を悟ったと思う。こんなに接近されるまで気がつかないなんてことはない。魔術師は、他者の気配に敏感なものだ。

誰かが、そこに隠れている。結界は健在だ。つまり相手は、結界を破壊すらせずに無効化し、気配を完全に消していたところか。

確認する必要があった。俺は扉の前に立つと、音を立てないよう気を払ってドアノブを

握る。そして次の瞬間、

「――やっ、アスター！」

声と、そして人影が視界に飛び込んだ。その誰かは姿を隠し入口の扉を一気に開け放つ――途端。

扉の外で、ひとりの少女がこちらに向かって片手を挙げている姿だった。

「……久し振りっ！」

「……」

そのときの俺の驚愕と焦燥は、どんな言語でも表現できないだろう。誰かがいることはわかっていた。けれど、その誰かはあまりにも想定外の顔だった。

「久し振りだね、元気だった――」ばたん。

と俺は扉を閉めた。今のはなんだ。あれか、新手の喋る幻覚とかか。

一瞬のうちに現実逃避へ走っていた。気配なんて感じていないせいに決まっている。俺はだって、いくらなんでもまさかこんなに早く。

唇がかさかさに乾いていく。そんな犬猫じゃあるまい。

のか、俺には寸毫も理解に緊張しなければならないのがわかる。いったいなぜこんなできない。ただ単に、知り合いが訪ねてきただけなのに。

「――ふうん」

そのとき、扉の外から響いてきた声を、聞き逃したりはしなかった。
思わず凍りつく。彼女の声が、決定的に冷めていたから。
「久し振りだってのに、そんな態度とるんだ。アスタのクセに悟る。凛と響く声で少女は続けた。
――やばい。直感的にそう気づいてたみたいだし？」
「ま、いいよいいよ。あたしは優しいからね、一回くらいは許してあげる。あたしが一瞬だけ漏らした気配には、ちゃんと気づいてたみたいだし？」
「……お、おい」
「そうだね、十秒あげるから、気が変わらないうちに開けること。きゃ、あたしが、扉を開けて入るから……ねっ？」
声音だけは可愛らしい、けれどそれは余命の宣告だ。
勘違いしてはならない。彼女が言っているのは《扉を開けて中に入る》ではなく、正確には《扉に穴を開けて中に入る》なのだから。そのことを、俺は誰より知っている。
――なぜなら、彼女は天災、災害でも押し通る――。
往く道を遮る障害は、破壊する。その発生源はテーブル直後、俺は背後で魔力の気配を感じ、弾かれたように振り返る。
の上にある灰皿――その中で灰になっている崩れた一通の手紙だ。

……ああ。と俺は納得して固まった。なるほど結界を無視できるわけだ。なにせ結界の内側に魔力を設置されていたのだから。彼女なら、それだけで道を作れること だろう。

「じゃあ数えるねー」硬直する俺に向け、扉の外から少女が言う。「――」

「十秒は!?」

コンマすら数えず扉を開けた。あまりに強く開きすぎたせいで、蝶番が微妙にみしっと鳴ったが、それでも破壊されるよりずっとマシだ。こいつなら本気で壊す。そのための準備まで仕込まれていたのだから。この時点でもう俺の負けだ。なんの勝負だよ。

「気が変わらないうちに、って言ったでしょ?」

扉の外で、小柄な少女が花の咲いたような笑みを見せる。それは素直に無邪気で可愛らしい表情だったが、本当に無邪気で可愛らしい少女なら、こんな暴挙に出たりしない。

「気が変わるのが早すぎるだろ……」

「まあまあ。ギリギリセーフってことで」

扉の外には、悪戯っぽい笑みを見せるひとりの少女。目の前にある現実を、俺もう、認めざるを得なかった。本当にやって来てしまったのだ――あの手紙の差出人が。

「っていうかさー、ヒトの顔見た瞬間に扉閉めるとか、普通に酷くない? 傷つくなー」

「だからってこんなことする、普通? いや普通はしない。絶対に」

「えー？　ただ開けてってお願いしただけじゃん」
「こういうのを世間一般ではお願いと言わない。脅しと言う」
「アスタが開けないのが悪いんでしょ」
「ああ、そうですか……」頬の引き攣りを自覚しながら答える。
「あれ？　手紙、届いてるはずだよね？　もしかしてまだ読んでまったく、他人の家にこっそり忍び込んで思わなかったんだよ。ま
「届いたよ。読んだよ。つ
「そっか。手紙って意外と届くの遅いねー。ま、別にいいけど」
いや何もよくない。
だが目の前の少女の愉快そうな笑みを見ていると、確かにもう分になってしまう。そのことが、我ながら少しだけ可笑しく感じ
懐かしい、という思いを抱かせるからだろう。彼女はいつだっ
何も変わっていない。その性格も、そして外見でさえ。
特徴的な朱の短髪は、きっとどこにいたって他人の目を惹く。
その意志の強さを、そのまま反映したように見えるからだ。身長
華奢で子どもっぽいくらい。けれど、その容貌に反して放たれる

「まさかお前がいるなんで来るな」
ない？」
ないさっきな」
ついいけど」
でもいいという気られた。
て彼女らしい。かつてと
彼女という存在自体を、
は低く、言ってしまえば
強烈な存在感が、彼女を

尋常の存在でないと見る者に知らしめていた。

瞳は金色。どこか鋭い暗さを帯びている、魔術師らしい彩。

傍若無人なだけの小娘ではない。それだけで名が売れるほど世界においてトップクラスと言ってならば、冒険者の世界は甘くない。誰もが彼女を知っている。その異名を、畏怖とともに記憶する。

未だ十五歳という若さでありながら。彼女は、すでにして最強の一角だ。

「よくわかんないけど。とりあえず入るよー？」

疑問の形を取りながらも、答えは待たずに押し入ってくる。引き留めるのも馬鹿らしいというか、そもそも彼女の意志を変えることなんて、俺には初めから不可能だ。それこそ姉貴でもない限り。

勝手に上がり込み、勝手に寝台に腰を下ろす少女。こうしておてんばな、けれど年相応の女の子でしかないのだが。存在俺は諦めとともに肩を竦め、少女に向かってこう告げた。

「とりあえず、久し振り――メロ」

「ん、そうだね。久し振り――アスタ」

かつて伝説と呼ばれた冒険者集団――七星旅団の七番目。

七星においては最年少でありながら、ある意味で最も有名と言っていい少女。
《天災》メロ＝メテオヴェルヌ。
かつての仲間との、実に一年振りとなる再会だった。

※

この世界には、《二つ名》と呼ばれる文化がある。
それは卓越した実力を持ち、優れた功績を残した魔術師にのみ与えられる異名だ。
古くからの慣例で、魔術師はあまり本名を名乗らない。名には全て意味があり、それは安易に広めてはならないものだとされていたからだ。
あくまで慣例であり、今となっては半ば廃れた風習だ。とはいえ未だ遵守する魔術師も一定数いるし、そもそも情報伝達の媒体が口頭か書物くらいしかないせいだろう。
自然と二つ名がつけられることがあった。
名を挙げた魔術師には、あるいはその人物の人格や、成し遂げた功績、もしくは単に外見から——と由来は様々だが、本名以外の呼び名が広まるのは珍しいことじゃない。
これは、そのままこの国においてひとつの制度になった。

多大な国益をもたらした魔術師には、王が正式に二つ名を下賜するのだ。多くの場合、以前から広まっていた名前を、改めて公式のものとして授与し直すという形式だ。わざわざ格好いい感じの二つ名を新しく考える、みたいなことはあんまりない。

一般に《二つ名持ち》と言った場合、基本的にこの公式名を授与された魔術師を指す。魔術師にとってはひとつのステータスであり、大きな栄誉であるとされている。

当然、元《七星旅団》の俺にも二つ名はある。というか、七星のメンバーは全員が二つ名持ちだった。マイアとメロのふたりを除けば、この二つ名のほうだけが広まっているのである。俺とセルエを含めた残りの五人は、正体を隠しているから。

もちろん、知っている人間ならば知っている程度でしかない。特に顔を隠したりもしていなかったからだろう。写真なんてものもないし、気づかない人間は気づかないというだけ。あくまで世間的には二つ名だけが有名、という話だ。

本来なら、まあ、名誉なことではあるのだろう。魔術師なら喜びこそすれ、悲しむことではまったくない……のだが。

地球出身の俺からすると、正直言って、少しばかり気恥ずかしいものがある。

だって、俺の二つ名は《紫煙の記述師》だ。そこかしこで七星の紫煙が云々、と俺のことを話しているのだから結構つらい。異世界センスではまったく恥ずべきことではないの

だが、そういう問題じゃないということ自体に、なんだか違和感を覚えてしまう。

そこに例外があるとすれば――、

「へえ……意外と狭いとこに住んでんだね、アスタ。少し意外かも」

安物の寝台に腰を下ろした。軽く跳ねながらメロが言った。

一年振りの再会。とはいえ、そこに感動もなければ抵抗もない。昨日も会っていたみたいな感覚さえあった。それくらいの関係だったということ。

「いきなり現れたかと思えば……ヒトの城にケチつけんなよ。俺は気に入ってんだ」

「別にそんなつもりないけど。ただちょっと都合が悪いかなってだけ」

「はあ？　……都合？」

「ま、いいや。大した問題じゃないでしょ」

「ま、いいや。大した問題じゃないでしょ」

自己完結するメロ。相変わらず勝手な奴だ。名は体を表すというが、それは二つ名でも変わらないらしい。

彼女は《天災》という異名に違わず、常に予測不可能な損害を他者へもたらすのだ。

正直、このネーミングに関してだけは、俺は考えた人間に拍手喝采したい。これ以上ないというほど彼女に合っている。

「――で？」椅子に戻り、俺はメロに訊ねた。「何しに来たんだよ、メロ」
「手紙読んだんでしょ？　学院に入学しに来たんだって」
「お前まだそんな歳じゃねえだろうが」
オーステリア学院は、日本で言うなら大学に近い。入学時の年齢は多くが十八で、そこから三年間を過ごすことになる。メロの歳ではまだ早い。
そんな事実を告げると、彼女はものすごく簡単にこう返してきた。
「そんなの、飛び級するに決まってるじゃん」
「いや、飛び級ってお前……そんな簡単に」
あっさり言ってのけるものだ。いっそ感心してしまう。
確かに、制度としては存在すると聞いたことがある。卒業後は就職する、ということが大きな目的となる学院であるため、実際に機能するのは稀だという話だが……それでも、オーステリアは根本的に魔術のための機関だ。
要は才能さえあれば、たいていの無理は通るということ。そしてその意味で言えば、
「――だって、あたしだよ？　大丈夫に決まってるじゃん」
誇るでも傲るでもなく、単純な事実としてメロは言う。実際その通りだった。
最強と呼ばれた七星旅団の元メンバーであり、今もなお個人で活動する冒険者の中では

最強の一角として挙げられている。本当に最強かもしれない。

何よりメロは、セルエや俺と違い、かつて七星旅団（セブンスターズ）の一員であったという事実が世間に広く知られている。その事実をひた隠しにしたまま、しかも呪われて実力が発揮できない俺ですら入学できたのだ。

天災などと呼ばれていながら、無理ではなく道理を通してくるのだからタチが悪い。メロができないわけがなかった。

「くそ……お前、学院に通ってどうする気だよ？　お前が学ぶようなことないだろ」

噛み殺すように呟く俺。メロは気にも留めずに軽く笑った。

「そんなことないよ。いくほとんど負け犬の遠吠（とおぼ）えだ。

「何をだよ……」

「いろいろだよ。アスタだって行ってんだから、あたしが行ったっていいじゃん」

「来る意味がないだろって言ってんだけど」

「あるってば。だって面白そうだもん。アスタだけ遊んでるなんてずるい」

「いや、遊んでんじゃないからね？」

思わずこめかみを押さえた。何を言っても無駄（むだ）だろう。

面白そうだから、という単純な動機は、彼女の中で全てに優先される。

「てか、そんなことよりさ」メロはきょろきょろと部屋の中を見回しながら言った。「この部屋って、ひとつしか寝台(ベッド)ないの？」

「は？　いや……そうだけど。それが？」

思わず俺は首を傾(かし)げる。質問の意味がわからなかった。

だが嫌(いや)な予感だけは強く湧(わ)いてくる。なぜだか背筋に寒気が戻ってきた。

「や、だから寝(ね)る場所の話。ひとつじゃさすがに狭いでしょ？」

「何、言ってんだ？」声が震(ふる)える。「ひとりで使うんだから、ひとつで充分(じゅうぶん)だろ」

「アスタこそ何言ってんのさ。床(ゆか)で寝るの、アスタは？」

予感は、次第(しだい)に確信へと移り変わっていた。というかもう察した。

それでも、否定したい最悪の想像を、俺は言葉で確認する。

「……なあ、メロ。まさかとは思うが、お前、これから俺の部屋で寝泊(ねと)まりするつもりじゃないだろうな？」

「はあ？　いや、だから、さっきから何言ってるわけ？」

メロは、やはり笑顔で答えた。

綺麗(きれい)な表情で――俺の希望を打(う)ち砕(くだ)いた。

「当たり前でしょ、そんなこと」

「――」

「てなわけで。今日からよろしくね、アスター！」

※

天災の到来から、三十分ほど経った頃。

俺とメロは連れ立って、オーステリアの街を歩いていた。

晴れ渡る空。騒がしい中央通り。その様子を、前を行くメロは楽しそうに眺めている。

きょろきょろと忙しなく躍る金色の瞳が、彼女の移り気な性格をよく表しているようだ。

……こうしている分には本当に、年相応の可愛らしい女の子なのだが。

本職の冒険者として、方々を渡り歩いているメロ。そんな彼女にとって、この街の光景などさして珍しいものではないだろう。それでも笑顔であちこち視線を移しては、

「アスタ、アスター！　ね、ちょっと寄り道してこうよ。あたしお腹空いてきちゃった！」

「金持ってきてない」

「あたしも持ってないんだけど」

「じゃあ無理」

「うっわ、甲斐性ないなあ、この男……」
うるせえな、なんで俺が奢ってやる前提なんだよ。俺は軽く溜息をつく。
そもそも、どう考えたってメロのほうが金を持っているはずだ。現役の、しかも最上位の冒険者である彼女なら、それこそ一生安泰なほどの財産を持っているのだろう。俺と同じく。
どうせ、稼いだ金をどこかひとところに纏めて放置しているのだろう」
「仕方ないなー。ま、それは今度でいっか」
唇を尖らせて拗ねる少女。やはり外見だけなら可愛らしいが、見た目が小動物でも中身が猛獣どころか怪物なのだから、甘い顔を見せるつもりはまったくない。
そもそも、別に散歩に来たわけではなかった。目指しているのは学院だ。もっと正確に言えば、そこにいるであろうひとりの女性と会うために出てきている。
「――セルエに会いに行こうぜー！」
と俺が本日二度目の満面の笑み（ただし口角痙攣気味）で言ったのがきっかけだった。
彼女もまた、かつて苦楽を、特に苦を共にした仲間なのだから。根本的に自己中心主義なメロも、これで七星旅団のメンバーにはよく懐いている。俺を除いてだが。
セルエとも、メロは長らく会っていないだろう。それを見越しての提案だった。実際、

彼女は驚くほど簡単に乗ってきてくれる。ちょろいものだ。
当然、久し振りに会わせてやろうなどという仏心を出したわけじゃない。会いたければ勝手に会いに行けばいいのだ。こうして連れているのには、もちろんほかの理由がある。
要するに、セルエに全てを押しつけてしまおうと思ったのだ。
何も俺のところに泊まることはない。メロとはいえ、二回と。
女の子なのだから、同性のところで暮らすほうがいいだろう。絶対にいい。こっち来るな。

※

「セルエ、いるか？」
こんこん、と軽く扉をノックした。学院の一角、セルエの研究室に来ている。
しばらく待つと、中から声が返ってきた。
「あれ、アスタ？　どうしたの？」
声でわかったのだろう、少し意外そうな声でセルエが言う。
「ちょっと用があって。今、平気か？」
「んー……えっと、わかった。いいよ、開けても」

少し間があったが、やがてセルエから許可が下りる。背の低いメロを後ろに隠して、俺は研究室の扉を開いた。

隠した理由は特にない。俺が驚いたのだから、セルエも驚くだけだ。思えばセルエは、俺に渡した手紙の差出人を知っていた節がある。

中に入ると、散らかった部屋の奥に、ふたり分の人影があった。来客があったのは予想外だ。タイミングが悪かったかもしれない。

片方は当然ながらセルエで意外と、セルエは片づけが苦手だった。

相変わらずだらしない。書物や書類、実験器具なんかで山積みの机の奥に座っている。

そんな、正直あまり他人には招きにくいだろう部屋に、もうひとつの人影。

その意外な姿に、俺は少し驚いてしまう。

「こんにちは、です。アスタさん」

その驚きの隙を突くように、向こうのほうから声がかけられた。温かく柔らかな、少女の声だった。

「ああ。おはよう、ピトス」

小動物然とした笑みを見せる少女――ピトス＝ウォーターハウスに、俺は片手を挙げて答えた。その何が面白かったのか、ピトスはさらに笑みの色合いを強くする。

彼女とは先日の、あのオーステリア迷宮での一件以来、割と親しく話すようになっていた。街全体で数えても両手の指で足りるほどしか知り合いのいない俺にとっては、希少な友人であると言っていい。何よりその数少ない友人たちが軒並み変わり者という中で、本当に珍しく常識人であるピトスに対しては、俺の中での好感度がかなり高い。

「もしかして邪魔したか？　なんなら出直してくるけど」

だからこそ俺はそう訊ねた。教師の部屋に、わざわざ学生が訪ねてきているのだ。何か大事な用件があるのなら、割って入るのは気が引ける。

「いえいえ、わたしの用件はもう済みましたので。大丈夫ですよ、アスタさん」

俺の言葉に、ピトスは軽く手を振って答えた。

「そっか。ならよかった。ピトスがセルエといるなんて、珍しいと思ったからさ」

「……そうかもしれませんね」苦笑するピトス。「そういえばアスタさんは、セルエ先生と以前からのお知り合いなんでしたっけ？」

「俺の姉貴もこの学院に通っててさ。セルエはそのとき、姉貴の後輩だったんだよ」

「アスタさん、お姉さんがいらっしゃるんですか」

「ああ……うん、まあ」俺は言葉を濁した。「えっと、それでセルエ。実はセルエに客を連れて来てるんだよ」

「お客さん……？　アスタセルエと、わずかに首を傾げるピト
疑わしげに眉根を寄せる
しれっと話題を変えたつ
かもしれない。とはいえ、
あの馬鹿姉貴は後ろにい
れている。そうでなくとも
俺は、アレ、俺の義理の姉
別に俺が元七星旅団だと
ろんそれも否定はしないが
ことが嫌なのだ。武勇伝と
『ちょっと悪党ブッ倒して
させたとか、マイア＝プレ
永久に立ち入り禁止になっ
そんな魔術師の義弟だな
と、そう考えてのことだ
「――ねえ、アスタ？　あ

ス。
か、さすがに無理があった
は避けたかった。
露骨という
りだったが、ちょっと
このまま話題の主軸が姉貴に移るの
る可能性は低くない。だが
かった。
七星旅団の団長と
学院出身の魔術師なら名を馳せてい
であるという事実を極力隠していた
という事実を知られたくない、という
、それ以上に、俺はマイア＝プレイ
という名の黒歴史が、同時に知られて
に、湖ひとつを完全に蒸発
だけの理由で迷宮ひとつが
に遑がない。
るやら。絶対にご免だ。
たしまだ待ってないとダメなの？
遅いんだけどー」

その全てをぶち壊しにしてくれる存在が、背後に控えていたことはすっかり忘れ去っていた。《天災》メロ＝メテオヴェルヌが持つ伝説は、ある意味でマイアさえ凌駕する。

……こいつと知り合いだって事実も、あんまり広まってほしくないなあ。

「セル姉、久し振りーっ!!　元気だったー?」

「ぶふぅおっ!?」

瞬間、セルエが――あのセルエ先生が、思いっ切り噎せ返る。

俺は見なかったことにした。

「メ……メロ!?　なんで?　なんでいるのっ!?」

「なんでって、もちろんセル姉に会いに来たからに決まってんじゃん。そういえば、セル姉がセンセーやってるトコ見るの初めてだね。うわ、なんか新鮮」

「あ、会いに……えっと、そっか、うん。久し、振りだ、ね……？」

「てっかねー、聞いてよセル姉！　アスタってばいきなり酷いんだよー?」

それこそ突進と言ってもいいくらいの勢いで、メロがセルエに駆け寄っていく。というか実際にその胸へ飛び込んだ。セルエは難なくメロを抱き留めていたが、その視線はこれ以上ないというほどの驚愕を露わにして俺のほうに突き刺さっている。

俺は視線を逸らした。

「――そんでさ、アスタってば、せっかくこのあたしが会いに行ったっていうのにさー」

「あ、あはは……。メロは変わってないなあ、本当」

離れていた時間を埋めるように、じゃれ合っているメロとセルエ。外から眺めている分には、メロはもちろん、セルエも純粋に再会を喜んでいるように映った。メロは七星旅団の仲間を兄、あるいは姉と呼ぶ。やはり俺以外は、だが。

彼女にとって、七星の仲間は家族なのだ。笑顔で話し込むふたりの姿は、確かに仲のいい姉妹に見えた。

「あの……アスタさん」

と、メロの闖入に驚いたピトスが、我に返ってこちらに来る。その表情に浮かんでいる驚きの色は、何も突然の来訪のせいだけではないだろう。

「もしかして、とは思うんですけど……」

「ま、そういうこと」

俺は頷く。この年齢の少女で、そして名前がメロと来れば、気がつかないわけもない。

「じゃ、じゃあやっぱり……え、でもどうしてあの《天災》がアスタさんと……？」

魔術師ならば、それもオーステリア学院に通えるほど優秀な学生ならば、メロの名前を知らないはずがない。

正直、ピトスがここにいたのは誤算だ。ただの知り合いと言い張るには、メロはあまりにも有名すぎる。彼女に向けられる注目が、そのまま俺のほうにまで波及することは火を見るより明らかだ。だからこそ、セルエに押しつけてしまおうと考えたわけで。

「ま、その話はあとでな。俺は逃げる」

とはいえまあピトスなら、頼めば黙っていてくれるだろう。そんな悪足掻きが、果たして《天災》を前にどれほどの意味を持つのかは、我ながら疑問だったけれど。

「でも楽しみだなー。セル姉の授業も受けられるんでしょー？」

「うん……うん？　授業？　授業って……」

「そっか、言ってなかったっけ。あたし、これからこの学院に通うことにするから」

「うえええええっ!?」

淑女にあるまじき声を発するセルエ。ぎちぎちと、油の切れたブリキ人形みたいな動きで、こちらに顔を向けてくる。だから俺もまた視線だけで、「じゃ、あとは任せた」と告げた。

「ちょっ!?　アスタ、まさか……っ！」

さすがに付き合いが長いだけはあり、セルエも全てを悟ったのだろう。ならば同時に、あのメロが学院に入学などして、問題を起こさないわけがないことも理解したはずだ。

……ごめん、セルエ。でも学生の世話をするのは、たぶん教師の役目だから。
がんばれ、先生。俺は知らない。

※

厄介の種を体よく押しつけてきた俺は、解放された気分で廊下を歩いていた。もちろんこれだけでメロから逃れるわけもないことは重々承知であるけれど、少しくらい夢を見たっていいと思うのだ。
考え込む俺の耳に、背後から廊下を駆けてくる足音が届く。振り返ってみれば、そこには息を切らしたピトスの姿が。なんだか少し、唇を尖らせている様子だ。
「もう……何も置いてっちゃうことないじゃないですかっ」
「え？　あー、ごめん。メロから逃げることしか頭になかったから」
「逃げるって……」
「あいつと関わるとロクなことにならないんだよ」世の中には、面倒ごとを起こすためだけに生きる人間もいるのだ。
「……アスタさん、本当にあの《天災》とお知り合いなんですね？」「ピトスだって、噂くらいは聞いたことあるだろ？」

「言ったろ、冒険者として働いてた時期があったって。その頃にちょっとね。それだけ」
嘘はついていない。下手な嘘は身を滅ぼすことを俺は知っている。だが、それだけでは説得力に欠けることも事実だった。
実際、ピトスはかなり疑わしげな様子である。じとっとした上目遣いで俺を見て、
「それだけって感じには見えませんでしたけど……そういえば、セルエ先生とも何かあるみたいですし。なんだか、すっごく仲がよさそうでしたが」
「……まあ、いろいろあったんだよ。いろいろ」
「どういろいろあれば、あの《天災》と仲よくなれるんですかねー……？」
「……」
「怪しいですね？　アスさんは、いろいろと」
割と突っ込んでくるピトスだった。
意外、でもないか。思い出してみれば彼女は、俺とレヴィに対してではなく、レヴィに対する興味からだと思っていたのかもしれない。
ったことがある。あれは俺が恋人同士ではないかと勘繰だが、違っていたのかもしれない。
彼女だって何も、ただ優しいだけの人間ではない。魔術師である以上――いや、魔術師ではなかったとしても。きっと誰だって、何かを隠して生きている。当たり前のことだ。

この学院に、目的なく入学してくる奴なんていない。そうでなくともピトスは——これに関してはウェリウスやシャルも同じだが——学生の域を超えた実力を持っている。逆を言えば、それだけの力が身につく環境にいたということだ。才能だけでは語れない。なんということのない、ただの雑談の裏にだって、魔術師は思惑を秘めている。

「そうだ、アスタさん。このあと、少しお時間ありますか？」

ピトスがぽん、と軽く手を打った。その顔には可憐な笑み。裏は感じられない。

目の前の少女が、学院の男子連中から一定の人気を得ていることは知っていた。治癒魔術の適性があり、頻繁に負傷する学生たちの治療を自ら買って出ているからだろう。中にはピトスを指して、《天使》と呼ぶ男さえいると聞いたことがある。だが、

「……今日は特に授業も取ってないから、暇と言えば暇だけど」

「でしたら、ぜひお昼をご一緒しませんか？　学院通りの裏の辺りに、いいお店があるのを知ってるんです」

「あんまりお金ないんだけど」

「それくらい、わたしが持ちますよ」

「……いや、自分で払うよ。怪しすぎるから。

そう勘繰ってしまうのは、決して俺が捻くれているからではないはずだ。魔術師っての

は面倒な生き物で、自分のことは隠すのに、他人の秘密はなんであれ暴こうとする。

「わたし、前からアスタさんとは、一度ゆっくりお話ししてみたいと思ってたんです」

小首を傾げて俺を誘うピトスは実際、素直に可愛らしいと思える表情だ。

けれど、なぜか。その笑みは天使というよりも、どちらかといえば小悪魔じみていた。

※

結局、俺はピトスの誘いを受け、連れ立って一軒の料理屋に向かった。

通りの少し奥まったところにあるその店は、いわば隠れた名店というヤツなのだろう。

わかりづらい立地の割に、そこそこ繁盛している模様だ。

店に入ると、先を歩くピトスは迷うことなくひとつの席を目指していく。この時点で、

俺は彼女に嵌められたことを悟った。なるほど、そういうことだったのかと。

「――お待たせしてしまってすみません」

いちばん端のテーブルには、ふたりの女が座っていた。そのうちの片方が、ピトスに向けて苦笑を見せる。また妙なのを連れてきたな、と。――レヴィ＝ガードナーだ。

大方、この様子を見て全てを察したのだろう。相変わらず勘のいい奴だ。たまには俺に

利する方向で、その能力を働かせてほしいものだと思う。

だがレヴィは特に口を開かず、その代わり、隣にいるもうひとりが笑いながら言った。

「これはまた。珍しいの連れてるじゃないのさ、ピトス」

「偶然お会いしたので、つい お呼びしちゃいました。構わないさね。なんだか、面白い組み合わせになったじゃないか」

くつくつと笑みを噛み殺しながら、そいつはこちらへ軽く手を挙げる。

暗い水色の乱れ髪と、深みのある紫水晶を思わせるような双眸が印象的な女だ。どこかかわしくない。学院の、逆十字をあしらった制服の上に、使い古した白衣を纏っている。

疲れを感じさせる気だるい雰囲気が、その外見とまるで似つこれが、彼女にとっての普段着だ。

「やあ、アスタ。久し振りだね？」そいつが言う。「会わなてたとは知らなかったよ。いや、こいつは貴重な光景を見た

「そういうお前こそ、外で見るのは珍しいな、エイラ？」

「アタシだってね、友人から誘われれば、食事くらいには出不健康そうな隈のある顔で、彼女――エイラ＝フルスティ同期であるエイラは、しかしレヴィやピトスとは違ったタイ

というのも、彼女は魔術というモノを完全に《研究対象》として割り切っている稀有な学生なのだ。研究者という意味合いでの魔術師は、学院生だとかなり珍しい。

「最近はご無沙汰だし、また今度、実験に付き合ってくれないかい？」

にやにやと笑みを浮かべるエイラ。彼女は魔術がかけられたその性能実験に協力している。ある意味では、レヴィ以上の有名人と言えるほどに。

としており、俺はときどきその性能実験に協力していた。

実際、その腕は卓越している。俺よりましだろ」

「実験なら、俺じゃなく隣にいる奴に付き合ってもらってくれ。俺よりましだろ」

肩を竦めて俺は言う。なまじ作り出す魔具の性能が高すぎるせいで、彼女の言う実験にはどうしても危険が伴うのも、頻繁にはご免だ。

「いや、これでレヴィは忙しいからねえ。あまり頼るわけにもいかないだろう？」

「俺が暇みたいな言い方をするなよ」

「そうは言ってないさ。でも、レヴィに比べればマシだろう。俺自身、解呪

そりゃ名門ガードナー家のご息女様と比較されれば、誰だって暇だろう？」

の方法を探して学院に来たと言えば聞こえはいいが、実はとっくに手詰まりだ。

迷宮に存在する古の魔道技術は、現代のレベルを大きく超えている。転移術式の刻まれた石板にしろ、その他の数多眠っているという魔具にしろ、あるいは迷宮に仕組まれた罠

にしろ。同じものを魔術師ではほとんど再現できない。
それは呪いも同じで、かけ方のわからない呪いを解呪する方法もないということ。
「……だからって、お前の実験に付き合うのは嫌なんだが」
「あら」と、ここでようやくレヴィが口を開いた。「女の子の頼みを無下にするなんて、男としてどうなのかしらね、それ？」
その顔は完全に笑っている。楽しんでいるのが明らかだ。
「男も女もあるか。お前のほうが優秀だし、それに友達なんだろ。手伝ってやれよ」
「もちろん私だって、エイラの頼みなら協力は惜しまないけど。でも別に、それはアスタが手伝わないことの理由にはならないんじゃない？　――友達でしょ。手足になれば？」
「そんな都合のいい友人関係、聞いたことないんだけど」
「それはアスタに友達がいないからじゃないの？」
「おい。一瞬前と言ってることが正反対じゃねえか。自分の言葉には責任を持って手伝ってあげなさいよ。友達なんでしょ？」
「ならアスタも自分の言葉には責任を持て」
「だから、それとこれとは話が」
「友達じゃないの？」
「……」

「って言うと答えられなくなるから、ふたりとも覚えとくと便利よ。上手く使えるから」
なんだかんだでお人好しよね、と笑うレヴィ。褒め言葉では確実になかった。
「少なくとも、お前とは間違いなく友達じゃねえよ……」
「……相変わらず仲いいね、ふたりとも」
レヴィの放言に答えていると、どこか呆れた風にエイラが言う。
「風評被害だ」
だから、思わずそう答えていた。そこまではよかった。
問題はまったく同じタイミングで、
「風評被害よ」
などと、ほとんど同じセリフをレヴィが言ったことだった。
「ま、そういうことにしておこうか」
ついに噴き出すエイラに対し、俺もレヴィも、さすがに言葉がない。……畜生め。
別段、仲が悪いとは言わない。むしろ気心が知れているほうだろう。だが、そのことで妙な勘繰りをされるのは頂けなかった。友人などではない――共犯者としては。
「それで？　実際どうしたの、今日は。ピトスといっしょなんて珍しいけど」
「……言っただろ。たまたま会っただけだ」

形勢の不利を察してか、なんでもない風に話題を逸らすレヴィ。俺はそれに乗った。
しかし、この場合はそれこそが悪手だ。今まで黙っていたピトスが、堰を切ったように語り始める。……そういえば、今の今まで口止めをしていなかった。
「それなんですけど」ゆえに彼女は言ってしまう。「実はですね、さっき、学院で《天災》を見たんです」
「っていうと、もしかしてヴェルヌさんです。アスタさんと一緒にいたんですよ」
「ええ。あの、メロ＝メテオ――」
――ピトスは、この話をするために俺を連れて来たのではなかろうか。
メロの話を聞けば、レヴィなら間違いなく興味を持つ。それがわかっていたからこそ、ピトスはわざわざ俺をここに呼んだ――と、そう考えるのは邪推だろうか。
もちろんピトスは、そんなことはまったく考えていないという風に、普段と変わらない柔らかな笑みを浮かべている。天然なのか、そうではないのか。いずれにせよ、もうそれどころではなくなった。この場にレヴィがいる以上、もはや逃れることはできない。
「――へえ。あの《天災》が、この学院に……」
レヴィがこちらへ向けてくる鋭い視線が、全てを白状しろと俺に告げている。
この女が、《天災》の入学なんて事態に興味を持たないはずがなかった。

当代最年少にして、最強の一角に数えられる冒険者（ぼうけんしゃ）。かつ伝説を残した少女――メロ。俺なんかとは違う、それは本物の天才にして、天災の名だ。レヴィ＝ガードナーにとって、それは超えるべき壁（かべ）のひとつだった。

「七星旅団（セブンスターズ）」の一員として

第二話　オーステリア学院の日常

三人と別れたあと、この日はそのまま部屋に戻った。親父さんも帰ってきており、「これから飲みに行くが、お前もどうだ？」と誘われる。断ると店番を任された。

俺は煙草屋の結界を張り直す。手紙に染み込ませた魔力によって、結界の《所有権》を乗っ取られてしまっていたからだ。本当に、油断も隙もあったものじゃない。

その後は店番がてら、積んであった本を消化することで一日を過ごす。

――結局、メロが戻ってくることはなかった。セルエのところに居着いたのだろう。

そして翌日の正午になる。この日は午後から《魔術史学》の講義があった。

実技の評定が壊滅状態の俺にとって、座学は貴重な挽回の機会だ。とりあえず勉強さえすれば評価が貰えるのだから、もう天国だと言っていい。

この手の授業は、試験で点数さえ取ればいい。だから実は出席する必要があまりないのだが、せっかく学生の身分にいるのだ。わざわざ欠席する理由もまたなかった。

知識は、あればあるほど役に立つ。

魔術や迷宮の歴史に関して学ぶ魔術史学の授業は、実践主義的な学生たちの受けが悪いことで有名だったが、個人的には割と好きだ。冒険者時代の名残だろうか。

開始の五分ほど前に講堂へと辿り着く。人影はまばらだった。探すまでもなく空いていた端のほうの席に陣取り、ひとりで授業の開始を待つ。

そんな俺に近づいてくる、爽やかな笑みを浮かべた男がひとり。どうしてこっちに来るかな、こいつは。

「――やあ、アスタ。調子はどうだい？」

なんだその質問、と反射的に思った。表情が自然と歪むのを自覚する。

「ウェリウスか……」

こっち来んな、という意思を込めて金髪の優男を睨みつける。むしろより嬉しそうに目を細めた。この腹黒イケメンめ。

振りを見せるどころか、ウェリウス＝ギルヴァージルはなぜか頻繁に話しかけてくるようになっていた。貴族の血を引き、実力もさることながらルックスでも人目を惹く男だ、顔を合わせるだけで俺まで注目を浴びてしまう。何ひとつ嬉しくない。

今だって、いくつかの視線がこちらに向いている。いつもひとりでいる人間が人気者に

話しかけられると、注目を浴びるのは地球でも異世界でも変わらない。
「そんなに嫌そうな顔をしないでほしいなあ」人受けのいい、甘い笑みで奴は言う。「僕もさすがに傷つくよ」
「ならなんで笑顔なんだよ……まったくそうは見えないんだけど」
「誰が友人だ」
「それはそれ。友人と話すのは楽しいものだろう？」
「ははは」
ははははじゃねえよ。俺の表情がますます歪む。それに反比例するように、ウェリウスはより笑みを深くしていくのだから、もはや嫌がらせとしか思えない。
何より、中途半端に終わった模擬戦の再戦を申し込んでくるのが最悪だった。勝てるわけがないのに。
「そういえば聞いたよ」
ウェリウスが言う。続きがないので、仕方なく訊ね返しておく。無視を貫いたところで、この男は堪えないだろう。
「……何を？」
「今、この学院にメロ＝メテオヴェルヌが来ているそうじゃないか」

「――」

話の早いことである。いったいどこで聞きつけてきたのやら。というか、

「で？　どうしてその話を俺にする？」

「うん？　君が連れて来たんじゃないのかい？」

「違う。妙な噂を真に受けるな」

断言した。別に嘘ではないということにしておこう。

だがウェリウスは、俺が勝手に来たのだから。

請け負っただけだ。……と言うことなどまるで聞いていなかった。

「知り合いなのかい？」

「……まあ、冒険者をやってた頃に、ちょっとな」

どうも誤魔化せそうにない。仕方なく、嘘にならない範囲で答えた。

気になるのはわかる。メロほど有名な魔術師が学院に来ていると聞いて、興味を持たない学生はいない。コネなんか作れれば最高だ。立場が違えば俺だってそう思う。

それはウェリウスでも同じらしい。相変わらず感情の読めない笑みで、

「よければ紹介してくれないかな。あの《天災》と友誼を結べるなら幸運だ」

「断る。会いたきゃ自分で会いに行け」

「そうか。それは残念」
ウェリウスはあっさりと引いた。あまり残念そうでもない。
俺は席に座ったまま、怪訝な視線を隠さずに、隣で立つウェリウスを睨み上げる。
「……なんだよ」
「いや。それにしても、あの《天災》と知り合いだなんて、たまたまだ。冒険者やってりゃ、そういうこともあるだろうかな？　本当にそれだけかい？」
「そうだよ。ほら、授業始まるぞ。席に戻ったらどうだ」
「いっしょにどうだい？　隣の席でさ」
何言ってんだこいつ、と本気で思った。怖い怖い怖い。
「それも断る」
「残念。嫌われたものだね」
「お前の隣は目立つんだよ……。向こうで待ってる連中のとこ行ってやればいいだろ。超こっち見てんじゃん」
「うーん。まあ僕は顔がいいからね。人目を惹くのは仕方ない」
「蹴っ飛ばすぞ」

「それに頭もいい。だからどうしても人気者になっちゃうんだ。困ったね？」

「気にすんな。性根の悪さでバランスは取れてる」

それだけ言うと、俺はウェリウスから視線を外して前を向いた。横合いで、俺は小声で呟いた。

が肩を竦める気配がする。まだ立ち去っていないのを知ってやったらどうだ」

「……俺なんかを誘うくらいなら、代わりに、あいつを誘っ

俺の視線を追って、ウェリウスは「ああ」と小さく頷き、苦笑を見せた。

「シャルロットさんだね」

ウェリウスと同じく、前の迷宮の一件で同じパーティを組んだ少女――シャルロット＝セイエル。真っ白な長髪に蒼く澄んだ瞳を持つ、まるで人形のような少女。

シャルが、教室のいちばん前の席に、たったひとりで座っていた。

「真面目だよね、彼女。いつもいちばん前にいる」

「……お前、シャルとはあんま話さないのか？」

「そもそも僕は、彼女が誰かと話しているところをほとんど見たことがないよ。ここにはみんな仲がいいのかと思ってたが勉強するためだけに来てるんだ、って感じの雰囲気だし。あまり邪魔はしたくない」

「ふうん……。上位陣は、」

「レヴィさんたちはそうだけどね。僕が女の子とふたりで話していると、それは

で噂が立つから」
「うっわ、心底うっぜえ」
「でも、それこそ君くらいじゃないのかい？　彼女と親しくしたのか。なんだか知りたくない事を知ってしまった気がする。
「……いや、別に俺もぜんぜん親しくないけど……」
あいつ、実はぼっちだったのだろう。言ってはなんだが、シャルは目立つ外見だ。珍しい白の髪を持つ美形なんて、それこそウェリウスよりも視線を惹く。
というか、むしろなぜ今まで知らなかったのだろう。
「今まで、教室であいつのこと見たことなかったけどな……」
「僕はよく見かけるけどなあ。いつもいちばん前で……いやあ。なるほどね」
瞬間。ウェリウスがものすごく綺麗な笑みを作った。
嫌な表情だった。
「どうだい？　君こそ、彼女と少し話をしてきてみたら」
「なんでだよ……」
「いやあ。彼女、君と話したいんじゃないかと思って」
「……」まあ。
どちらかと言えば、俺のほうがシャルとは話をしたいと思っていた。師匠の――魔法使

いのことについて、話したいことがいくつかある。
とはいえ。ここで話しかけたところで、シャルは絶対に答えないだろう。なぜか避けられていることには気づいていた。
「じゃあ、僕はそろそろ。またね、アスタ」
気障に去っていくウェリウスを完璧に無視して、俺は前を見ていた。
そろそろ授業が始まる時間だ。

※

やがて現れた教師から、俺は普通に授業を受けた。特筆して語るようなこともない。
シャルに話しかけることも別にしなかった。人を寄せつけない雰囲気があるというか、とにかくこの場で声をかけることは、彼女の意に反しているような気がしたからだ。
改まって話すとなっても、何を話していいのかわからないし。
授業後、誰より先に退室するシャルを視線だけで追って、それから俺も部屋を出た。
今日はもう授業もない。早々に帰宅すると決める。
煙草屋に戻ると、親父さんがなんだか難しい表情で店に出ていた。俺の顔を見るなり眉

を顰めて、けれど何も言おうとしない。珍しい様子だった。
「……親父さん、どうかしたのか？　まあ別にとやかく言わねえけどよ……」
「どうもこうもな……」厳つい顔を、普段よりさらに険しくする親父さん。「お前、あの子といっしょに暮らすつもりなのか？」
「――――」オーケー、だいたい悟った。
どうやらメロが来ているらしい。いったい何をしでかしたのやら。親父さんをしてこうまで動揺させるとは……本当にもう勘弁してくれないかな。
「……煙草、ひとつ貰うよ」
棚から勝手にひと箱取り出し、開封して火をつける。店の壁にもたれかかって、二階に行く前に一服した。肺から出る紫煙には、溜息も混じっていることだろう。
メロと会うのは久し振りだ。七星旅団が解散に至った一件以降、俺は仲間たちからほとんど逃げ出すように、このオーステリアの街に来た。以来、顔を合わせているのはセルエだけ。それぞれが活躍する噂は耳に届くし、届かなくても心配はしない。
「……本当、何しに来たんだか」
俺は、メロがただ遊びにオースステリアに来たなんて、これっぽっちも信じていない。
彼女は天才魔術師だ。オースステリアの学生たちが神に才能を貰ったのだとすれば、彼女

はきっと神ですら扱いきれなかった存在なのだと思うほどに異質な天才――天災。

とはいえ、それでも魔術が学問としての側面を持つ魔術師であることに変わりはない。魔術師だ。そして魔術師が行動を起こす以上、そこには必ず理由が、目的がある。

以上、それに長けた人間はそこそこの頭脳を持っていると言い換えることもできる。

メロは決して馬鹿じゃない。相応にクールだし、相当にクレバーな思考回路を持つ魔術師だ。そして魔術師が行動を起こす以上、そこには必ず理由が、目的がある。

確かめる必要があった。

吸い切った煙草を、手製の携帯灰皿の中で揉み消し、二階への階段に向かう。

その背後から、どこか淡々とした親父さんの声。

「――ところで、アスタ」

「ん？」

「あの嬢ちゃん、ウチで暮らすってんなら家賃は倍だからな」

「……」脳内でその言葉を噛み砕き、理解し、それから俺はこう言った。「――えっ」

※

自室の前まで戻る。そういえば、設置し直したはずの結界が再び壊されていた。

考えるまでもなく原因はメロだ。別に彼女が何かしたというわけじゃないだろう。ただそこに在るだけで、弱い術式など簡単に破壊されてしまう。そういう天災なだけ。

呆れと諦めがないまぜになった複雑な気分で、俺は自室の扉を開く。――と、

「――お帰り、アスタ。ご飯にする？　お風呂にする？　それとも、あ、た、し？」

下着姿の上に、前掛けを一枚だけ着けたというふざけた格好。おわあ、こいつ殴りたい。

そこに、やたら煽情的なメロを見つけた。

「……何してんだよ、この馬鹿……」

頭を抱え、なんとかそれだけを告げると、メロは一瞬で不機嫌そうな表情に変わる。

「むう、何その面白くない反応。せっかくあたしがサービスしてあげてるのに」

「何がサービスだ」心の底から嬉しくない。「誰に吹き込まれた？」

「マイ姉が、アスタに会ったらやってあげなって。きっと喜ぶって聞いたんだけどなー」

「……」

あの馬鹿姉貴は、たとえその場にいなくても俺に迷惑をかけてくるなあ……。

「どう？　どうっ？　嬉しくない？　興奮しない？」

「しない」

「ちぇ、面白くない反応。初めて会ったときは、『いつでも襲っていい』って言ってくれ

たのになー。だからあたしも『いつでも襲っていい』って答えたのに」

「そういう意味じゃないだろ、それ」

ちょっとした諍いから、互いに戦ったというだけに過ぎない。昔の話だ。

「ふんだ。つまんないのー！」

唇を尖らせて、メロはベッドに座り込む。……いや、さっさと着替えてくれないかな。

もう突っ込むのも馬鹿らしく、それ以上は何も言わず、俺は椅子に腰を下ろした。

そんな俺の様子が、それはそれで気に入ったらしい。メロは機嫌を持ち直したように、足をぱたぱたと揺らしていた。恥じらいってものがないのか、この女には。

「――で？」と、仕方なく俺は切り出した。「なんのつもりなんだ、メロ」

「えー、だから言ったじゃん。お疲れのアスタにサービスってしー――」

「そういうことじゃない」

首を振り、メロの言葉を途中で止めた。メロは表情を変えなかったが、その視線はわずかに鋭くなる。こちらを見透かそうとするような、それは魔術師の表情だった。

「わかってんだろ、そういう話じゃない。……姉貴の差し金なのか？」

俺は訊ねた。そう考えるのが、おそらくいちばん妥当だった。

「違うよ」だがメロは首を横に振る。「手紙に書いたでしょ。マイ姉、なんか今いろいろ

してるらしいし。あたしもほとんど会ってないから」

「……いろいろしてる、とか聞くだけでぞっとしないんだけど」

あのマイアが動いているという事実は、それだけで恐ろしいものがある。

そしてつい先日、迷宮で巻き込まれたあの一件。あのとき出会った枯れ草色の男は、俺のことを確かに知っているようだった。世間には知られていない俺の正体を。

無論、人の口に戸は立てられない。知っている人間なら知っているという事実の知らせと、とに違いはない。とはいえマイアがなんらかの活動を行っ先日の事件がほとんど同じ時期に被ったことが偶然だとは、

この世に偶然なんてない。――俺の師匠の言葉だ。あるのとは、その因果を解きほぐすための作業である。

だからこそ、《わからない》という状態を魔術師は極端に恐れる。俺は重ねて訊ねた。

「じゃあ、なんだよ。何が目的で、お前はオーステリアまで来たんだ？」

「……その質問。あたしも、そっくりそのままアスタに返すよ」

メロは今度、俺の問いに答えなかった。いつの間にだろう、彼女の顔から笑みが消えて

いる。

知らず息を呑んだ。室内の温度が少し下がった気がして、にもかかわらず汗が出た。

「アスタは、どうしてオーステリアに来たの？　それもあたしに黙ったまま」

立ち上がり、メロはまっすぐこちらを見据える。その透徹した瞳には、嘘も誤魔化しも許さないという意志が込められていた。それだけで、ひとつの魔術であるかのように。

だから、俺は正直に答える。

「……言っただろ、呪いを解く方法を探すためだよ。この学院なら、それが見つかる確率が高いと思ったから入学したんだ」

「ふうん」

メロは笑わない。その視線は今もまっすぐ俺を向いている。

「嘘じゃ、ないみたいだね」

「嘘なんかつくかよ」

「でも本当のことも言ってない」メロは笑わない。「――本当にそれだけ？」

「……さあ。冒険者をやってるのも大変だから、引退して静かに暮らそうとは思ってたな。それも理由と言えば理由かもな」

「相変わらずヒトを騙すのが上手いね、アスタは」

「失礼なことを言うなよ」
「でも、嘘をつくのは下手だ」
――寒気がする。知らずなかった。俺は両脇を締めていた。なんだかそれが錯覚だとは、思えなかった。俺はようやく直感する。
「……お前、まさか……っ！」
メロが――笑う。それが答えだった。
動いたのは同時だ。俺は机の上にあった灰皿を反射的に掴むと、部屋に撒く。だが灰は宙の中に巻き起こった風が一瞬のうちに散らしていた。舞うことなく、突如として部屋の痕跡を俺はルーンとして解釈できる。それを知っていたメロは、灰が文字になるのを防ぐ魔術だろう。灰が散れば、そこに突風を受け、窓の木戸が破砕された。灰皿はそのまま外に落ちていく。
間髪を容れず、俺は椅子ごと横に、部屋の扉側に向かって倒れ込むように飛んだ。そのまま突き破る勢いで扉に体当たりする――が、扉は凍りついたまうずくまる。メロが言った。
「――動いちゃダメだよ、アスタ。動いたら、攻撃するから肩に痛みが走り、俺はその場に肌寒い。
「この部屋の結界を……乗っ取りやがったな」

「うん、ちょっと術式を改造させてもらった。……いつでも襲っていいんでしょ？」

「その約束が、まだ有効だとは知らなかったな……」

寒気を感じていたのは、何も錯覚ではなかったということだ。

に作用をもたらしていたということ。正直、気づかなかった。メロを舐めていた。

俺は胸元を押さえて、蹲ったままに言う。

「……お前が、こんな精神干渉系の魔術を使うとは知らなかったな。盲点だったよ」

猪突猛進とも言うべき、攻撃偏重の魔術師だったはずなのに。いや、会わない間に彼女も変わっていたということなのだろう。俺が変わっていたように。誰もが変わるように。

「昨日、セルエのところに泊まったでしょ。そのとき、ちょっと」

「……術式を盗んできたのか。やってくれるよ、本当に」

確かに、セルエの研究室なら精神系の魔術に関する研究書くらいは置いてあるだろう。

そしてメロならば、適当に目を通すだけで似たような魔術を再現できるはずだ。

部屋の外に出られなかったのは結界のせいだ。一定の空間を区切るその魔術が、俺の通行を許さない。おそらくメロは、会話が始まってから術を起動した。入るときに気づかなかったのはそのせいだ。

「……どうして、こんなことを？」

俺は訊ねる。遠回しな手段を選ぶのは、なんだかメロらしくない。
「決まってるでしょ。確かめたかったからだよ」
メロは答えた。その手は今、ぴたりと俺に照準を向けている。命綱を握られているようなものだ。彼女の攻撃を、俺は持ち合わせていない。
「そんで確信した」メロは言う。「――弱くなったね、アスタ。昔のアスタなら、こんな不意打ちくらいどうとでも対処できたはずだよ」
「……勘弁してくれ。呪われてるんだぞ、お前を相手にできるわけがない」
俺は首を振った。失望の目で見られたところで、俺にはどうしようもない。
だがメロは、俺の言い訳になど聞く耳を持たなかった。
「違うよ、そうじゃないよね。あたしが言ってるのはそういうことじゃない」
「……」
「それに呪われたからでもないよね。アスタが弱くなったのは、呪われたときじゃない」
「……メロ」
「もう一度だけ訊くよ、どうして、あたしたちから逃げ出したの？」
「おい、メロ」
「答えてよ。まさかとは思うけど、もし解散したときのことを――」

「――危ないぞ、後ろ」

直後。メロの背後から音がする。ばがん、という何か固いものが弾けたような音だ。

メロは咄嗟に振り返った。さすがの反応だ。けれど、その行為に意味はない。なぜならその場所に、音の出る原因となるようなものなど何もないから。

「――なっ」

「動くな」驚くメロに、俺は一切動かず言葉だけで告げた。「と、そう返させてもらおう」

「……驚いたな。いつの間に……っていうか、何したのさ？」

「さあな。まあ俺だって、何も遊ぶためだけに学院に来たわけじゃない」

「ルーンは使えないよう、気を配ったつもりだったんだけどな」

動くな、と告げた言葉を完全に無視して、メロはこちらへ向き直る。ただし両手を挙げていた。降参を示すかのように。まあ、いずれにせよメロを攻撃する気などない。

「……さっきの音、戸が壊れたときの音とまったく同じだったね。《主神》かな。でも、いつの間に――？」

メロはきょろきょろ周囲を見回す。飛び散った木片を、床の溝を、壁についた傷跡を、脇に積み上げられた本を、俺が片手で押さえている胸の内側を。

「わかったか？」

「……ダメ。わっかんないや」
メロは嬉しそうに言った。俺は両肩を竦め、外套の内側から煙草と灰皿を取り出す。それから立ち上がり、机の燐寸を使って煙草に火をつけた。
「んー。ま、ただ腐ってるわけじゃなかったみたいだね。弱くなったってのは、ひとまず取り消すよ」
「んなことどうでもいいや」
「掃除はいいけど、弁償手伝えよ。どうすんだこれ。親父さん、キレると怖えぞ」
だからアスタんとこに来たんじゃん」
「少しくらい持ち歩けよなあ。言ったと思うけど、あたしぜんぜんお金持ってないよ？」
「だって、お金なんてほとんど教授のとこに置いてきちゃったし。アスタこそ昔稼いだ分くらい残ってるでしょ」
「……頓着しなさすぎだ。どうすんだよ、家賃倍になんだぞ」
「悪いが俺もここ来るとき、財産はほとんど教授に預けてきてんだよ。金はない」
「あー……考えてなかったや。どうしよ？」
「どうするもこうするもそんなものは決まっている。「働くしかないでしょ、そりゃ」
「んー、そっか」メロが口元を押さえる。「くくく、アスタと仕事なんて久々ー」

「嬉しそうに言うなよ。元はと言えば九割九分お前のせいなんだけど」
「ごめんごめん。謝るから、許してね？」
「……まあ、なんだ」
剣呑の消えたメロの様子に、俺も毒気を抜かれてしまう。
望させずに済んだだけ、幸運と考えるべきなのだろう。だから言った。
「――黙って出てきたのは、あれだ。俺も悪かったよ」
「いいよ」メロは笑う。「許してあげるね、アスタ」
「そりゃどうも……」
肺から紫煙を吐き出しながら、静かに俺はそう言った。
――さて、それはともかく。
さっきから下で怒鳴っている親父さんには、いったいなんて言い訳しよう。
「……まあいいや。善は急げというか、なんというか。おいメロ」
「ん、何ー？」
「今から出かけるから、ついて来い。――仕事を貰いに行くぞ」

※

「――で、どうして学院に来るわけ？」
隣のメロが首を傾げる。そう、俺たちは今、学院まで戻ってきていた。
親父さんには『魔術の実験に失敗しちゃった』と誤魔化しつつ謝っておき、それから逃げるように出てきたというわけだ。……本当ごめん。そのうち酒でも奢るとしよう。
さておき、オーステリア学院である。
普通、フリーの魔術師が仕事を探すとなれば、向かうのはたいてい管理局だ。魔術師にしかこなせないであろう危険な仕事をいくらでも斡旋してもらえる。そうでなくとも、迷宮で魔物を倒していれば、そこそこの収入にはなるわけだ。
だが今、オーステリア迷宮は先日の一件が影響して封鎖されている。それ以上に、ここをねぐらにする冒険者の狩り場を荒らすのは憚られた。土地には土地のルールがある。
そもそも俺は、楽に、かつ一気に稼ぎたいのだ。迷宮でちまちま稼ぐのは面倒である。冒険者は引退したのだから。そのために必要なものと言えば答えはひとつ。
「――コネだ」
「うわあ、悪どい」
愉快そうに笑うメロはともかくとして、管理局より美味しい仕事を斡旋してくれる伝手

に、俺は心当たりがあった。以前にも何度か紹介してもらっているからだ。

「学院にいる、まあ、友人がな。たまに仕事をくれるんだ。いし時間もかからない。おまけに口籠もる。微妙に口に出しづらかった。とはいえ、言わないわけにもいかない。

「へえ、そんなヒトがいるんだ。なんてヒト？」

メロの問いに、俺は一瞬だけ口籠もる。微妙に口に出しづらかった。とはいえ、言わないわけにもいかない。

「――彼女は、人呼んで《マッド・インベンター魔学発明狂》だ」

「え。何それ格好いい」

いや、悪いが俺はそう思わない。

※

彼女は主に学院の研究棟に出没、もとい棲息している。

メロを連れて根城まで向かい、研究室の扉を数度ほど叩いた。

「――ん。誰さね？」

中から声。ちょうど昨日、聞いたばかりの声でもある。

「俺だよ、アスタだ」
「ああ。オーケー、開けて構わないよ。ちょうどいいところに、ほさほさした伸ばし放題の乱髪。それは確かに、研究者に来てくれたね」
許可を得たので中に入る。相変わらず、制服の上から白衣という洒落っ気の皆無な格好
「いや、まさか本当に来てくれるとは思ってなかったよ、アスタ」
その容貌に反し、彼女は意外にも人当たりのいい笑みで迎えてくれる。職人気質の変わり者ではあるが、別に社交性がないわけではないというのが特徴なのだ。
――エイラ＝フルスティ。
レヴィやピトスとも知り合いである、この学院では最高の魔具職人だ。
「俺も実は、あんまり来る気はなかったんだけどな。早急に金が欲しくなって」
言いながらも、俺は視線をエイラに向けていなかった。別の人影があったからだ。
知らない少女だった。俺と同じか、たぶん少し下くらいの年齢に見える。メロよりは上のは珍しかった。
だろう。学院から特別に与えられたエイラの研究室に、この歳の人間が来ている
少女は、唐突に現れた俺を快く思ってはいない様子だ。鋭利な、それこそ敵意さえ感じさせるほどの視線で俺とメロを睨みつけている。邪魔をしてしまっただろうか。

「――商談だったのか？　多い部屋だ。彼女がある意味、学生の中ではいちばん有名な魔術師だということは言ったじゃないさ」

「いや、そういうわけじゃない。メロと同じく、学院の外側に名前が売れているという意味で。もともと、来客自体は彼女の創る魔術的な武装や道具は、学院外の冒険者から求められるほど性能がいい。そう。未だ学生でありながらも、その中で唯一、彼女はプロとして働いている。その稼ぎたるや、人生を数回は軽く遊んで暮らせるレベルだというのだから凄まじい。

腕利きの職人は、冒険者なんぞよりずっと儲かるのだ。

「この子は親戚だよ。遠縁だし、あまり似ちゃいないけどね。――仕事がいるんだって？」

「ああ。こっちの――」俺はメロに視線を投げて言う。「わがまま娘を、しばらく養わないといけなくなってな。ちょっと。わがままってどういうこと？」

「気にするな、褒め言葉だ」

「ならよし」

あっさり気をよくするメロはひとまず無視し、エイラに向き直る。彼女は一瞬、驚いたように目を見開いたが、すぐに破顔すると両腕を大きく開いた。

「かの有名な《天災》に会えるとは幸運だねえ。噂はかねがね。ルスティだ。まあ、しがない魔具職人さね」

「《天災》……？」

エイラの隣に立っていた少女が、怪訝そうに表情を変えた。そのたことにしていると、メロが言う。

「こっちこそ初めましてー。メロ＝メテオヴェルヌだよ。エイラもちろん。そっちのことはとりあえず見なかっ

「メロでいいよ。よろしくね？」

「まだまだ若輩さ。七星旅団の頭目には劣るよ」

「いやいや、謙遜しなくてもいいよ。エイラ、マイ姉とは結構気が合いそうだし」

「あの《辰砂の錬成師》と比べられるのは恥ずかしいけどね。そう言ってもらえるなら何よりさ。アタシはあまりモノを知らないけどね、それでも七星の錬金魔術師は尊敬に値するメロ、君も同じさね」

ると思っているのさ。それはたりだった。気が合うだろうとは思早速のように打ち解けるふなんだか、会わせてはいけないふたりを会わせてしまった気がしたが。

「それで、アスタ。仕事だったね」エイラがこちらに向き直る。「ちょうどいい案件があ

るんだ。こっちの子にも関わることなんだけどね」
「ちょ、ちょっと、エイラ姉……！」
「まあまあ。どうせひとりは行くんだ。何人か増えても構わないだろう？」
慌て始める隣の子を、エイラがあしらうように笑う。どういうことかと待っていると、やがてエイラはこんな風に口火を切った。
「――《銀色鼠》というクランを知っているかい？」
「……聞いたことはある気がするが。悪い、ちょっと思い出せない」
「そうかい。冒険者の界隈で、このところ名を上げてきているクランなんだけどね。そこから魔剣の製作を何本か依頼されているのさ。それを運んでほしいんだ」
「それだけでいいのか？」
つまりは運び屋。魔術師メロと同じで、エイラはただ《剣を鍛えてほしい》というような仕事だと考えるなら異質だ。
な仕事はまず請けない。自分の感性が、面白いと思うかどうかを優先する。
「察しがいいね」案の定、エイラは笑って言う。「もちろんそれだけじゃないのさ。それがこっちの子にも関わることで――っと。そういえば紹介がまだだったね」
先程から、不機嫌さを隠しもしないで黙っている少女。焦げた栗色のような髪に、勝ち

気であることが見ただけでわかるような水色の瞳。細身だがしなやかに鍛えられた体躯で、おそらくだが冒険者の類だろう。そんな彼女を指して、エイラが言う。

「この子は、その《銀色鼠(シルバーラット)》の団員でね。――ほら、挨拶くらいしな」

少女は、心底から嫌そうな表情を浮かべて、仕方なさそうに小さく名乗った。

「――フェオ＝リッター」

そして、それきり何も言わなくなる。なんだか、やけに敵視されているようだ。

まあ、手を突っ込んでわざわざ火傷をすることもない。それは流し、「アスタ＝セイエルだ。よろしく」とだけ言った。少女――フェオは何も答えない。

メロもまた黙ったままで、そんな様子を見ていたエイラは小さく苦笑を零していた。

「……ちょっと人見知りの強い子でね。気にしないであげてくれると嬉しい」

「別にそんなんじゃないけど」

とフェオ。フォローしてもらったのに、自分から崩すとは豪気なことだ。突っ込まないが。俺は小さく肩を揺らし、エイラに先を促した。

「うん。で、《銀色鼠(シルバーラット)》なんだが、近く南にあるタラス迷宮に挑む予定なんだよ」

「……それは、また」

その言葉には、さすがに少し驚いた。《挑む》ということは、つまり迷宮の攻略を目指

すという意味だ。ただ入るのとはわけが違う。言葉通り、命を懸けた挑戦だ。

なるほど、それでエイラに武器を頼んだということか。エイラの創る魔具はべらぼうに値が張る。それでも売れるのは、冒険者にとって文字通りの命綱になるからだ。親戚だという話だったし、多少は融通してもらえたのかもしれないが。それでも賭けだろう。

タラス迷宮とは、オーステリアから少し南に位置する迷宮だ。周囲には特に街もなく、だから頻繁に入るような人間もほとんどいない。いわゆる《未踏破迷宮》のひとつだ。

昨今では、命と誇りを賭し迷宮に挑む冒険者なんて稀な存在だ。それでも一時期よりは数も増えているらしく、その要因には七星旅団が五大迷宮の一角を踏破してしまったことも絡んでいると聞く。いつの時代も、迷宮攻略は人々にとって夢と浪漫の象徴なのだ。

クラン《銀色鼠》もまた、そんな夢を追う団体のひとつということだろう。

「もちろん、別に迷宮攻略まで手伝え、なんて言うつもりはないよ。それをアタシが依頼するのもおかしいからね」

エイラはそう言い、俺は肩を竦めて返答する。

「そりゃな。頼まれたって嫌だよ」

「ただね」エイラはふと視線を切って、ここではないどこかを見詰めた。「頼まれればやる人間だって、もちろん世の中にはいるわけさ」

「……なんの話だ？」

「いるんだよ、学院から迷宮に向かった人間が。銀色鼠（シルバーラット）だって本気だからね。万全を期すために、魔術師（まじゅつし）を呼んできたってわけさ」

「学院生で、攻略に入った奴（やつ）がいるのか？　だから紹介（しょうかい）したのさ」

エイラは一瞬だけ間を空けて、意外な名前を口にした。

「――ピトスだよ」

正直、予想していなかった名前だ。

いや、呼ばれた理由はわかる。治癒（ちゆ）魔術を使える人間は稀少（きしょう）だ。おそらく銀色鼠（シルバーラット）には治癒魔術師が所属していないのだろう。だが迷宮を攻略するに当たって、治癒魔術師がいるといないとでは話が大きく変わってくる。というか、その存在なしに迷宮へ挑むなど自殺行為でしかない。七星旅団（セブンスターズ）にだって、治癒魔術の使い手がひとり所属していたのだから。

本来、迷宮攻略とは数十人で徒党を組んで、万全の状態で行うものである。かつての俺たちのように、少人数で突っ込んでいくなど本来は絶対にあり得ない。銀色鼠（シルバーラット）のように、必要な技術を持つ人間を外部から呼んでくるのは、決して珍しいことじゃなかった。

「しかし、ピトスがね……。こう言っちゃなんだが、意外だな」

あの小柄（こがら）な少女が、わざわざ自分と無関係のクランに協力して、迷宮に挑むような性格

だとは正直思っていなかった。けれど、エイラは大きく首を振って言う。
「いや、そうでもないさ。あの子はもともと、自分の技能を――治癒を求められたら断らない。むしろ自分から、積極的に傷を治して回るくらいはするよ。誰かが傷を負うのを、見ていられない性格なのさ」
「……そうか。確かにこの前も、そんな感じだった気はするが」
有無を言わせないというか、いっそ治療のためなら手段を選ばないくらいだった。
「ただ、それもいいことばかりじゃないっていうかね……正直、ちょっと心配なんだよ」
「確かに迷宮攻略となると命懸けだが、心配されるほどの腕前でもないだろ、ピトスは」
「技量は信頼してるよ。レヴィといいピトスといい、学生とは思えないからね。アタシは戦うほうはからっきしだけど、それでもあの子が強いってことは知ってる。だから、これは魔術師として言ってるわけじゃないのさ」
エイラは言う。魔術師ならば、そんなものは自己責任だと切り捨てるのが普通だろう。そもそもピトスほどの技量があるのなら、心配するようなことはないとさえ言えた。
エイラはきっと、魔術師としてではなく、友人として言葉にしたのだろう。
「ピトスは苛烈だよ。だけど、だからこそ同時に脆くもある。命を大事にする、なんて言えば聞こえはいいけどね。あの子は死が怖いんじゃない。ただ、許せないんだ」

「ヒトが死ぬのが、許せない……ね」
「そう。優しいってわけじゃないんだろうね。ピトスのアレは、たぶん怒りだ。許せないんだよ、誰かが傷を負うっていうこと、それ自体が。いっそ強迫観念さ。もちろんどうしようもないことはある。だからあの子は、せめて自分で治そうとするのさ。――だから心配なのだと、エイラは言う。
許せないから。認められないから。目の前で誰かが傷つくということが。なるほどそれは確かに優しいのではなく、むしろ傲慢だと言えるだろう。
その片鱗は少し前に迷宮で見ていた。あのとき、ピトスは幻獣を――少なくとも本人はそう思っていた存在を前にしながら、俺たちに助けを求めなかった。
むしろ来るなとさえ言ったほどだ。
それは、きっと普通じゃない。自らの命を天秤にかけて、その上で彼女は他者を選んだということなのだから。
「別に、何をしてほしいってこともないけどね。あの子が無茶をやらかさないか、少しだけ見ててやってくれないかな」
「……そう言われてもな」エイラの言葉を受け、俺は溜息混じりに頭を掻いた。「ピトスも魔術師だ。別にガキってわけでもない。そんなん邪魔だと思われるだけかもしれないぜ」

「承知の上さね」エイラは笑った。「だから依頼ってわけじゃないのお願い。……友人として、アタシの友人をよろしく頼みたいだけさ」

「……ここでその言葉を持ち出してくる辺り、大概お前も性格悪いな」

「アンタの使い方は、レヴィから聞いたばかりだったからね」

屈託なくエイラは微笑んだ。まったく、みんなしてレヴィから悪影響を受けすぎだ。

「……わかったよ。まあ俺は攻略には参加しないだろうし、何ができるかなんて知らないけど。それとなく、見ておくくらいはしてもいい」

「助かるよ」

微笑むエイラから視線を逸らした。実際、やれることなんて限られている。

「ちょっと待ってくれ。契約書ならその辺りに予備が――」

「いや、適当でいい」その言葉には首を振った。「その辺は信頼してる。いつからだ？」

「……明日にはすぐ、だね。足はこっちで手配しておくから、夜明け頃に南の外門前まで来てくれれば。でも……いいのかい？　金がいるんだろう？」

「ま、それはそうだけどな」

肩を竦め、話は終わりだとメロを外まで押す。先に出たメロに続く形で扉を出ながら、振り返らずにこう告げた。

「友人からの頼みなら、契約なんて形にするもんじゃないだろ」
「……くく。レヴィの言ってた通りだね」
俺の言葉に、エイラは嫌な感じの笑いを見せた。首だけで振り向いて睨みつけると、
「『あいつは意外とカッコつけだ』って聞いてたからね。なるほどと思ったよ」
「……高くつくぞ。友人からでも金は取る」
「もちろん、いくらでも」
その言葉を最後に、俺は扉を閉めて部屋を去る。
しかし、なんだか厄介なことになりそうだ。こういう勘だけは当たるものだから、今からそれで不気味だった。
らすでに気が重い。先程からメロが何も言わないのも、それはそれで不気味だった。
それにフェオという少女が、話の間、ずっと俺を睨んでいたことも。
――楽な仕事を探しに来たつもりが、どうして不安を持ち帰ることになるのやら。

第三話　銀色（シルバー）の鼠（ラット）

翌朝。まだ日も明けぬほどの時間。

オーステリアの街の南端（なんたん）に位置する城門の前を、俺はメロと連れ立って訪（おとず）れた。普段（ふだん）と変わらぬ学生服の上に、いつもと同じ外套（ローブ）を羽織る。胸には紫（むらさき）の宝石が嵌（は）まった装身具（アクセサリー）をつけた。メロも冒険者らしい軽装で、こちらは藍色（あいいろ）の宝石が嵌まった首輪（チョーカー）を装備している。

これはかつて義姉（マイア）が作った旅団員に揃（そろ）いの魔具で、それぞれ色違（いろちが）いに、別々の装飾品（そうしょくひん）という具合だ。

エなら橙色（だいだいいろ）の宝石が嵌められた腕輪（レスレット）という具合だ。

けじゃない。魔具というよりはそれこそ単なる飾（かざ）りでしかない。

分の問題だ。

さておき、俺たちは道の端（はし）に停（と）められている馬車へと近づいていく。タラス迷宮までの移動手段として、エイラが用意したものだ。魔術で錠（じょう）がかかっている。

そのすぐ横にはひとりの少女。こちらに気づくと、笑顔（えがお）を見せて頭を下げる。

ピトス＝ウォーターハウスだった。

「――おはようございます、アスタさん。メロさんも」

俺たちを見ると、彼女はほんの一瞬だけ驚いたような表情を見せた。けれどそれもすぐに隠され、いつも通りの柔らかな笑みでこちらに挨拶を述べる。

「意外だったか、俺たちが来るのは？」

「ええ」訊ねると、ピトスは素直に頷いた。「エイラさんから同行者が三人いるとは伺ってましたけど、まさかアスタさんたちだとは思ってませんでした」

「ま、いろいろあってな。といっても、俺らの仕事は運ぶことだけだけどな。といっても、別に何もないとは思いますけれど」

「いえ、ありがとうございます。おふたりなら安心ですね。」

「そう願うよ」道中だけではなく、現地でも同じように。「それで、もうひとりの、えっと……フェオはまだか？」

「フェオ、さん……ですか？　えっと……」

「……ん？」

と俺は首を傾げる。ピトスの様子は、フェオがどこにいるのかわからないというより、そもそもフェオという名前に聞き覚えがないという感じだった。

なんだか奇妙な食い違いを感じ、自然と眉根が寄っていく。そのときだった。

「さーて。出ーてこないと撃っちゃーうぞぉー？」
なんだかやけに間延びした口調で、メロがそんな風に口を開いた。その視線は俺たちのほうではなく、まったく別の道に向けられている。その先に誰かいるのだろうか。
そんなことを思っていると。
「十秒以内ねー。十、九、……飛んで零ー！」
いきなり、メロが通りの先に魔弾を撃ち込んだ。圧縮された魔力の塊が、物理的な威力を伴って道の先へと向かっていく。
「――ひゃあぁっ!?」
なんだか可愛らしい悲鳴が、陰になった通りの先から聞こえてきた。誰かいたらしい。
……っていうか。
「いきなり何してんだ、お前!?」
「や、だって誰か隠れてたみたいだから。出てきてもらおうかと思って」
「だったら口で言えよー」
「言ったじゃん。でも遅いから、つい。てへっ」
てへっ、じゃない。本当に俺の意表を突くことしかしないな、こいつは。
「も、もう、もう……なんなの、もうっ!?」

通りの奥から、ちょっと泣き声になった少女が服を払いながら飛び出てくる。幸い怪我はないらしい。いくらメロでも、さすがに直撃させるまではしなかったか。

通りの陰の向こうから、流れて出てきた白の色。その姿に

「……で。なんでこんなところにいるんだ、シャル？」

「なんでって、エイラに言われて、仕事で来たからに決まってんでしょ」

咳き込みながら、シャルロット＝セイエルが姿を現した。涙で滲んでいる。そりゃいきなり攻撃されたら、驚くくらい

「もうひとりってのはシャルのことか。なんつーか、おはよう」

「おはよう、じゃない！」

シャルが怒鳴る。当たり前だったが。……なんかごめん。

「なんでっ？　なんでわたし、いきなり攻撃されなきゃいけないから、かな？」メロの前で。

「あー。えっと……隠れてた決まってるじゃん！　誰が来るかと思うんだが……」

「何それ!?　てか隠れるにも知らないのに！」

「いや、決まってはいないわけっ!?」

「だって初対面の相手とすぐ話すとか難易度高――いや、じゃなくて!!」

慌てているからか、なんだか酷く情けないことを言いかけたシャル。すんでのところで

堪えると、視線の矛先をメロに向けた。蒼い瞳に火が灯る。
「ていうかあんた、誰!?」
「メロだよ」ものすごい普通に答えるメロ。「メロ＝メテオヴェルヌ。そっちはシャルっていうんだね？　ま、よろしく！」
「普通か!?」芸人みたいな突っ込みをするシャルだった。「てかなんでいきなり撃つ!?」
「隠れてたからだけど」
「誰かが隠れてたらいきなり攻撃するの!?」
「するよ。――するに決まってるじゃん、何言ってんの？」
メロは真顔で言い切った。正しいのは自分だと、一切憚ることがない。
シャルが押されたように、「うっ」と呻く。多少の理があることを悟ったようだ。その隙を逃すことなく、メロはさらに理屈を貼りつけた。
「あたしは冒険者だよ？　誰かが隠れて窺ってたら、判断するより先に敵だって決めつけることもあるよ。何かあってからじゃ遅いもん。当たり前のことだと思うけど」
「う、ぐ」
「だから気をつけたほうがいいと思うな。これ、あたしからの忠告ね。年下かもしれないけど、あたしのほうが冒険者としては先輩になるわけだし」

「ぐ……ぬ」

言い負かされるシャルだった。いやいや、騙されてるよ、シャル。言わないけど。

と、歯噛みしていたシャルがふと、何かに気づいたかのように目を細める。探るような視線でメロを見詰めると、やがて呟くような声音で、

「あれ……メロ？　メロ＝メテオヴェルヌ？」

「そう言ったけど」

「……あの有名な、《天災》？」

「そうとも言われるね」

「……えっ？」

蒼い瞳を真ん丸に見開いて、シャルが俺のほうを見た。俺は頷きだけを返す。

メロのことはだいぶ噂になっていたはずだが、どうやらシャルは知らなかったようだ。話す相手がひとりもいないから、噂が届かなかったのだろう。……悲しすぎる。

「まあまあ、よろしくお願いするよ、シャルー」

シャルに近づき、その手を取ってぶんぶんと振るメロ。完全に誤魔化されたシャルは、「え、あ、うん……」と流されるがままに頷いている。

俺はピトスと目を合わせ、お互い軽く苦笑を交わした。刺々しい割に、どうやらシャル

は押されると弱い。軽く肩を竦め、俺は「さて」と呟いてから馬車に近づいた。
外套から煙草を取り出し、
「一服するから、先に乗ってて」
火をつけてから告げる。ピトス、シャル、そしてメロの順で、三人が馬車に乗り込んだ。
御者は自動的に俺だ。まあ、こういうのは野郎の仕事だろう。馬車の操縦技術なんて、地球にいたままなら絶対に身につかなかっただろうけど、と思わず苦笑する。明け方の空に向かって、紫煙がひと筋に伸びていった。……さて。
「――《秘密》」
呟き、煙を軽く振る。魔力を帯びたそれは、まるで意志を持ったかのように馬車の周囲を取り囲む。たとえるなら、夜の霧が視界を隠すかのように。
《秘密》のルーンは本来、賭けごとなどに用いるダイスカップをもしルーン占いで《秘密》を引いたなら、それは予想外の幸運、偶然性でもって訪れるだろう事態の好転、ラッキーチャンスを示している。だが俺なら、その解釈を魔力で歪め、外部の目から秘密を守る《隠匿》の魔術として成立させることが可能だった。
メロは言った。――隠れているから攻撃した、と。
裏を返せば、メロはひと言だってシャルを狙ったとは言っていない。むしろ厳密には、

メロはシャルに攻撃さえしていない。シャルはただ余波に巻き込まれただけだ。

つまり、メロは隠れている、誰かに攻撃はしたが、それはシャルではないということ。

――誰かに見張られていたわけだ。

メロは、あんな風にいきなり攻撃を加えるようなことはしない。いや、普通にするかもしれないが、少なくともその相手にシャルを選んだりはしない。これは絶対だ。

俺は気づくことさえなかった誰かにメロが気づいたのは、魔術の技量によるものではない。言うなれば本能だ。彼女は他者から向けられる悪意を、獣が如く、メロは危険を感じ取る。

理屈で考えるのなら、それこそ野生の殺意を、誰より敏感に察知する。

世界の人間は誰もが魔力を持っている。もちろん熟達した使い手ならばその気配を隠すことも可能だが、メロはその気配に対する感度が人並み外れて高い――のだと思う。感情の動きに左右される魔力から、ただ感覚だけで相手の思考を読み取るわけだ。

まあ、本当に野性的な本能でないとわかっているシャルに攻撃はしない。なら別のものを狙ったのだ。

その後の様子を見るに、おそらくは逃げられたのだろう。

だったのかもしれない。攻撃する前に、わざわざ予告までしているのだから。

一度目は見逃すが、二度目は知らないと。彼女は暗にそう告げた。

馬車に《秘密》をかけたのは、念のためということだ。魔術を用いての尾行や盗聴なら、このルーンである程度まで防ぐことができる。馬車の中ではメロが今頃、ふたりにこの事実を伝えていることだろう。……はてさて、本当に厄介なことになりそうだ。

「どう見たものかな……」

煙草の火を揉み消し、携帯灰皿に投げ込んでから、俺は小さく呟いた。

気になるのは、いったい誰が、見られていたのかという点だ。

真っ当に考えるならメロだろう。方々で暴れ回っているメロのように監視されていて特におかしくない。問題は、だからこそ俺か、ピトスか、シャルか。あるいは全員纏めて監視されていたのか。

それが懸念ではある。普通に考えるなら、いくらなんでもメロの一件だ。

子かは措くとして――監視はつかない。

気にかかるのは、先日に巻き込まれたオーステリア迷宮で巻き込まれた。犯人は俺を知っていた。メロが現れた。これから俺たちは迷宮で事件に巻き込まれた。犯人は俺を知っていた。メロが現れた。これから行くのもまた迷宮だ。なんの確証もないとはいえ、ちょっとタイミングがおかしい。

――俺たち四人の旅路は、大きな不安を抱いたまま幕を切るのだった。

※

タラスまでの道のりは、ゆっくり徒歩で向かってもせいぜい半日少々だろう。馬車で行くならもっと速度を抑えても数時間といったところか。午前中には着くはずだ。旅というには、だから少し短すぎるくらいだった。

オーステリア近辺は国内でも最も治安がいい。途中で盗賊に行き遭うようなこともないだろう。実際、俺たちはなんの問題もなくタラスへと辿り着いた。誰かから見られているような気配もなく、平穏な行程だったと言える。

ただ車中の雰囲気は、決して心地がいいものだとまずいというほどではないにしろは言えなかった。シャルは終始無言を貫いて交流を拒否する姿勢だし、一見して機嫌よく笑顔を見せるメロも口を開いたりはしなかった。会話があったのは、ほぼ俺とピトスの間だけだ。それも、なんだか義務感から雑談をしているような気分になる。

オーステリア迷宮に潜った際、レヴィの存在がどれほどの助けになっていたことか。俺は今さらのように、彼女のありがたさを実感するのだった。

「……なあ、ピトス？」

道中、いつしか眠りこけたメロと、黙ったまま口を開かないシャルはひとまず無視し、俺はピトスに声をかけた。ちょうどいい機会だと思ったからだ。
「なんですか、アスタさん？」
ピトスは静かに答えたが、きっといつも通りの笑顔なのだろう。前を見る俺に彼女の姿は見えないが、
「いや。今回の仕事、どうして請けたのかと思ってな。ちょっと気になってたから」
「どうして、と言われましても」
「わざわざ外の依頼を受けてまで迷宮に行くなんて思わなかった。正直、結構意外だよ」
「……アスタさんは嫌そうでしたもんね、前のとき」
苦笑するピトスに肩を竦め、
「当たり前だろ。レヴィに連行されてなきゃ、迷宮なんざ絶対行かない」
「その割には、レヴィさんに『戻れ』って言われたとき、自分から残ってましたけど」
「ありゃ厄介なことが起きてそうだったからだよ。放置するほうが面倒だろ」
「とても助かりました」話題が変えられたことには気づいていたが、「ありがとうございました、アスタさん。そういえば、まだちゃんとお礼は言ってませんでしたっけ」
「言われたような気もするけど。そもそも礼を言われるようなことでもない。俺のほうも

世話になったしな。自爆したとき治してくれたろ？　あれは助かった」

「それが取り柄ですから。今後ともよろしくです」

「……いや、二度目はねえよ。もうあんな面倒な事態に巻き込まれたくない」

「これは仕事をしてるだけだ」

「とか言って、今回も来てくださったじゃないですか」

「……アスタさんって意外と面倒見いいですよね、なんだかんだ言いながら。なんでしょう、お兄ちゃん気質っていうんですかね」

「やめてくれ……どこに突っ込めばいいのかわからん」

あはは、と楽しげに笑うピトスの声。いつも微笑んでいる彼女が、そういえば、こんな風に声を出して笑うのを見るのは珍しい気がした。

「……妙な期待を持たれるのは苦手なんだ」

俺は言う。それは経験論だった。

「期待されれば自負が生まれる。自信を持ってしまう。それを悪いことだとは言わない。けれど。誰だって、きっと魔法使いにだって――何もかもができるわけじゃない。それで数え切れないほど失敗してきた。なら、荷物は少ないほうがいい。俺の話はいいだろ。お前はどうなんだよ？」

軽く首を振り、ピトスに問う。彼女はいつもと変わらぬ口調で、
「わたしですか？」
「言っちゃなんだが、普通は請けないだろ、こんな仕事。こんなピトスにもわかっているはずだ。オーステリアの迷宮で、いた連中。そいつらが、近隣の迷宮で同じことをしていない保証がどこにある。
もちろん可能性は低い。だが可能性がある時点で充分だ。あから。普通なら、しばらくは迷宮に入りたくないと思うはずだ連中の手伝いをするなんて、俺には考えられなかった。それは「実際、さっきも誰かに見られてたんだ。きな臭いにもほどがある」
「何かあるって、決まったわけじゃないでしょう？　思い過ごしかもしれません」
「そうだな。でも、何もないと考えるのは楽観的すぎるだろ」
「そうですね」
ピトスの口調は淡々としかにも怪しげな実験をしてれだけのことがあったのだ。まして会ったこともない魔術師の思考じゃない。
であるかのように。
しばし互いに無言になる。俺は何も言わず、ただピトスの言葉を待った。
やがて彼女は、ぽつりと小声で語り出す。まるでそのとき、何かを諦めたかのように。

「もしわたしが、何かが起きるかもしれないから、来たんですか？」

「……治癒魔術師だからってこと？」

虚を突かれ、けれどすぐに訊き返す。ピトスが今どんな表情をしているのかは、もうわからなくなっていた。

「それもあります。それだけではないですけれどね。わたしがこうして必要とされている。それだけで、きっと理由には充分だと思うんです」

「そりゃ、ご立派なことで」

「そうじゃありません。――知らないんですか、アスタさん」

弾むような声で。けれど何かを含んでいるかのように。

ピトスは、当たり前のことを口にした。

「命は、とても大事なものなんですよ？」

※

そいつはとんだ皮肉だ、と俺は笑わなかった。

――タラスに街はない。平原の真ん中に、ふと地下迷宮が広がっているのがタラスという土地だ。地球ならあり得ないことでも、この世界ならばよくあることだ。

迷宮は地下およそ五十層前後。深さ的にはオーステリア以上だが、一階層分の広さを比べるとオーステリア迷宮より狭くなる。狭い通路が迷路のように入り組んだ構造で、魔物の出現率も高め。最大到達深度は地下十一層で、つまるところ最深部に辿り着いた人間は誰もいない。未踏破迷宮。冒険者からさえ見放された場所ということだ。

攻略を目指すならば、狙い目の難易度だとも言える。管理局は一応、建物としては存在するものの、冒険者はみんなオーステリアに向かってしまうため無人だった。

「一応言っておくけど、問題は起こすなよ。特にメロ」

迷宮の周囲に、天幕がいくつも見えてきたところで俺は言う。銀色鼠が拠点にしているのだろうが、そう多くの人数がいるようではなかった。

「なーんであたしだけ……」

「当たり前だろ」不満げなメロに細めた目を向ける。「大人しくしていろとは言わんが、迷惑だけはかけてくれるなよ。俺に。――いいか、俺にだ」

「自分だけ強調するなあ」

どうせ無理に決まっているのだから、言うだけ言わせてもらうということだ。

そのまま俺はキャンプ地の外側に馬車を停める。飛び降り、改めてクラン《銀色鼠》の陣容を眺めた。三人も続いて降りてくる。

一見して、《若い》というのが真っ先に抱いた感想だ。いや、ここまで来ると《幼い》と形容したほうが近いかもしれない。こちらへ飛んでくるいくつもの視線は、平均して十代前半くらいのものが多い。最も幼いところで六、七歳くらいに見えるのもいた。

――迷宮攻略クラン《銀色鼠》。

その団長はシルヴィア＝リッターという名の、元は王国騎士を務めていた剣士だ。

王国の正規兵という、食うには一生困らないだろう仕事を持っていながら、一年ほど前に突如として冒険者に転身したらしい。そこそこ程度には家柄のある血筋らしく、周囲からは当然のように猛反対を受けたようだが、その一切を無視して銀色鼠を設立、今に至ると聞く。冒険者クランとしては、かなり新興の団体ということだ。

そんなシルヴィア率いる《銀色鼠》は、新鋭のクランとしては異例と言っていい速度で規模を拡張。団員は現在で五十余名まで増加し、今回ついに初の迷宮攻略に乗り出した。

その裏には団長であるシルヴィア＝リッターの実力と、それに伴うカリスマ性が大きく関わっているという。若い人間が多いのは、未だ三十にも満たないシルヴィアに惹かれて入団した者が大半だから。そのせいで人数の割に実力者が少なく、まともに冒険者を名乗

れるのは年長の数名だけだと聞く。来る者を拒まなすぎたせいもあるだろう。

　というような事情を、俺は昨日のうちに入手しておいた。街の冒険者たちに酒場で一杯奢れば、こういった情報は簡単に集まる。もともと、近隣では有名なクランだった。

　単純に、団長シルヴィア＝リッターが人目を惹く容姿をしていることも大きい。

　金属を飴状になるまで細く鎔かしたようと評される銀の長髪は美しく、見る者を射抜く切れ長の双眸はまるで凍りついた水色の花弁だ……とかなんとか言われていた。

　そこからついた二つ名が、曰く《銀嶺の氷華》――。

　背筋が痒くなってくるので、その点についてのコメントは控えさせてもらおう。

　いずれにせよ今、最も話題の冒険者集団であることは間違いない。

「――えーと、すみませーん！　どなたかよろしいですかー？」

　天幕のほうへと進みながら、軽い感じで声を上げた。それより前から視線は突き刺さりまくっていたものの、これでさらに注目度が上昇。そんなに学生が珍しいかな。

　銀色鼠の団員たちから刺さる好奇と警戒、疑念の入り交じった視線。居心地悪そうに、シャルが小さく身じろぎした。意外にもピトスは平気らしく、常と変わらない笑みを浮かべている。メロに関しては言うまでもないだろう。気にするわけがない。

若い団員たちは、どう反応するべきか迷っている様子だった。遠巻きにこちらを眺めるだけで、言葉はひとつも返ってこない。冒険者クランというより、もはや幼年学校だ。

あるいは、孤児を収容する施設と言ってもいい。

「エイラ＝フルスティから依頼された荷物を運んできた者です！」

再び叫んだ。反応は、そこでようやく返ってきた。

「――ちょ、ちょっと待って！」

奥の天幕から現れた影を見て、俺はわずかに目を見開く。

どこか威圧するような様子を見せながら近づいてくると、大きな声で叫んだ。

「悪いですけど、それ以上わたしたちの領域に入ってこないでもらえますか？」

明確すぎるほどに、それは敵意が前面に押し出された態度だった。お前たちのことなど一切信用していないと、誰が見てもわかるよう示している。

驚きはしなかった。彼女は、昨日会ったときから俺たちに敵意を向けていたのだから。

俺は、その一切を無視して笑顔で言う。売られた喧嘩を、わざわざ買う理由はない。

「えっと、フェオさんだったよね」

フェオ＝リッター。昨日出会った、銀色鼠の一員だという少女だ。昨日にも増して鋭い気配を纏う彼女は、言うなれば、まるで抜き身の刀のようだ。

姓からして、おそらく団長であるシルヴィア＝リッターの身内だろう。たぶん妹とかだと思う。ならば心証を悪くするのは避けるべきだ。と、俺はそう考えていたのだ、が。

「馴れ馴れしく名前で呼ばないでください。エイラ姉の前だからって大人しくしてれば、図に乗って。気持ち悪いんですけど」

……うわあ。と呻きたくなるほどに一刀両断。いやまあ、いいんだけど。

「それはごめん。じゃあリッターさんで。昨日振りだね。まさかひとりでこっちに来てるとは思わなかったよ。てっきり一緒に行くものだと思ってたから」

「あなたたちなんかと一緒に行くわけないでしょう。何言ってるんですか」

――あ？　と、キレた声を発したのは俺じゃない。シャルだった。煽り耐性がメロより低い。コミュニケーション能力がないはずだ。こんなことでいちいち怒るなよ……。

挑発に乗って、話が拗れても困る。シャルが何か言い出すより先に、俺が口を開いた。

「えーと！　荷物なんだけど、どこに運べばいいかな？」

「置いといていただければ結構です。それより早く帰ってください」

「そう言われても、こっちも仕事だからさ。責任者にしっかり渡さないと」

「じゃあわたしが責任者です」

「言い換えるね。団長であるシルヴィア＝リッターさんに渡さないと」

「シルヴィアはわたしの姉です。問題ないんじゃないですか？」
「そうなんだ。そういえば苗字が同じだったね」
「気づいてなかったんですか？　オーステリアの学生は優秀だって聞いてましたけど、意外と間抜けなんですね」
背後で、メロが腹を抱えて笑いを堪えている。気配だけでそれがわかった。シャルはもう完全にキレているし、ピトスは苦笑い。……なんだかなあ、もう。
「いずれにせよ」俺はあくまで笑顔で告げる。「妹だろうと、シルヴィアさん本人じゃないなら渡せない。入るなって言うなら従うけど、それならお姉さんを呼んできてもらえるかな？」
「……わかり、ました」
心底嫌そうに、時間をかけてフェオは頷く。こちらは完全に正論で、突っかかってきているのはフェオの側だけ。となれば、やがては向こうが折れざるを得ない。
「呼んできますので、向こうで待っていてもらえますか」
俺たちが乗ってきた馬車のほうに視線をやり、《向こうで》を強調してフェオは言う。俺は一度だけフェオの後ろに目をやり、それから笑顔を戻して告げた。
「できれば挨拶もしたいから、ひとり同行させてもいいかな？」

「……入らないでほしいって言ったの、聞いてなかったんですか？」
「聞いてたよ。だから僕は入らない。代わりに彼女が行く、それなら大丈夫だよね？」
なにせ。と俺はピトスを示して笑う。満面の笑みを作ってやる。
「彼女は攻略に参加するひとりだ。まさか入るなとは言わないだろ？」
「む、ぐ……う」わずかに唸り。「……いえ、それもまだ許可は取っていないので、まずは話を通してから――」
「そもそもここ、別に君らの私有地じゃないよね？」
「い、今さらそんなこと言う!?」
――なんつーか。面白いな、この子。からかい甲斐があるというか。
最近、主に振り回される側だったからなあ。なんだか新鮮な気分になってしまう。喧嘩を売っているのは向こう側で、しかも俺は買っていないのだから、罪悪感も覚えないし。
とはいえ、馬鹿ができるのはここまでのようだ。奥にある最も大きな天幕から、呆れ顔の男が歩いてくるのが先程から見えていた。年齢からするに、おそらく幹部クラスだろう。
その男が、背後からフェオの頭に手刀を落とす。
「何をしてんだよ、お前ェはよぉオ」
「いったあっ!?」

割とイイトコロに入ったらしい。フェオが涙目になって蹲る。男はそちらを一瞥もせず、俺たちに向き直ると頭を下げた。

「すまねェな。ウチのが世話かけたみてェだ、どうか謝らせてくれや」

「いえ、お気になさらず。――貴方は？」

「ガスト＝レイヴ。一応このクランの幹部ってことになってる」

「初めまして。アスタ＝セイエルです」

快活に笑う男――ガストと握手を交わす。やや日に焼けた肌は、細身ながらよく鍛えられていた。動きやすく、そして汚れても構わないのだろうかにも安価な服は、なるほど冒険者らしい格好だ。くすんだ金髪に、緑の瞳は切れ長で、割と強面ではあった。

「おう。話は聞いてんぜ――まあ、まずはこっちまで来てくれや」

もな。ゆっくりしてってくれて構わねえぜ。――おい、フェオ」

ぎろ、とガストの鋭い視線がフェオに向く。フェオは頭を押さえたまま、けれど怯まず睨み返すようにガストを見上げる。

「……何？」

「お前ェはチビどもの面倒を見とけ。こっちに顔出すんじゃねえぞ」

「な、なんで。わたしもそっちに――」

「お前ェは今回の件に関わらねェ約束だろ。いいから聞いとけ、わかったな？」

「……」

不服そうなフェオ。やり取りの意味はわからないが、察するに、フェオは迷宮攻略の本隊に入ってはいないということだろうか。……少しだけ、それは意外だった。

たぶん、フェオは強い。魔術師としては知らないが、筋肉の付き方や立ち居振る舞いを見るに、高い錬度で武術を修めているはずだ。腰の得物が飾りでなければ、おそらくは剣士なのだろう。そういえば、シルヴィア＝リッターは元王国騎士だったか。

単純に言えば、騎士とは王国に仕える《武器を持った》魔術師のことである。その身内ならば、剣術の手解きくらい受けていてもおかしくない。

しかし、と俺は考える。辺りでこちらを見守る若い団員には、迷宮の深部へ挑めるほどの実力はないだろう。大半は子どもばかりだ。フェオに察知されずあっさり忍び寄った辺り、ガストはそれなりに心得があるのだろうが、そのレベルがほかにもいるのだろうか。

「そう拗ねた顔すんじゃねェよ。また機会くらいあらァ」

「わっ……!?」

ガストが破顔して、フェオの頭を乱暴に撫でる。顔は厳ついが、これで案外、面倒見の

いい男らしい。銀色鼠（シルバーラット）における、兄貴分といったところなのだろう。

「さて、お客人」

フェオの頭をぐしゃぐしゃにしながら（慰（なぐさ）めているにしては容赦（ようしゃ）がない）、ガストがこちらに向き直って笑う。

「――団長のトコまで案内すらァ。ついて来な」

※

俺たち四人は、揃って天幕の中に案内される。さきほどガストが出てきた、いちばん目立つ天幕だ。おそらく攻略本部だろう。

中には大きな机がひとつと、地図や武器、あるいは備蓄（びちく）と思（おぼ）しきものが乱雑に散らばっていた。片づいているとは言えない様相だが、まあ、冒険者などそんなものだ。

実際、そんなものを気にする暇（ひま）はなかった。

「――よく来てくれた。ありがとう、まずは掛（か）けてくれないか」

流れる銀髪（ぎんぱつ）。顔立ちは、フェオからあどけなさと幼さを引き、代わりに凛々（りり）しさと自信を足したようだった。同じ水色の瞳が、姉妹であることを言われずとも確信させる。

銀色鼠（シルバーラット）の団長――シルヴィア＝リッターだろう。入口のすぐ脇で、彼女は立ったまま俺たちを待っていた。妹より涼（すず）やかなのに、妹よりも優（やさ）しげなまさか入るなりその場にいるとは、少々失礼ながら意外だった。

というのも、こういった一団の長なら、俺たちをあえて待たせるくらいはしてもおかしくないと考えていたからだ。いくら仕事とはいえ、身分的には単なる学生。そして単なる運び屋でしかない。その意味で言えば、こうして丁寧（ていねい）に招かれること自体が予想外だ。

元は騎士という身分だったことも知っている。街の噂（うわさ）から、もう少し自我（じが）の強い、悪く言えば高慢（こうまん）な人柄（ひとがら）だと予想していたせ騎士の職を辞し、冒険者に身をやつし、こうして迷宮攻略に乗り出したのかも聞いていたから。

「シルヴィア＝リッターさんですね」

席につきながら声をかける。シルヴィアは笑顔で応（こた）えながらいちばん近い席に腰を下ろした。俺たちはその正面に並ぶ。

「ああ、そうだ。よろしく頼（たの）むよ」

「こちらこそ。初めまして、アスタ＝セイエルです。連れは手前、上座ではなく、入口からエル、ピトス＝ウォーターハウス、それと――」

一瞬だけ言い淀む。本当なら、身分を隠して偽名でも教えたほうがいいだろう。

だがメロは、すでに学院でフェオに名乗ってしまっている。

を伝えることにした。

「――メロ＝メテオヴェルヌです」

「よろしく。エイラから話は聞いているよ。全員、本職にも引けを取らない優秀な魔術師だと」

シルヴィアはメロの名前に一切の反応を見せなかった。先にメロがいるからかもしれないと一瞬すれば、対応が丁寧なのは聞いていたのだろう。ともく、メロがいなくても同じ対応だったろう。そう思わせるくらが来ていたんですか？」

「昨日の今日で、もう連絡

「ああ。いや、そういうわけじゃないんだ」

シルヴィアは軽く首を振る。ガストはさきほど、天幕を出てるからね。話の中に、君たちの名前「エイラとはよく連絡を取がたまに出てくる。アレは人付き合いが嫌いというわけじゃないのに、面倒がってしないくれているのなら、こちらからお礼を言いたいくらいだ」

「……仲がいいんですね」

「あの子も、私にとっては妹みたいなものだよ。遠縁だからね多くなかったが、親しくはしていたんだ。素晴らしい才能も持っている」

「そうですね。学生で今、最も前を走っているのは、きっと彼女だと思います」

「そう言ってもらえるなら、私としても鼻が高い。単なる身内だけれどね」

冗談めかすシルヴィア。エイラ＝フルスティは本心ではあるのだろう。俺だって世辞のつもりはない。い魔具職人は本当に希少な存在だ。ただ戦って強い魔術師などそれにしても、妹ときたら、世間の評判がそれを証明している。腕のいと、考え込んだ俺の表情より、よほど。を見せてからこう言った。はてさて。

「そういえば、フェオには、もう会ったと聞く。気を悪くしたなから外されて拗ねているんだ。愚妹には、私からも言い聞かせておこう」

「……いえ」

どうやら姉妹仲は悪くならしいと判断する。だとすると、さて。彼女が荒れていた理……まあ、察しはついているのだが。

「それでは早速ですが、荷物の確認をしていただいても？」
余計な思索を切って本題に移る。シルヴィアは頷き、
「ああ。ウチの者に運ばせても構わないかな？　馬車の中を見てもらうことになるが」
「どうぞ。むしろ助かります」
「済まないね、迷宮の攻略はもう始まっているから、割と立て込んでいるんだ。これからまた会議なんだよ。忙しくてならない」
「その辺りは心得てます。――調子はどうですか？」
「順調だよ。とはいえ、あまり誇れたものではないけれど」
「……つい最近、オーステリアの迷宮に賊が侵入していたという話は知ってますか？」
俺はその話を振った。とはいえ意味があるかどうか。シルヴィアは頷き、
「ああ。聞き及んでいる。なるほど――それで君たちが。納得したよ」
そのときだけ、シルヴィアの笑顔にわずかな変化を見た。一瞬のそれに、わざわざ言及することはしない。彼女もまた、何ごともなかったように言葉を続ける。
「……いや、すまない。こちらの話だ。大丈夫、調査は万全だった形跡はない。魔術で調べたんだ、それは絶対に間違いない」
「なら、いいんですが」

「それに、今日からは君が合流してくれるからね。心強いよ」

君、というのはもちろん俺じゃない。シルヴィアが視線をやったのはピトスだ。

――治癒魔術師。その希少さは魔具職人を超える。短い時間で負傷を癒す技術がどれほど、ことさら言葉にする必要はないだろう。

「わたしがどれほどお役に立てるかはわかりませんが、がんばります」

ピトスは静かに言った。

「ありがとう。さっそくで悪いが、打ち合わせをしたいと思うんだ――」

ピトスに向いていた視線が、こちらに戻ってくる。俺は頷きを返した。

「わかりました。では、これで僕たちは」

「ありがとう」シルヴィアは頷き、それから今度は首を横に倒す。「ところで、もしかして君は冒険者志望だったりするのかな？」

「……いえ、そういうわけでは。なぜでしょう？」

「いや、ちょっと気になっただけなんだ。こちらの事情を重んじてくれたから、あるいはと思ったのさ」

「攻略クランも、最近は少し増えてきたって聞きますよ」

迷宮を《攻略する》という言葉の定義は、わかりやすく換言すると《迷宮の最深部まで

到達することを目指す》という意味だ。管理局の許可証に備わっている、最短経路を探したり、補給のために地上へ戻ったりと、多くの機能を応用した専用の魔具でそれを証明する。別に迷宮全域を時間と労力をかけて、極力安全を確保する。そうして集められた情報、整えられた環境は、必ずしもなかった。ただ、迷宮を真っ当に踏破しようとする冒険者は少ない。

元より迷宮攻略は、一日二日でどうこうなるものではないからだ。当然、攻略しながらそれでも攻略を目指すのは、それが魔術師にとって大きな栄誉だから。前人未到の五大迷宮、その一角を攻略した七星旅団が、今では伝説のクランとだからときおり、攻略クランが得た情報を横から掠め取ろうか、出現する魔物はどんな種類か、どの道を進むのが最短なのか――苦労して集めたそれらの情報を盗まれ、攻略者の称号を得られるのは、あくまでも最初に到達した者攻略クランが基本的に排他的なのはそのためだ。安全な地点の栄誉を横から奪われるといった事件も幾度かあったという。

シルヴィアは、それを危惧していたということ。無論、ピトスにはそれを俺たちにまで伝えることは避けたかったのだろう。信頼云々以前の問題だ。

その意味で言えば、だからフェオの警戒もある意味では当然だった。彼女の場合、それ以上に敵意が剝き出しだったとはいえ、冒険者なら意味はわかる。

逆を言えば、そういった事情をすぐに察するのは、冒険者くらいのものだということ。

「……以前、冒険者をやっていたことがありましたから。入学前の話ですけど」

俺は言った。隠すことでもない。

「そうか。なるほど、得心がいったよ」

「もう廃業してしまいましたけどね。今は一介の学生です」

「もったいないな」シルヴィアは言った。「どうだろう？　もしその気があるなら、卒業後にウチを訪ねてくれないか？　その頃には、クランももっと大きくなっているはずだ」

「勧誘、ですか」俺は、少し砕けた笑みを見せた。「ちょっと意外です」

「学院生だというだけで、ある程度の実力は証明されたようなものだからね、歓迎だよ。ただでさえウチは若い人間が多いから、実力不足なのは否めないし」

「ご謙遜でしょう。順調に攻略も進んでいるようですし」

「ピトスくんのような協力者を、外部から募っているからだよ。ウチだけでは無理だろう。運もよかった」

「……ええと。光栄ですが、冒険者をやるつもりは、もう」

「残念だよ。まあ、気が変わったら教えてくれ。もちろん、ふたりもね」
除かれたひとりは、おそらくメロだろう。気づいていて何も言わないとは珍しい。
俺は立ち上がり、告げる。
「僕たちはそろそろ。品物の確認は、えっと……ピトス。任せてもいいか？」
「はい。送ってくださってありがとうございました」
「仕事だから。――それでは」
シャルとメロも立ち上がる。これからここで打ち合わせがあるのだろう。
……さて、俺たちはどうしようか。
「そうだ、三人とも」シルヴィアからの提案は、そこでかけられた。「しばらくの間、ここに滞在していかないか？　もちろん寝床はこちらで用意しよう」
意外――というわけでは退屈はしないと思う。
なかった。実のところ、そう提案されるのを俺は待っていたのだから。なければこちら訊くつもりだったが、言い出してくれてよかった。
「いいんですか？」
と訊ねる。含みのない笑顔で頷くシルヴィア。
「ああ、もちろんだ。学院の授業もあるだろうが、外部での活動には寛容だとエイラから聞いている。支障がないようなら、しばらく留まっていってくれると嬉しい。ウチの若い

連中には、いい刺激になると思うんだ。君たちにとってもね」
「では、お言葉に甘えさせてもらいます。現役の冒険者と活動できる機会は、オーステリアにいてもそうありませんからね。勉強させていただけるなら嬉しいです」
「といっても、攻略に同行を許すわけにはいかないんだけどね」
「ピトスと違って、僕は治癒魔術なんて使えませんからね。言った瞬間、なんだかじとっとした視線が三人分ほど突き刺さった気がするが、おそらく気のせいだろう。シルヴィアは気づかなかったのか、小さく首を横に振った。
「それこそ謙遜だろう。エイラから、いろいろ聞いていると言っただろう？　君たちがいれば心強いんだが……すまないね。今回だけは、どうしても無理なんだ」
「今回だけ、ですか？」
訊いてほしそうだったので、それに乗って訊いてみた。シルヴィアは頷き、不敵に笑う。
「――ああ。今回、私たちはこの迷宮を、七人だけで突破したいと考えているんだよ」

※

外ではガストが待っていた。俺たちに気づくと、片手を軽く挙げて近づいてくる。もう

一方の手には、小さな木の籠を提げていた。
「おう。なんだ、話は終わったみてえだな」
「どうも。ピトスはまだ残ってますが」
「そうかい。――そんでお三方、お前ェら、これからどうすんだ？」
「シルヴィアさんのお言葉に甘えることにしました」俺は笑う。
もしれませんが、少しの間だけお世話になります」
「あァ、いいぜ別に、そんなかたっ苦しい喋り方しねえでも」
「……そりゃどうも」
「にしてもなあ。あいつ、やっぱそう言ったのか」
ガストは呆れたように、後頭部をがりがりと掻く。ただ、その表情には笑みがあった。
見たところ、ガストは銀色鼠では最年長だろう。それでも、おそらくだが三十に届くか届かないかというくらいなのだから、このクランは本当に若い。
「ウチは、見ての通りガキばっかのクランだ。こんな歳で冒険者になんざ、まあ知れてらァな」
淡々と語られるガストの言葉。その意味は俺にもよくわかった。
「……孤児ですか、ほとんど」

「あァ。いろいろあんだろうけどな、いちいち詮索はしねェからよ。俺たちは別に慈善団体じゃねえ。――とはいえ、まあ団長があの通りのお人好しでよ」

「僕らを残したのは……いえ、学院から人を呼んだのは、それが理由ですか」

「俺としちゃ、せめて手前ェの身を守れる力くらい、手前ェで身につけてもらいたいってくらいだけどな。お前ェらみたいな若い天才が、いい刺激になると思ったんだろ」

魔術を独学で身につけるのは難しい。だが学ぶ環境はそう手に入らない。

俺たちがその一環にでもなればいいと思ったのだろう。学生から見たとしても、本職の攻略クランと繋がりを持てるのは貴重だ。互いにメリットがあると考えたらしい。

「それで来たのが僕だったのは、なんだか申し訳ないですね。成績悪いんで」

「こっちの事情なんざ気にすんな。それに、少なくとも後ろの連中は本物だろうよ。見りゃわかるモンなんだな、こういうのは。才能ってヤツかね、落ち込むぜまったく」

ガストが視線を女性陣に移す。

「特にそっちのアンタ。《天災》なんだろ、あの有名な」

「うん、そうだねー。そう名乗ったし」

快活に笑うメロ。ずっと黙っていたからか、反動で喋りたそうにしている。

「……あァ、やっぱそうなのか。若ェとは聞いてたが、まさかここまでとはな。つーか、

さすがにこんな大物が来るのは予想外すぎるぜ、オイ」
「ま、そういうこともあるよ」
「そうかい……そりゃシルヴィアも放っとかねえよなあ」
「七人だけで攻略する、って言ってたよね」とメロ。「それっ
があるから？」
「ま、そりゃわかるわな。その通りだよ。あいつは、シルヴィ
冒険者になったんだ。いつだったか、命を救われたらしいぜ」
「そうなの？　覚えてないんだけど」
「《天災》と顔を合わせたことはないっつー話だから、お前ェ
どっちにしろ覚えられちゃねェはずだ、っつってたけどな」
ちら、とメロがこちらを覗き見る。俺は首を横に振った。シ
マイアかセルエか、たぶんその辺りだろう。
「なにせ元が騎士だからな。世間じゃプライドだけが先行して
けだとか思われてるらしいが、実際は逆だ。あいつァ、お前ェ
「……それで騎士を辞めて、いきなり冒険者になったってこと
「意外と馬鹿なんだよ、あいつ。さっきだって、いきなり本物

して、めちゃくちゃ舞い上がってたんだぜ？　どんだけ緊張してたんだか」

「そうなの？　あたし、てっきり無視されてんのか、知られてないのかと思ったよ」

「憧れの冒険者が目の前にいちゃあなァ。恥ずかしかったんだろ。よけりゃ、あとで顔を見に行ってやってくんねェか。喜ぶだろうよ――っと」そこで言葉を切り、ガストは首を振ってこう言った。「ついて来てくれ。空きの天幕まで案内すらァ」

そうして歩き出す。と、ガストはシャルに持っていた籠を手渡す。

「え、えと……なんですか、これ？」

ずっと黙っていたシャルが、狼狽えたようにこちらを見る。なぜ俺を見るのか。

ガストが苦笑し、それから声のトーンを落として言う。

「さっき、フェオが迷惑かけちまったからな。ま、その詫びだと思ってくれ」

「はあ……」

「中身は菓子だよ。あいつ、菓子作りが好きでなァ。こんなとこまで、わざわざ高っけえ魔具持ち込んで、調理用に環境整えてやがんだよ。ウチはチビが多いからな、人気なんだ」

「そうですか……」

「悪かったな。フェオは人見知りのクセに結構強気でな。普段はあそこまでじゃねェんだが、まあ……学院ってのに思うところがあったんだろうよ」

「はあ……そうですか……。こいつ、それしか言わないなあ……。すみません。こっちにもひとり、人見知りがいるんです。ほかがどうかは知らないも似ていますね。……など、口に出すつもりはもちろんなまあ、フェオの気持ちはわからなくもない。

フェオになかったのは環境であり、金銭であり、人脈であり、つまりは運だ。彼女から見れば学生なんて、ただ《運がいいだけで偉そうな連中》ってところだろう。

「お前ェらがここにいる間に、もうちっとあいつも成長してくれっといいんだけどよ」

ぶっきらぼうに独り言つガストだった。なんだか、このクランにおける彼の立ち位置が透けて見えるようだ。頼れる兄貴分、とでも言うのか。苦労しているご様子である。

相変わらず、周囲から刺さるような視線を浴び続けながら、俺たちは歩く。やがて端にあるひとつの天幕を指してガストが言った。

「あそこ使ってくれ。悪イな、俺もそろそろ向こうに顔出さなきゃいけねえからよ」

「いえ、お構いなく」

「食事とか諸々は中にいる奴に言ってくれ。――じゃあな」

ひらひらと手を振りながら、ガストは来た通りに戻っていった。
「中、誰かいるみたいだね？」
首を傾げてメロ。ガストの言葉ではそうだった。初めから立ててあったのだし、使っている人間がいるということだろう。迷惑だろうとは思うが、まあ仕方ない。
「……入ろうぜ。正直、少し疲れたよ」
「だらしないなー。冒険者やめたせいで体力落ちてんじゃないの？」
「うっさい」
冒険者時代の話をシャルの前でするな。メロを睨みつけ、それから視線をシャルにスライド。……と、
「……にゃによ？」もぐもぐ、ガストから受け取った籠の中身だったのだろう、シャルが焼き菓子を頬張っていた。
……いや。美味しそうだね、シャルちゃん。
「別に……なんでも……」
「そう？」ごくん。「アスタも、じゃなかった、お義兄ちゃんも食べる？」
「……うん。あとでね」
つーか思い出したように《お義兄ちゃん》呼びしなくてもいいから。メロが探るような、

疑うような視線でこちらを見てくる。やめろ。別に俺が言わせているわけじゃない。

「ん――んんっ」

わざとらしい咳払いをしてから、天幕の中に入る。入口の布を除けると、なんだか妙に散らかった部屋が見えた。

「――姉さんもガストもヒドいよねー……。わたしばっか除け者にしてさー……」

それと同時に――ひとりの少女の姿も。

少女は入口に背を向けてから、誰かと話しているみたいだった。

誰かとっていうか。彼女は両腕で、大きな鼠のぬいぐるみを抱えている。手作りらしきそれは、中途半端なデフォルメ感と絶妙なリアリティ、加えて淀んだ瞳と半開きの口も相まってごく可愛くない。

「わたしだって迷宮くらい平気だもん。そんなに弱くないもん。ねー。ねー。ねー？」

「……なんというか、こう、ものすごく……」どうしようかなあ……。

誰だったかといえば、まあ、フェオだったということなのだが。あと、これからの展開も、もうだいたい決まったようなものだろう。気づかれた瞬間にキレられる。間違いなく理不尽にキレられる。ならば俺にできるのは、気づかれる前になんで入口で止まってんの？」

「ちょっと、アスター？

「――ああ読めてたよ、この野郎！」

に退避することだけ――、

「え、何が？」

首を傾げるメロだった。

弾かれたようにこちらを振り向くフェオと、真正面から視線が合った。

「……あー……」

「な」フェオの顔が、見る間に紅潮していく。「な、なん、な、な、な、に、な――!?」

そこまで恥ずかしがらなくても、と思うのだけれど、そんなことを言っても通じないだろう。いや、恥ずかしがるが。俺だって逆の立場なら割とつらい。

そもそも人形とお喋りな気持ちはわかるが。俺だって逆の立

「えっと。……なんか、すんてしないけど。

だから謝った。が、それは完全に逆効果だった。

「――――ッ!?」

もはや涙目のフェオが、大きなぬいぐるみを片手で持ち、こちらに向けて振り被る。

そして――投げた。

ぶんっ、となかなかの速度で飛来したそれを、俺は両手で軽くキャッチ。それからフェオに向けて、下から軽く投げ返し「むぶぇっ!?」たら顔面にぶつけてしまった。嘘だろ。

そのまま座っていた寝台の上で、仰向けに倒れ込むフェオ。所詮はぬいぐるみだ。肉体

的には大したダメージじゃないだろう。だが精神的には……ちょっとわからない。

「……何してんの？」

むぐむぐと焼き菓子を頬張るシャルに、後ろから問われるお前はお前で何食ってんだよという話だったが、それはとりあえず告げず、代わりにこう答えた。

「いや、別に何も」

※

そう。別に何も見なかった。というわけにして、三人で天幕の中に入る。完全に寝床としていくつかの簡易寝台（ベッド）や日用品の類（たぐい）が、乱雑に散らかっていた。

「――わたし、そんなこと聞いてないんだけど!?」

とは、俺たちがここで泊（と）まることになったと告げた際の、まあ、それは別にどうでもいいとして。

などどこかに消えていた。フェオの反応だ。もはや敬語

さきほどの失態からは、なんとか立ち直ってくれたらしい。耳や目元は未（いま）だにちょっと赤いのだが、それは指摘（してき）しないでやるのが優しさだろう。

何もなかったし、だから何も見ていない。そういうことでお互い、合意を得ている。

「すぐ帰るんじゃなかったわけ？」
フェオは相変わらず刺々しい。さっきのこと、やっぱり後ろのふたりに言ってやろうかな……。
「そんなこと言ってなかったと思うけど」
と、答えたのはシャルだ。こちらも相変わらず、フェオに対しては当たりが強い。もともとの相性が悪いのか、あるいは単なる同族嫌悪なのか。それは違うか。
「これから迷宮攻略をしようってクランに取り入るなんて、何が目的なの？　普通なら気を使うとこでしょ？　常識ないんじゃない？」
「こっちは留まってほしいって言われたから、わざわざ留まってあげてるんだけど」
「別に帰りたければ帰ってもいいんだけど。アンタたちと泊まるなんて冗談じゃない」
「そっちこそ、嫌ならここから出ていけばいいでしょう」
「――は？」
「あ――？」
こいつら仲悪いなあ……。仕方ないのかもしれないけれど。
ぱっと見は大人しそうにシャルは見える。いや実際、普段はかなり物静かなのだが、これで売られた喧嘩は高値で買い取るタイプである。要は負けん気が強いのだろう。

一方のフェオは、初めから俺たちに敵意を見せ続けている。水と油だ。

「……本当に聞いてないのか？　ガストさんに言われてここに来たんだけど」

白熱するふたりに、俺は横から割って入る。それだけでふたり揃って俺を睨んでくるのだから、実は逆に相性がいいんじゃないかと思ってしまう。

けのメロは、もう放っておくのが吉だ。引っ掻きまわされるよりマシだろう。

「掃除しとけ、とは言われたけど、まさかアンタらが来るなんて思ってなかった」

れたものだ。溜息をつき、

「なるほどね……」

面倒見がいいかと思いきや、あんだけ謝っておいて普通に引き合わせるとは。やってくれる。

「これ、フェオが作ったんだってな？」

俺は焼き菓子をひとつ手に取った。……懐柔作戦である。

「名前で呼ばないでよ」

「いただきます」

「ちょ、ちょっと……」

「――ん、うん。本当に美味いな。いや、これお金取れるんじゃないか？」

「……」

褒められたからか、フェオが顔を赤くして顔を背けた。よし、ちょろい。俺はゲスい。

ただまあ、美味しかったのは本当だ。菓子作りが趣味という魔術には一種の共通項があるなんて説も聞くが、それを趣味にしている魔術師は珍しい。

そのまま一気に食べ切ってしまう。物足りないくらいだ。メロも興味を持ったらしく、ひとつ手に取っていた。逆にシャルは、いつの間にか明後日のほうを向いている。おい。

「ごちそうさま。美味しかったよ、ありがとう」

告げると、フェオは百面相とばかりに、なんだかいろいろ難しい表情を作る。だが、やがて観念したように溜息をつくと、顔を背けて小さく言った。

「……えと。それは、どういたしまして……」

初めてまともな会話が成立した気分だ。けれど、フェオはすぐに首を振って、

「と――とにかく、わたしは納得してないんだからっ！」

そう宣言して、そのまま逃げだすみたいに天幕から走ってしまった。

まあ、このくらいまで譲歩を引き出せたのなら充分だろう。ガストが俺たちとフェオを引き合わせた意図はなんとなく察するが、それに乗ってやる理由は今のところない。

――それに。実を言うなら、フェオがいないほうが好都合ではあった。

「メロ」

短く言う。それだけで伝わる。

「うん」

頷き、彼女は頬張っていた菓子を食べ切ると、右手の指をパチンと弾いた。

その瞬間、メロから膨大な魔力が泉のように湧き出し、天幕の内部を満たしていく。

シャルが驚きに目を見開き、身体を硬直させる。当然の警戒だろう。視線で大丈夫だと告げ、そのまま待った。やがて天幕が魔力の渦に浸り切り、それが結界に変わる。

「今のは、いったい……」

何が起きたのかわからないといった様子のシャル。メロの魔術に初めて触れる人間は、誰もが似たような反応になるもらった。

「とりあえず、結界を作ってもらった。メロがやるのがいちばん確実だからな」

実際にはそれだけじゃない。わざわざ魔力を垂れ流すように行ったのは、この天幕に初めから仕掛けられていた術式を力ずくで破壊するためだった。本来、結界のように精密な術式は、それをきちんと読み取り、正しい方法で解体する必要があるのだが、そのような常識は彼女を前に通用しない。事実、俺の部屋の結界もあっさり乗っ取られていた。

この天幕にどんな結界が仕掛けられていたのかは知らないが。いずれにせよ、念を入れておくに越したことはないということ。

「……心臓に悪い」

不満そうに呟くシャル。
かは疑問に思っていない辺り、彼女も大方のところは察していたということか。
なら、さっそく本題に入るとしよう。
「さて。――ふたりとも、どう思う？」
「……おかしいよね。まあ、いろいろと」
答えたのはシャルだ。天幕の床にちょこんと座り込み、軽く小首を傾げている。
「わたしも昨日、急にレヴィから聞かされただけだからさ。どういうことなのか、よくわかってないんだけど……」
「レヴィから？」関係ないとは知りつつも、思わず聞き直してしまった。「エイラから頼まれたって言ってなかった？」
「そのヒト、別に知り合いじゃないし」
「あー……」
「何その腹立つ反応」
シャルに睨まれてしまった。いや別に、特に含むところはありません。
「……いいけど。そのエイラから、レヴィを経由して、わたしのところまで話が来たみたい。ピトスが心配だから、ついて行ってあげてほしいって」

「なるほど。……よく請けたな。お前が来るのも、意外っちゃ意外なんだけど」
「別に」シャルはつまらなそうに顔を逸らす。「学院にいるままじゃ、実戦の機会なんてそうないから。都合がいいと思っただけ。お金も出るし」
「なるほどね」
呟きながらふと思った。シャルは、どうやって生計を立てているのだろう。
父親である《魔法使い（イプシシマス）》――アーアーサー＝クリスファウストとは、ほとんど顔を合わせたことさえないだろう。少なくとも、俺が奴に師事して以降は。
あの根なし草が財産を貯め込んでいるとは考えにくいし、そもそもその頃、彼女はまだほんの子どもだったはずだ。普通に考えれば、どこかに預けられていた、という感じか。
まあ、それはここで追及することじゃないだろう。代わりに別の問いを投げる。
「レヴィはなんか言ってたか？」
「特には。『私は行けないけど、嫌な予感がするから』ってだけ」
「うっわあ……あいつの勘は当たるからなあ。聞かなきゃよかった」
顔を顰める俺。そこでメロが横目でシャルを見やる。
「なーんかちょっと、話についてけてないけどさー。ふと思ったんだけど、なんだっけ、シャルだっけ？　アスタとどういう関係なの？」

「関係なんてない。無関係だけど」
「それは酷くない……？」
俺の疑問は無視された。
「ふーん……？　ま、答えないならそれでもいいや」
「……何を笑ってるの？」
「別に？《天災》が何を考えてるかなんて、いちいち気にしても仕方ないよ」
「何それ」
なんだか微妙な空気になる室内だった。ちょっと？　やめてくれないかな？
チームワーク皆無の俺たちパーティ。ピトスが恋しくなってくる。戻ってきてくれないかなあ……まともなのピトスくらいなんだもの……。
「話を戻そう」と俺。「シャルは、なんか気づいたことあったか？」
「ひとつ気になったのは、人数かな」シャルは言う。「この銀色鼠ってさ、最近じゃ割と有名なクランだよね。たまに名前聞くし」
「らしいな」
「その割には、なんて言うか……少ないよね、ヒト」
正確には、人数だけならそれなりにいる。問題はそのほとんどが子どもだということだ。

はっきり確認したわけじゃないが、戦力として数えられそうなのはガスト、そしてフェオくらいのものだった。ほかはとてもじゃないが、迷宮攻略なんてできそうにない。

「評判になるような強い魔術師が、ほとんどいないってのはちょっと……まあ、見てないだけかもしれないけど」

「迷宮にいるかもしれないから一概には言えないが……攻略、準備自体は、ひと月以上前からやってたって話だね」

「なんとも言えんな。まあ、主力っぽいシルヴィアたちが地上に戻ってきてるところを見るに、そう進んでないと考えるのが妥当かね。今になって武器を発注したり、外から治癒魔術師を呼んできたりするってのも違和感がある。……重傷者でも出たか？」

「だとしたら、あのフェオってのも、わたしたちを追い返そうとしたりしないでしょ」

「そりゃそうだ」

フェオは知らなかったという可能性も残るが、それならやはりピトスが到着した瞬間に治療を頼むだろう。そもそも学院で治癒魔術師が見つかる可能性は高くなかった。もし怪我人が出たなら、学院ではなく病院に行く。的外れだったらしい。

シルヴィアは、攻略が順調だと言っていた。嘘をつく必要はない……まあ、ないだろう。逆

ならともかく。つまらない見栄を張るような性格にも見えなかった。

「メロはどうだ？」

と、こちらも床に座り込みメロに胡坐を掻いて揺れているメロに水を向ける。彼女は軽く伸びをすると、口元を歪めてこう言った。

「そうだねー。ま、見られるのは気になったかな。気づいてたっしょ？」

「そりゃ、ああまで露骨ならな。いや、あれは逆に隠してるつもりだったのかね」

「だとしたら間抜けすぎないかな？　わたしでも気づいたよ」

俺たちを囲うように方々から突き刺さっていた視線。もちろん、その大半は銀色鼠の団員だったのだが、中には違う視線が交じっていることには気づいていた。

視線というよりは、魔力を感じたというほうが正しいか。監視されている。それも複数の誰かに。もちろん攻略クランである以上、こっそり見ている人間くらいいるだろう。

迷宮攻略の恩恵は何も単純な栄誉だけじゃない。誰も足を踏み入れたことがない場所には、それなりの宝が眠っていることが多い。魔具のひとつでも見つけて売れば、かなりの額になるだろう。漁夫の利を狙っている連中が、確実に何人かいるはずだ。

実際、隠れ方が杜撰すぎるのほうがずっとましだ。下位の冒険者といったところだろう。オーステリアの学生の罠を張っているような連中だとは思えない。

「……ただなあ。時期が時期なんだよなあ」俺は言う。「メロは知らないだろうが、この前、ちょっと迷宮の中で妙な連中に絡まれてな」

「妙な連中？」

首を傾げるメロに、頷いて答える。

「そうとしか言いようがなかったからな。どこの誰かもわからねえよ。ある程度の規模がある組織だとは思うんだが」

「で、それが？」

「そいつら、どうも迷宮の中で何かの実験をしていたらしくてな。詳しいことはわからないが――」

俺の心に、あのとき見つけた地球の文字が引っかかっている。俺は自分が地球の――この世界から見て異世界の出身であることを、ほとんど誰にも告げていない。メロやセルエたち七星旅団の仲間にすら伏せていたのだから。俺が抱える秘密の中でも最大だろう。

知っているのは、義姉であるマイアと、師匠である魔法使い、そしてもうひとり、オーステリアの街に住んでいる関わっていたのだろうか？　では、その三人のうちの誰かが、あの事件にマイアは地球の文字まで知らない。最後のひとりは、そもそも疑うに値しない。

よって――可能性があるのは魔法使いであるアーサーということになる。奴が地球の言語を知っているとは思えないが、同時に奴なら知っていてもおかしくない気がする。

死んだということになっている三番目の魔法使いが、この件に関係しているとすれば。

「――まあ、オーステリアであんな実験をしてた連中だ。近場の迷宮でも、同じことしてるだろ」

問題は連中の目的だ。あのとき、俺たち五人は事件にたまたま巻き込まれただけだ。迷宮に入ったこと自体が偶然なのだから、それは間違いないだろう。

では、銀色鼠はどうなのか。

もし本当にタラス迷宮で、なんらかの思惑が動いているとするのなら。銀色鼠は、たまたま巻き込まれたわけではないだろう。

――明らかに、意図的に狙われたと見做すべきだ。

「つっても確証はないが……もう、それを前提にして動いたほうがよさそうだな」

面倒なことになった、と俺は頭を掻く。本当に、これからどうするべきなのやら。

俺はメロに向き直って、それから少し考えた。

彼女は、この場における最大戦力だ。《天災》の二つ名を持ち、単独で活動する冒険者の中では最強とまで呼ばれる魔術師。それが、メロ＝メテオヴェルヌだ。

俺はきっと、彼女の強さを誰より知っている。彼女の強さを信じている。正面からメロに勝てる魔術師など、世界に片手の指ほどもいるかどうか――けれど。

「――メロ。お前、学院まで一回戻れ。そんで、セルエにこの話を伝えてきてくれ」

俺は言った。望み得る最高戦力と、ここで別れることを決断する。

「わかった」

メロは言った。何も訊かず、ただ応えてくれる。

会うのは久し振りだというのに。呪われた俺など、はっきり言って思っていたのに。彼女は俺を疑わなかいてもおかしくないとさえ

「――んふふ。やっぱこっち来て正解だったなー。久々に、ちょと本気が出せそうな事態じゃん！　アスタのとこいると、ほんと退屈しないよねー」

愉快げにほくそ笑むメロが興味を失ってに、俺は苦笑でもって答える。

「……いや、俺が厄介ごとを呼んでるみたいな言い方をするな。起きる面倒の五割までは、確実にお前のせいだからな」

「残りの五割は？」

「マイアが悪い」あと最近はレヴィも五割悪い。どうすんだよ十俺の気持ちなどまるで斟酌せず、メロは愉快そうに笑い続ける。五割だぞ。

「いやー、あたしはアスタが呪われてんだと思うけどね。星の巡りが悪いんじゃない？」
……それは、まったく笑えない話だ。
ともあれ話は決まった。メロにはあえて、オーステリアまで戻ってもらうとする。
「んじゃ、ちょっくら行ってくるねー」
「全力で走れよー」
「もちだよ。たまにはセルエと競走したいなー」
軽く言うメロに、軽く答える俺。話についてこられないのか、シャルが眉根を寄せながら口を挟んだ。
「……あの。まさかと思うけど、走るって、もしかして」
「言葉通りだけど」
「い、いやいやー　ここからオーステリアまでどれだけ距離あると思って――」
「えー。だって馬で行くのとかめんどいじゃん」
「め」
絹るようにこちらを見るシャル。いや、「め」って言われても。というかこいつ、困る仕方なく、たまには助け船を出すことにしてやる。
と俺のほう見るようになってない？　助けたことないのに。

「大丈夫だよ。そこの阿呆を一般常識に当てはめて考えないほうがいい」
「ちょっと、阿呆ってなんなのさー」
無視である。混乱が解けないシャルに、俺は情報を伝えてやった。
「――こいつ、自分の足で走るほうが馬より速いから」
唖然とした表情を見せるシャル。メロは一切気にせず、屈伸運動を終えると天幕から外に出ていった。「見送ろうぜ」と告げて、シャルといっしょに後を追う。
馬車まで戻った。メロはクラウチングスタートの姿勢を取って待っている。
……はいはい。わかりましたよ。
「んじゃ行くぞ」
「いつでも来ーい！」
「はい。――よーい、どん」
掛け声と同時、メロが――
その比喩が嘘にならないほどの速度でもって、街道を一気に駆け抜けていく。その姿は数秒のうちに視界の外へと飛び出してしまい、残ったのはわずかな風と土煙だけ。
「……どういう魔術なのか、ちっともわからない……」
呟くシャル。今のが魔術だと、わかっただけでも優秀だ。見る目のない魔術師は、メロ

の速度を身体強化だと思い込んだりするが、そんなわけがない。
それを最高速で駆け抜けるが、音もなく、物理の法則を書き換える
移に近いとさえ言える、それは移動のための術式。
　メロ＝メテオヴェルヌだけに許された魔術のひとつである。
「あれ、本当に人間……？」
　訊ねるというよりは、ただ漏れたというようなシャルの言葉。
「だから、天災だろ」
「……そりゃそうだけど」
「なんだよ妹弟子」
「あの《天災》と、いったいどういう関係なわけ？　今さらだけど、噂に聞く《天災》な
ら、アスタの言うことあんな素直に聞いたりしないでしょ。ちょっと不思議なんだけど」
「どいつもこいつも同じこと訊きやがって。昔の知り合いだよ。それだけだ」
「……それだけ？」
「それだけ。それよりほらお義兄ちゃん」
「あ、誤魔化した……」
「誤魔化してない。お前、さっさと戻んぞ。あんまり注目集めてもアレだろ」
　学院でぼっちなんだから、視線浴びるの慣れてないだろ。そう

いう優しい配慮だよ」

「うるっさいな、そっちだって大差ないでしょ」

呆れたように溜息をつき、シャルは天幕に戻っていく。

ていくから」とだけ告げて、俺は馬車の車体に背中を預け

そのときだ。シャルが唐突に足を止めたのは。なんだか

い動きでこちらを振り返って、固まる。

「……」

そして、しかし、何も言わない。何かを言おうとして、

を閉じ、明後日の方向に視線を彷徨わせる。明らかに挙動不審だった。

「どうかしたか？」

「え。あ、いや……」

訊ねると、フェオの蒼い瞳がその背中に、「ちょっと一服した。

た。なんだというのか。俺は

「……その。ピトスって、どこで寝るのかな？」

「は？　ピトスがどこで寝るか？」

予想外すぎて、思わず鸚鵡返しに答えてしまった。だがシャルに冗談のつもりはないら

しく、「うん」と普通に頷かれる。
「いや……知らないけど。どこか別に、寝るとこ用意されてんじゃないか？」
「そうだよね。帰らないみたいだし」
車中での会話は、彼女も聞いていたようだ。当たり前だろうが。
「で、それが？」
「……てことは今夜、わたしたち、ふたりきりで寝るってことだよね？」
「――――」
「同じ、その……天幕で」
あー……それまったく考えてなかったな。え。あれ、そういうことになるの、これ？
メロのせいで、すっかり慮外に飛んでいた。冒険者の頃、あいつと寝床を共にしたことなど数え切れないほどある。仕事のときは当然として、なんならそれ以外のときに同じ布団で眠ったことさえある。俺もあいつも、だから今さら気にしなかった。銀色鼠だって、冒険者クランである以上はそこまで配慮しないだろう。
……けど、シャルと同じところで寝るのは気まずいなあ……。
別に俺は気にしないけど。まったく気にしないけど。気にすべき要素が皆無と言ってもいいくらいだけど。何を気にすればいいのかわからないレベルだとすら思うけども。

「どうすんの？」
とシャルに問われる。いや、どうすんのと俺に訊かれても。
「お前はどうなんだよ？」
「そりゃ嫌だけど」
「嫌なのかよ」即答だったんだろう。傷つけばいいのか迷う反応だ。シャルは続けて溜息を零しつつ、
「はあ……。まあでも、仕方ないから我慢してもいい。嫌だけど。すごい嫌だけど」
「……」
「まさか妹弟子に手は出さないでしょ？　ねえ、お義兄ちゃん？」
「……出すわけないだろ、お前なんかに」
「それはそれで腹立つんだけど」
――いや、だってお前、なんかすげえ面倒臭そうなんだもんあれ、然るに。
などと口に出して言うわけもなく。まあ、なんというか、とそういうことになった。

※

――眠れるわけがなかった。

夜。それとなくその辺りを調査しつつ、けれどなんの進展もなかった。メロの残した結界がある以上、この場所は安全だ。少なくともそう広くない天幕の端と端に分かれ、背中合わせで横になる。そうだろうと思っていたが、フェオは戻ってこなかった。まあ戻ってこられても、それはそれで、別の意味で気まずいのでいいとする。

ともあれ、早々に眠ろうと試みる俺とシャル。明日は早朝から攻略が再開されるというし、ならば俺たちもかなり早く起きておく必要があるだろう。本当に、何ごともなければいいのだが。迷宮の中には、誰も入っていないという話だったけれど……。

シャルは寝台を使い、俺は床に毛布を敷く。その際、気にしないで眠ればいいものを、施しは受けぬとばかりに「アスタが上で寝ればいいじゃん」シャルが抵抗するという無駄な一幕があったりした。

「いや、だからいいって。妹弟子だろ、素直に受け取れよ」

「兄弟子のほうがいいところ使うものじゃないの？」

「本当にお前は無駄に頑固だな、いつもいつも」

「それはアスタもでしょ」

結局、彼女を納得させるために、俺は《冒険者時代の名残で、床でないとよく眠れない体質なのだ》という意味不明な嘘をつくことになってしまう。

シャルもそれで引いた。というか引かれた。お前のせいで言ってんだよ畜生。

無駄に体力を消耗してから、お互い眠る。だが、こう、なんというか。時間も早いし、そんなやり取りで目が冴えてしまったからか。まったく眠れない。

ときおり背後から聞こえてくる衣ずれや寝返りの音が、騒音のように耳朶を揺らす。

「……」認めるしかない。

俺は、明らかに緊張している。こんなことで、今さら眠れなくなるとは思わなかった。

シャルが相手だからだ。間違っても本人には聞かれたくないが、彼女の外見は綺麗だ。

初対面のときは、それこそ人間だと思えなかったほどに。完璧と言えるほどの美しさを持ちながら、それでいて小柄で隙のある様子は……ああ認めよう。かなり可愛らしい。

まあ俺の知る限り、異世界人は平均的に外見のレベルが高いのだが。それでもシャルほどとなるとちょっと浮かばない。これはもう、少し異常と言ってもいいくらいだ。

人間的じゃないのだ、シャルの持つ美しさは。神秘的というか、あるいは魔的と表すべ

きか。触れるのを躊躇わせるような、一種の隔絶感が彼女には話どころかロクに知り合いさえいないのは、きっとそのせいもあるのだろう。

「ん――すう」

シャルの息遣いが耳に届く。どうやら彼女はもう眠っているらしい。

信頼されているのか、それとも舐められているのか。どっちにしろなんかむかつく。

疾しい気持ちになるわけじゃないけれど。この場に自分が存在すること自体を躊躇わせるような、それがとんでもない冒涜であるかのような。そんな気分だった。

「……はあ。もう何やってんだかな、俺は……」

起き上がり、ひとり天幕を出た。銀色鼠のメンバーも、おおよそもう眠ったようで、外に人影は見当たらない。空には星々。それだけで充分に明るかった。

「まあ、あれだ。ふたり寝るより、どっちか寝ずの番でもしてたほうがいいだろ」

必要ないことがわかって、誰にともなく言い訳する。一応、目を盗んで迷宮に入る人間がいないか、索敵の魔術はかけていた。何ごともなく、ピストを無事にオーステリアまで届けるのが俺たちの目的だ。

俺は煙草に火をつけ、一服することにした。何も考えずに、ただぼうっと星を眺める。

深い夜空に紫煙が昇り、吸い込まれては消えていく。地球も異世界も変わらない。

そうしているうちに、ふと誰かの人影が野営地の中を歩いているのが見えた。向こうも俺に気づいたらしく、こちらに向かって歩いてくる。

「――眠れないのかい？」

「時間も早いですしね。そんなとこです」俺は煙草を口から外す。「こんばんは、シルヴィアさん」

「呼び捨てで構わないよ」銀色鼠（シルバーラット）の団長が苦笑した。さきほどと違い、動きやすそうな軽装に着替えている。

「年上の女性を呼び捨ては、ちょっと」

「そうか？　そういうことを気にする性格には見えなかったが」

「……どういう意味ですか、それ？」

「ああ、別に悪い意味じゃないんだ。気に障ったなら謝る」

屈託なく笑うシルヴィア。それは団長という肩書に縛られた姿ではない、おそらくは素の彼女が気を抜いていることを、俺は少しだけ意外に思う。

「ただ、君は冒険者だと聞いたからね。なら、私よりも先輩だろう？」

「もう引退した身ですからね。さっきも言いましたが、今は単なる学生です」

「単なる学生とは、思えない面子を連れていたじゃないか」

「……」

俺は黙り込み、シルヴィアは俺の正面で、ふと空に手を伸ばした。

届かないモノを求めるように。やがてそれを下げると、彼女は再びこちらを見る。

「――ピトスの実力を見せてもらっていてね。こういってはなんだが……凄まじいな、彼女は。エイラといい、この代の学院生には本当に驚かされる」

「それを普通だとは思わないほうがいいですよ。そのふたりの才能がおかしいんです」

「……才能か。まあ、そうだな。魔術師の世界はそういうところだ。なあ、アスタ＝セイエル」

シルヴィアの視線が、まっすぐに俺を射抜く。俺は肩を竦めて言った。

「アスタで構いませんよ」

「ではアスタ。ひとつ訊きたいんだが、君は自分に才能があると思ったことはあるか？」

「ありませんね」その質問には即答できた。「それが魔術の才能という意味なら。いや、ほかの才能があるのかって訊かれたら、それはそれで困りますけど」

「君の評価は相対的だな」

わずかに相好を崩すシルヴィア。だがそれも一瞬、どこか遠い眼をして彼女は続ける。

「私はあるよ。私は昔、自分のことを天才だと思っていた」

「……」

「今でも、ある意味ではそう思っている。多くの人間と比較して、私は才能に恵まれていた。剣術に関しても魔術に関してもそうだ。――けれどね」

その先が、俺には言われずともわかっていた。

俺だって同じだ。いや、きっとほとんどの人間が、同じ理解をしてい。そんなものに、絶対の価値はなかったんだよ。確かに私には才能があった。けれど、私より優れた才能を持っている人間もいたということだ」

「……そりゃそうでしょう。頂点に立てるのはひとりだけ。当たり前だ」

「その通りだ。恵まれていることを喜びこそすれ、嘆くようなことじゃない」

誰だってわかっている。《才能がある》などという評価は、そいつの価値を作らない。

磨かなければ腐る。磨いたところで、それ以上の才能を持つ人間には敵わない。努力は何も約束しない。それは前提に過ぎないのだから。

「私は天才を知っている。それが在ることを知っている」

シルヴィアは星を見上げていた。その先に何を見ているのかは、俺はきっと知っている。

彼女は、そしてこう言った。

「――私は昔、七星旅団のメンバーに命を助けられたことがあるんだ」

七星旅団（セブンスターズ）。かつてセルエが、メロが、そして俺が所属していた。

確かに、あの場所にいた七人は、誰も彼（かれ）もが本物だった。俺は自分を除くけれど。

「本物を――君の言うところの頂点に立てる人間というものを、私では、どう足掻（あが）いたってその場所には辿（たど）り着けない」

心が砕（くだ）けるかと思ったね。

このとき俺が疑問だったのは、なぜその話を、彼女はこうも満、いうことだった。自分の正体がばれているのかなんて、気にも留めなかった。

「全員を見たことがあるわけじゃないけどね。あの《天災》が戦足そうに言うのだろうときから一度だけ見たことがある。――もう嫉妬（しっと）さえ覚えないね。あまりにも桁違（けたちが）いだ」

「……そんなことを、俺に言ってどうするつもりですか」

「ああ、すまない。別に愚痴（ぐち）を言いにきたというわけじゃないんなく知っておいてもらいたくてね」

そう言うと、シルヴィアは軽く伸びをした。話は終わりだと示「迷宮（めいきゅう）には入るな、と言ったね。あれは取り消す」

「……どういう意味ですか？」

「頼みがあるんだ」

唐突に、シルヴィアは俺に頭を下げる。さすがに少し狼狽（うろた）えた。

だが俺が何かを言う前に、彼女はこんな言葉を続ける。
「――フェオを、しばらく君たちと一緒に行動させてはもらえないかな」
「……」
「あの子には、もっと広い世界を見てもらいたい」
「いや……なんつーか」俺は頭を掻いた。「そんなこと突然言われて、断られると思わなかったんですか？」
「駄目か？　私の意図がわかった上で、残ってくれたのだと思っていたが」
「そういうことじゃなくて」
「なんとなく、君なら請けてくれそうな気がしたんだ。ここに残ると君たちが言ったときに、なんとなくね。だって君らには、本当なら残る理由がないだろう？」
「……それがわかってて提案した辺り、あんたもヒトが悪いなー」
そっぽを向いて俺は言った。火が消えた煙草を仕舞い、新しい一本を取り出す。
それには火をつけず、俺もまた空に視線をやって訊ねる。
「とはいえ、別に理由がなくもないんだけど。――ひとつ訊かせてくれ」
「急に口調が荒くなったな。構わないよ、なんだ？」
「さっき、『心が砕けた』って言ってたけど。ならどうしてシルヴィア、あんたはこうし

て迷宮の攻略なんてやってるんだ？」
一度は挫折を味わいながら。
どうして再び立ち上がったというのか。それがどうしてできたというのか。
「――妹がいたからさ」
シルヴィアは言う。それが全てであるという風に。
「フェオも、だったんだよ。あの子もそうだったんだ、私と違って」
「……それで？」
「単純な話だよ。私はそれが、ただ嬉しかったんだ。あの子がいるということが、私にはとても嬉しかった」
姉ってのは、誰も彼もがこうなのだろうか。俺にはよくわからない。
「あとは単純に気づきだな。結局は――才能なんて大した問題じゃないんだよ」
術師だ。簡単なことだったんだろう。私も魔
それは。きっと、俺と同じ結論で。
けれど明確に、違う方向を向いていた。
「――才能が足りないなら、足りないなりの方法で成果を出せばいいだけのことだ。才能は結果を約束しないし、結果を出すだけなら才能なんていらない」

「そのために、冒険者になったのか」

「ああ」

照れもなく頷くシルヴィアに、俺は頭を掻くしかない。

これはもう、たとえ彼女に攻略をやめろと言っても聞かないだろう。初めから説得の材料なんて持っていなかったが、本格的に覚悟を決めるしかなさそうだ。

彼女たちの挑戦には干渉しない。その上で、もしも何かが起こったら、それを俺が食い止める。

――可能だろうか、今の俺に。

なんて、そんなことは考えない。シルヴィアが今、言ったじゃないか。

「長話をしてしまったな。なら、別の方策を考えればいいだけの話だ。力押しだけが力なんて、そんなことは考えない。シルヴィアが今、言った通りだ。自分の力で足りないところは、他の力で補えばいいだけの話だ。力押しだけが力じゃない。

「いや、貴重な話を聞かせてもらったよ。――さっきの件、ぜひ考えてくれると助かる。お休み」

「そう言ってくれると助かる。お休み」

そう言って踵を返したシルヴィアに、俺は軽く頭を下げて応じた。

去っていく彼女の背を見つめつつ、さきほど取り出した煙草に火をつける。息を吸い込み、肺が煙に満たされるのを感じながら、それといっしょに言葉を吐き出した。

「――《収穫（Lotta）》、《秘密（Perth）》、《保護（Allen）》、《軍神（Tetwaz）》――」

魔術の仕込み。それがシルヴィアには気づかれなかったこと。

単純なお守り程度でしかないが、何が起きるかわからないだろう。

できることなら、何ごともなく攻略が成功しますよう。

夜空の星々に、俺は祈（いの）った。

確認（かくにん）してひと息つく。

この程度はしてもいいだ

第四話　異変

翌朝。結局、天幕に戻って眠る気になれなかった俺は、乗ってきた馬車を寝床の代わりにして夜を明かした。考えごともしたかったし、ひとりになったのは都合がいい。

あまり眠らなかったが、意識自体は冴えている。魔術師ならば体内の魔力循環を調節することで、ある程度まで体調を整えることができる。無論、休息は不可欠だが。

ともあれ、そのせいもあったのだろう。俺が眠っている馬車の方向に、足音を殺して近づいてくる気配にはすぐ気づいた。銀色鼠の拠点側から来た以上、何も俺に害を為そうという存在はないと思いたかったが、あまりいい想像はできなかった。

メロならば、これだけで相手の意識まで察知するのだろうか。感性を持っていない。——さて、どうするか。

迷宮に来る手前、ルーンを刻んだ護石の類はそれなりに持ってきている。先の一件で大量に消費したせいもあり、数としてはちょっと心許ないが。それに結局のところ、俺は本職の魔具職人というわけでもないため、そう高い効果は望めなかった。

護石（ルーンストーン）のひとつを掌（てのひら）に握（にぎ）り締（し）め、馬車の内側で待機する。幌（ほろ）が張られているため外側を窺（うかが）うことはできないが、逆を言えば相手にも内側は見えないということになる。

気配が、車体後方にある出入り口のところまで到達（とうたつ）した。その瞬間（しゅんかん）、俺は自分から勢いよく幌を開く。

「――ひゃあっ!?」

短い、そしてちょっと可愛（かわい）らしい悲鳴が聞こえた。かなり驚（おどろ）かせたようだ。

手に持っていた護石を何気ない動作で懐（ふところ）に仕舞いつつ、俺も驚いた演技で挨拶（あいさつ）した。

「フェオか。おはよう、こんなところまで何か用？」

「おは――」言いかけて口籠（くちごも）るフェオ。「……てか驚かせないでくれる？」

「悪かったな。来てるなんて気づいてなかったからさ」

「……」

しれっと嘘（うそ）をつく俺。フェオのほうは、まさか気配を殺していましたとも言えないのだろう。そのまま押し黙ってしまった。……本当に面白（おもしろ）いな、この子は。

来たからには用があるのだろう。待っていると、やがてフェオが片手を突き出して、

「――ん」

と言った。差し出された右手には、昨日も見た小さな籠（かご）が握られている。

「これは？」
「朝食」フェオはこちらを見ないまま言った。「姉さんが、持ってけって言うから」
「……なるほど。ありがたく頂くよ」
思うところはあったものの、素直に受け取って礼を言った。別に問題ないだろう。
そのまま籠を持って馬車を出る。シャルはもう起きているだろうか。天幕にいなかったことがばれると面倒な事態になりそうだし、先に起きたということにしておきたい。
少し経ったくらいか。朝というにも少し早い。
「――で、まだ何か用か？」
未だ動く気配のないフェオに、努めて明るくそう訊ねながら、棒立ちの彼女に視線を向ける。言われたフェオはえと……その。ああもう！」
「なんだよ……」
「……昨日は、すみませんでした……」
ものすごく苦々しげな表情で、フェオが頭を下げて謝罪を口にした。それはもう屈辱だとばかりに、言わされて仕方なく謝ったんだという体があり有りと見られる。

「なんのこと？」俺は問うに目を見開き、
フェオは心外だとばかりその、突っかかったりとか。なん
「だっ、だから……昨日、えっと、うう、ああー　もう、と
つけたりとかしたから……
顔を赤くしてフェオは言う。そういえば、彼女は人見知り
「……そう。まあ、そっちにも事情はあったろうし。いいよ
そう答えた。事実、本当に気にしてはいない。シャルはど
言われたことなんて可愛いものだ。嫌々でも謝る辺り、むし
などと思っていたのだが。
「――言ったね？」
フェオが、瞳をきらりと輝かせて言った。どこか少しだけ
「言ったよね？　今、気にしてないって」
「まあ、言ったけど」
「じゃあ、これからわたしとパーティ組むことになっても問
フェオは言う。ふふん、と小さい胸を張り、なんだか得意
俺は軽く頭を掻き、それから訊ねる。

「……なんの話だ？」
「姉さんが言ってたの。アンタらといっしょなら、迷宮に入ってもいいってー」
「あー。ああ……なるほどね、それで謝ったわけか」
シルヴィアから、迷宮への立ち入りを禁止されていたわけか。「なるほどね、そういうことか。荒れていたのは、自分が入れないにもかかわらず、ピトスがあっさり攻略部隊に加わったことも理由らしい。
「べ、別にそれだけじゃないけどー　今さら撤回できないからね、いいって聞いたもん」
焦ったようにフェオは言う。迷宮に入るためだったら、俺たちと組むことも厭わないということなのだろう。なんというか、現金な奴だ。
「とにかく、そういうことだから！　朝の支度が終わったらよー！」
そう言い残し、フェオはあっさりと踵を返して去っていく。
俺は、もはや聞こえないだろうが、それでも呟いた。
「別に組むとは言ってないんだけどな……」
まあ、展開としては好都合だ。いずれにせよ迷宮には入るつもりでいた。そこで安全を確認できればよし。仮に何かあったなら、それこそ外からでは対応できない。
シャルと合流して、それから迷宮の調査に乗り出すとしよう。

頂いた朝食の籠を馬車に置き、それから俺は呟いた。
「……さて。とりあえず、水場を教えてもらうとするか」
話しかけたら、誰かしら答えてくれるだろう。

※

顔を洗い、身体を拭き、朝食を終えて、それから俺はシャルもう起きてしまったらしい。天幕にはすでに姿がなかった。車に朝食を持ってきたということは、先に天幕を覗いたということだ。
手遅れだった。
「……」それにしても。
拠点の様子が、昨日と明らかに異なっている。
まず第一に人間の数が少ない。昨日より明らかに減っている。それでも俺より上の年齢の人間だって、昨日はわずかに見られたのだ。それが軒並みいなくなっている。散見される銀色鼠メよりさらに下がっていた。特に大人の数だ。
シルヴィアやガストの姿さえない。

……いや。普通に考えれば、もう迷宮に潜った後だということなのだろう。それだけなら、まあ、それだけのことだという話だ。残ったメンバーの監督者すらいないのが気になるといえばなるが、攻略に全力だと考えれば頷けなくはない。

だが、ふたつ目の違いが、俺に疑念を抱かせる。

――昨日、あれだけ感じていた視線が、綺麗さっぱりなくなっていた。

減ったのならわかる。メロを追った人間が確実にいるはずだから。だが、なくなったというのはさすがに解せない。それは、こちらの監視を捨てたということだから。

相変わらず銀色鼠（シルバーラット）のメンバーからは見られているのだが、相手が子どもだからだろう、慣れるのは早かったらしい。

さっきも年少の少年に水場の位置を聞いたところ、素直に案内してくれた。「兄ちゃん学院生なのか。すげーな！」とキラキラした視線で見られて、非常に居心地が悪かったことも付け加えておこう。昔から年下には妙に好かれる。例外はメロとフェオくらい。

それはともかく、事態が進行していることは間違いない。様子を観察しながら歩いていると、やがてシャルと合流できた。早々に寝た割には、なんだか眠そうだった。

「――ふぁ。おはよ、アスタ」

欠伸交じりに近づいてくるシャル。学院ではいわゆる《わたしに近づくなオーラ》を出

していくせに、こういった部分は妙にガードの甘い奴だ。とはいえ「お義兄ちゃん」と恒例の皮肉を言わない辺り、違和感は察しているのだろう。

「で、聞いた？　シルヴィアたち、もう迷宮に入ったらしいよ。昨日、夜明け前には」

「やっぱりそうか。いや、聞いてはなかった」

「さっきガストに聞いたんだけど、なんだかシルヴィアが唐突に予定を早めたんだって。『戦力は揃ったから、ひと息に攻略してしまおう』って」

「短い期間に終わらせるのも、戦略のひとつと言えばそうだが……」

いくらなんでも性急すぎる。特にピトスなど、合流してまだ一日も経っていない。

と、そこで違和感。それを言葉に変えてシャルに問うた。

「ん？　ガストに会ったのか？」

「ああ」頷くシャルは、俺の疑問を悟ったらしい。「ガストは攻略のメンバーに入ってないんだってさ。外で仕事があるからって話で、実際すぐどっかに行っちゃったし」

「パーティに入ってなかったのか……そりゃ意外だな」

彼は銀色鼠（シルバーラット）の主力のひとりだと思っていた。戦力を温存できるほどの規模は、いくらなんでもこのクランにはないだろうし。それを言えばフェオも同じではあるが。

ともあれ。そうとわかれば、あまり悠長（ゆうちょう）にしている暇（ひま）はない。メロも恐（おそ）らく今日中には

戻ってきてくれるだろうが、それを待っている時間まではないだろう。

「――行くんでしょ？」

そのとき、シャルが言った。俺が言い出すより先に、彼女から。

虚を突かれて、俺は思わず目を丸くする。シャルは目を細めて俺を責めるように、

「何、その反応……」

「いや、お前から言い出すとは、少し意外だったから」

「まあいいけど」ふい、とシャルが視線を逸らす。「わたしだって、仕事で来てるんだから。頼まれた分は働くよ。当たり前でしょ」

「――そうだな」

俺は答えた。シャルが依頼されたのは、あくまで武器を運ぶことだけのはずだが。

そのとき、ちょうどよくフェオが走ってくるのに気づいた。腰には剣を下げ、すでに準備はできているといった感じだ。楽しみにしているというよりは、どこか焦っている。

――ああ。本当に、不安しか感じない展開だ。

※

最近、頻繁に迷宮に立ち入るようになっている気がする。
オーステリアの一件以来だ。あのあとセルエを手伝って何度も潜ったし、それがようやく終わったかと思えば、今度はタラス迷宮ときた。冒険者に復帰した気分だ。
今回のパーティは俺を含めて三人。剣を持っているフェオが前衛、シャルが後衛で俺が中衛と考えれば、なかなかにバランスは取れている。
しかし、何度入っても迷宮の瘴気には慣れることがない。毒なのだから当然だが、この
ある種独特の重苦しい、それでいてどこか甘ったるい空気はいつだって不快だ。
そんな中で、なぜだかテンションの高い奴がひとり。フェオである。
「何してんのふたりともっと速く歩いてよ」
先頭を歩く彼女が、こちらを振り向いて笑顔で言う。相変わらずである。
「あんまり速く歩くと、先に油断はしないと思いたいところできかねないぞ。攻略の邪魔はしないほうがいいだろ？」
彼女もプロだ。そんなことしたシルヴィアたちに追いつく念のために告げると、途端に
「は？　いや、姉さんたちに追いつけるわけないでしょう。彼女はものすごく呆れたような表情になった。
「何言ってんの」

実は追いつくことが目的なのではないかと少しだけ考えていたのだが、そういうことではなかったらしい。しかし、『追いつけるわけない』とはまた断言するものだ。

「わからないぞ。先行してる分、向こうは多く魔物に遭うからな。道のりが長い以上、慎重にならざるを得ないわけだし」

「……ああ、そっか。アンタは知らないんだっけ」

と、俺の指摘に納得した表情を見せるフェオ。首を傾げた俺に、彼女はあっさりと、簡単に、さらっと――とんでもないことを口にした。

「――姉さんたちは、前線まで転移で向かってるんだから。あとから追いかけただけじゃ追いつけるわけが――」

「ちょっと待て」俺は言った。「待て。今、なんつった？」

聞き間違いでなければ《転移》と聞こえたのだが。

そんなわけがない。あってたまるか。ほとんど責めるような口調になってしまう。

そのせいか、フェオは少しだけ怯んだように身を引いた。

「な、何って……だから、姉さんたちは、下まで一気に転移してるって」

「どうやって」

「そういう魔具を手に入れたから」やはり簡単にフェオは言う。「指環形の魔具でね。あ

るひとつの地点の座標を登録しておけば、その場所まで一瞬で移動できるっていう。まあ帰りは徒歩になっちゃうけど、それを七つ手に入れたから、今回は七人で組もうって――」

「……簡単に言ってくれるではシャルまでもが表情を硬くしている。

思わず頭を抱えた。背後それは現代の魔術で再現することを知らないのか。転移が《喪失魔術（ロストロジック）》に定義されることを知らないのだというのに。

とができない術式のひとつなのだというのに。

迷宮で見つかった魔具ならば不可能とは言わないが、そんなものは簡単には手に入らない。そもそも管理局で規制されている魔術効果だし、仮に実在するのなら、その価値は計り知れないほどになる。それを七つも入手しただなんて、完全に馬鹿げていた。

だが、その本来ならありえないはずの転移を、俺とシャルはすでに経験している。あのオーステリア迷宮で。それに、関係がないと考えることができるだろうか……？

――無理だ。

「くそ、そういう話はもっと先に言え！」

「い、言うわけないじゃん！　これは銀色鼠の秘密なんだから！　今回は、まあ、確かに言っちゃったけど……だいたい、それがどうかしたの？」

「どうしたもこうしたもない。純粋な物質の空間転移は《喪失魔術》――つまり現代にそ

んな魔術を使える魔術師はひとりもいないってことだよ。だる人間もいない。――それはどこで手に入れたんだ？」

「ガ、ガストが持ってきたけど……どこからかまでは。ないなら、迷宮から手に入れたってだけの話じゃ」

「いくらすると思ってんだよ！　王都の一等地に豪邸建てて纏めて払えるくらいの価値はあるんだぞ、その指環ひとつで」

「そ、そんなに……!?　うそぉ……」

「……まあ冒険者はそういうことに疎いから、知らなかったかもしれないが。それにしても。――シャル」

「……何？」

それまで黙っていたシャルが、首を傾げてこちらを向く。

「悪いけど、今からちょっとフェオに事情を説明する。先に行っててもらっていいか？」

「――わかった」

シャルはあっさり頷いた。頼んでおいてなんだが、少し意外に思った俺は、思わず目を見開いてしまったらしい。

「迷宮の中では従うよ。……レヴィに、そうしたほうがいいって言われてたしね」

「あいつかよ……」

「話、さっさと終わらせてよ」

そう言ってシャルは進み始めた。一層程度なら、彼女にはなんの問題もない。はず。

俺はフェオに向き直り、片手の人差し指を立てて語り出す。

「――お前、そもそも魔術ってものがどういうものだか知ってるか？」

「そ、それくらい知ってるよ」一瞬だけ狼狽えて、けれどフェオは言う。「――現実世界の法則を、術者の魔力で書き換えるってことでしょ？」

「その通りだ。なんだ、よく知ってたな？」

「馬鹿にしてんの？」

「いや、本気で感心してる。学院じゃ最初に教えることだけど、冒険者は魔術を《学ぶ》ものだとは基本的に認識してないから。知らないまま使ってる人間も多いんだよ」

「……」

だが、理解して使うのとそうでないのでは、もたらされる効果も大きく変わる。

――世界とは法則であり、そこにそうあるべくしてあるものだ。

枝から離れた林檎が地面に落ちるように、けれど夜空に浮かぶ星々が大地に落下してこないように。世界の法則はあらかじめ決まっており、それは本来ならば不変のものだ。

その法則の一部を、一瞬だけ、都合のいいように書き換え、捻じ曲げてしまう技術――それを指して、ヒトは《魔術》と呼んでいる。魔術師にとって、世界とはすなわち《文字情報によって描かれた一枚の絵画》なのだから。

世界には、《林檎は地面に落ちる》と記されている。だからその通りになる。ならばその記述を、《林檎は地面に落ちない》と書き換えることで世界の法則を改竄すればいい。それが魔術というモノの根本だ。例外なく全ての魔術がこれに相当する。

いわば魔力とはインクであり、術者は筆記用具だ。世界は一冊の書物であり、そこに記された法則を魔術師は好き勝手に書き換える。一介の登場人物でありながら、傲慢な読者として物語に干渉し、やがてはその世界の作者になり替わろうとする。

もちろん魔術が持つ魔力など、世界という強大な存在と比較すれば大変に薄いものだから、すぐに消えてなくなってしまう。理論上、全ての魔術が永続しないのはそれが理由だ。世界全てを書き換えられるような筆記具にはなれない。

書き換え自体にしたってそうだ。元からあるものを、どのように書き換えるのかという方法のことを指して《術式》と呼ぶわけだが、そこには個人差が大きく出る。魔術の才能とは、大部分がその感覚の優劣を表すために使われる言葉だ。

火を熾す、《着火》の魔術でたとえてみよう。

何もない空間に《火》を描き込む――これが魔術だ。そこにけば書くほど炎は強く存在を増していく。熱いモノ。赤いモノが続く限り、世界を騙し続けていく。嘘が露呈してしまうまでヒトが描ける絵は、書ける字は決まっている。世界の記述の詳しい火の定義を文字で書ないのだから。ゆえに魔術には限度がある。その全てが「要するに、魔術ってのは、完全な正解を人間は知ら火や水といった自然要素の術式は不完全だ。を捻じ曲げ、拡張し、新たできることとできないことが明確に決まってるわけだ」を生み出し、意のままに操る元素魔術。特定の道具が持つ機能て命を救う治癒魔術。術式の損傷を補填し、傷を癒し続ける印刻魔術――。そのいを文字に肩代わりしてもらい、限定的ながら様々な効果を発揮多くの人間によって受け継がれ、その術式は代を重ねて伝わずれにせよ、やっていることは全て《法則の書き換え》だ。もが魔術によって可能になっている。けれど、何もかそれが《喪失魔術》だ。ってるわけじゃない。失われた技法も存在する。「なにせ誰にも使えないわけだからな。現代魔術で再現できないるのもわかるだろ？」過去には存在し、しかし現代までは継承されなかったとされる魔術。

魔術は長い年月を経て衰退し、かつては《神の奇跡を再現する》とまで言われた魔術のほとんどが現代においては失われている。《転移》以外にも、たとえば《飛行》や《読心》、《未来視》といった技術を今、魔術で再現することはできない。

それ以上の神秘となると、もはや魔術師にとってさえ空想に近い。《死者蘇生》や《時空間干渉》、《完全錬金》――こうなるともう、理由律否定に近い。

「はっきり言って、銀色鼠程度のクランが転移の効果を持つ魔具を手に入れるなんてありえない。加えて問題なのが、その使い手に俺は心当たりがあるということだ」

半月前の事件の折、俺は転移魔術を用いる魔術師の存在を確かめている。完全な空間魔術の再現に成功したわけではないだろう。それは二番目の魔法使いの専売特許だ。

「シルヴィアは大丈夫だと言っていたが、やっぱりきな臭いことには間違いない。銀色鼠は、何かの事件に巻き込まれている可能性がある」

「だから――どうしたっていうの！　アンタたちには関係ないでしょ！」

俺の言葉に、フェオは視線を下げてそう言った。

頑なな声音だった。俺の一方的な物言いが気に食わなかったのかもしれない。

それで構わない。最低限、現状を認識してくれていれば。

「なんの根拠もないのに、勝手なこと言わないで」

「確かに根拠はない。根拠がないから確認してるんだ。……はないんだな？」

フェオは、何も答えなかった。本当にわからないらしい。歯痒かった。実際問題、今ここで何がわかるというわけでだが、状況があまりにも違和感だらけなのだ。何を怪しめに、不自然だけが尽きず湧いてくる。

たとえば何かよからぬことを企んでいる輩がいるとしよ銀色鼠に転移の魔具を提供したとしよう。この迷宮におびき——それが、どうかしたのか？

という話でしかなかった。そこになんの問題がある。何も れてお終いだ。所詮は中堅程度のクランにちょっかいをかけ かけ方さえ中途半端だ。以前の俺たちのように、偶然だと考 相手は魔術師だ。そして魔術師ならば万全の態勢を整え、通だろう。仮にこれが誰かの策略ならば、あらゆる要素が投——だって、誰も俺たちを邪魔しに来ない。

俺たちという不確定要素が、完全に無視されている。それが不可解でならなかった。戦

力的に障害とは見做されなかったということか？　それこそあり得ない。シャルは充分に強力な魔術師だし、何よりこちらにはメロがいた。

世に名高い《天災》を、ざ単独行動させたと思ってるのか。まさか本当にいなくなんのために、彼女をわざわけれど、もし誰かが何かをしているのだとして――そこに全て理由がある。ピトスやメロがったとでも思われているのか。

「……行くか。シャルが待ってる」

結論を出せず、俺はそうであったように。

フェオは後ろから、何も言わずについて来る。完全に態度だけを言って歩き出した。

――本当に。何もかもがある理由がまるで見えない。

上手いようには運ばない。

※

シャルと合流して、三人で迷宮を駆け抜ける。あの五人でパーティを組んだときと、ほとんど変わらない速度を維持できたと思う。俺たちは、十層まで辿り着いていた。

目の前には十一層へと下りる階段。あれきり、フェオは言葉を発さなかった。ひとりで

いちばん前を駆け、現れる魔物を一刀の下に斬り捨てている。

シルヴィアが、自らより才能があると言うわけだ。経験のまだ劣るだろうとは思う。

惜しむらくは、あくまで剣術の技量は魔術師の評価に当てだが、その動きの冴えは見事のひ魔術の技量はわからないただ少なくとも剣術の技量だけさえ近い実力をフェオは持っている。あとは経験の問題だ。

しかも彼女、腰には剣を片方は、おそらくエイラが作ったものだろう。もう一方が本とも持ち込んでいるのかというして、気になるのはなぜ二本、これまで使っていたものだと――これより上があるのなら。正直、ちょっと見てみたいまあ若干ながら突進傾向が強いというか、周りが見えていん単独では二十層くらいが限界だとは思う。充分にすごいのる者がいれば、また話は大きく変わってくる。

シャルだ。こちらの安定性は言うまでもないだろう。彼女始めるタイプではないため静かだが、その信頼性はもはや職剣を武装とするフェオには、相性の上で苦手な魔物がどうも基本的には自分から会話を人の域にある。

しても存在してしまう。

たとえば硬質の身体を持つ土人形や、剣を腐食させる粘性獣などには、剣がなかなか通らない。宙を飛行するタイプの魔物も苦手なようだった。

というか飛行型の魔物を刃物で斬り捨てまくる人間など限られた怪物くらいである。レヴィとか、あとレヴィとか。あいつ、本当に隙がないよなあ……。

ともあれ、そういった前衛が苦手とするタイプの魔物は、土人形を魔弾で破砕し、粘性獣を火炎で焼却し、蝙蝠種の群れを風の刃で切り刻む。

戦術の幅が驚くほど広かった。まるで歩く魔術の教本だ。

ひとつひとつの魔術は、そこまで驚愕するほど技術が高いというわけではない。それでも完成度としては充分に実戦に耐え得る上、手札の多さはそれだけで武器だ。

なんかもう、俺はあんまりやることがなかった。索敵と、あとは道案内くらいである。

それはそれで迷宮冒険者には必須の技能ではあるのだが、戦うふたりに比べると、やはり地味なことは否めない。迷宮のトラップなどを、ふたりが引っかかる前に解除したりとかしてるんだけど。その貢献を、果たしてわかってくれているのか、ちょっと知りたい。

さておき。

「この先、ちょっと瘴気の濃度が上がってるな。部屋も広い。たぶん、十一層は大広間になってると思う。――あってるか？」

先の階層を魔術で調べて、その情報を俺は告げる。フェオに聞いたところ、銀色鼠（シルバーラット）はすでにこれまでの挑戦で三十九層までの突破（とっぱ）を成功させているらしい。つまり追いつくにはそれだけの時間が必要だということなのだが、逆にそれまでの階層の情報なら、フェオの知る限りは入手できるということでもある。実際の速度はこちらが勝るだろう。

というか、もっと早く到達階層を聞いていれば、三十九層まで潜っておきながら戻ってきていることとの違和感に気づけたのだが。てっきりまだ二十層そこそこだと思っていた。

「……そうだよ」フェオが、俺の問いに答える。「姉さんから聞いてる。十一層は大広間になってて、大型の魔物が一体で守ってるって話だったよ」

いわゆるところのボスフロアである。例外を数えればキリがないのだが、それでも基本的に《デカい》は《強い》。特に魔物はそうだ。それだけの瘴気を身に秘（ひ）めているのだから。

迷宮ではときおり、こういった一層分から数層分の高さぶち抜きの空間があり、その階層の瘴気を一身に集めた巨大な魔物が、まるで番人のように待ち構えていることがある。

当然、その魔物はもっと下層域のレベルの強さを備えている。迷宮の攻略を妨（さまた）げる大きな障害であると同時に、迷宮が人間によって造られた空間であることの証明だ。

その場所に限って、倒（たお）しても同じ魔物が復活するから。侵入（しんにゅう）者を永久に拒（こば）むように。

「そう。土人形（ゴーレム）系の大型だって聞いてる」

「三人で勝てる相手なのか？」
訊ねると、フェオはこちらへちらと視線を寄越し、それから首肯した。
「……たぶん。もちろんわたしが見たわけじゃないけど、姉さんに聞いた限りじゃ、強さ的には二十層の中盤くらいまでだっていうし。……アンタら、思ったより使えるし」
――そりゃどうも。などとは言わずに別の言葉を。
「……どう思う、シャル？」
「ま、いいんじゃない？」
本当に二十層程度の強さなら、だけど」
「そんじゃま、行ってみるか」
そんな軽い会話でもってがあったわけでもない。もちろん油断していたわけでもなかった。
――俺たちなら勝てるだろうと判断していたし、仮に負けそうだったら逃げればいいとは思っていたけれど。

※

それが不可能だということ
じた魔力量の異常さに、俺は
気で本当に頭痛を起こしかけ
警戒しながら先に進むと、
——正確には、壁に思える
巨大な、そして醜いヒトガ
つも積み重ねて作った人形と
大な魔晶がある。その中心に
歪にヒトのカタチを模した
試しに、という感じで、俺
きた中では最強クラスの威力
「——《太陽》——」
そして、印刻が世界を書き
直後、護石を中心として、
規模の太陽だ。生命力を象徴
爆音。そして土煙。太陽と

その先で、俺たちは目の前に巨
ほど巨大な土くれの人形をだ。
タだった。たとえるなら、土色
いった感じか。その胸の中央に
は、血のような紅に染まる巨
の刻印が、わずかに浮き上がって見えた。
格が違う。
は手持ちの護石を土人形に向けて投擲してみる。俺が持って
攻撃魔術だ。

後悔ではなく、その濃密な瘴
大な壁を発見した。
をした立方体の石材を、いく
人外。通常の魔物とは明らかに
換える。
強大な熱源が発生する。魔力を
し、勝利を意味する《太陽》の
ルーン。その攻撃的解釈。
高熱に変換したそれは、極小
ど爆弾としてはかなりの力を

秘めている。この火球の炸裂ならば、二十層程度の魔物は一撃で爆散せしめるだろう。

――結論から言えば、

「ほぼ無傷、か。これでは呆れ交じりなシャルの言葉通り、土人形ならまるで通じなかったのだが。

に魔力を発し、その周囲の石の身体には、わずかな焦げ痕が慰めのように残っているだけだった。マジかよ。さすがに俺も、これには少し落ち込んだ。

護石として保持していたこれが通じないとなると、この時点で、俺は護石による攻撃役としては完全なる役立たずが決定した。

「いや、高すぎだろ、防御力……」

現実逃避じみた呟き。目の前の石人形にはある最低でも二十層クラスの、場合によってはそれ以上の防御力が、彼女がもし戦力として機能しない場合、かなり面倒な戦いになるだろう。

「嘘……」

フェオが顔を青褪めさせる。このレベルの魔物と対面するのは、彼女も初めてか。

「どうするよ、逃げるか？」

俺の問いにはシャルが答えた。彼女は肩を竦めて、頭の動きで背後を示した。

「無理みたいだよ。ほら、後ろ」

「え？」と俺は振り向いて、「あー」と直後に納得した。

後方。俺たちが今しがた下りてきた階段が、石の壁によって封鎖されていた。

部屋と階段の境界となる部分に、先程までは確実に存在していなかった石の壁がある。

それが部屋と階段を綺麗に隔てていた。まるで牢獄を囲うかのように。

「……あいつの仕業か」

呟き、俺は目の前の石人形を睨む。背後の石壁と、目の前の魔物が、同じ色と質感だということに気づいたからだ。石くれの分際で、自ら石を操るとはやってくれる。

「特殊能力持ち。四十か……いや、五十層級は下らないな、こいつ」

呆れ交じりに小さく呟いた。何が二十層級だ、話が違いすぎる。

「まだ何かあると思う？」

首を傾げたシャルに、俺は一瞬だけ逡巡して、それから気づきを口にした。

「どうかな……ああ、いや、あるわ」

「何？」

「さっきの焦げ目が直ってる。再生能力持ちだ――文句なし、六十層超級だな」
「……さすがアスタ。呪われてるだけあるね」
「そういう呪いじゃない……はずなんだけどなあ」
「自信なくなってんじゃん。俺が何度こういった理不尽に巻き込まれていることやら。そりゃそうだ。いったい。俺は小さく苦笑する。
――今回は、自分で首を突っ込んだようなものだけれど。
「でもま、最悪ってほどじゃない。これくらいなら想定以下――だろ？」
俺は言った。シャルもまた小さく溜息をつき、それから応じるように微笑む。
「そうね。なるようになるでしょ、この程度」
そんな俺たちを、フェオは幽霊でも見るかのような表情で振り返った。
――信じられない。そうだが、この程度で心を折られても、そのほうが困るという表情に書いてある。
絶望するなら、せめて足掻いてからにするべきだろう。
「さて、手伝ってくれ、フェオ」
「……わ、わたしが……？」
「ああ。もちろん、怖いっものだ。諦めれば死は決まる。
ー」
「ー」
「ー」
「

あえて皮肉げに煽ってみた。このくらいのほうが、彼女はむしろ乗ってくる。
実際、フェオは「な……！」と呟くと、狼狽から立ち直って俺に叫んだ。
「だ、誰が怖がってなんかっ！」
「だよな。……お前なら、そう言ってくれると思ってた」
フェオの文句を強引に中断する。軽い笑いに肩を揺らした。
それがフェオには理解できなかったらしい。彼女は怪訝な表情だ。
「……何、それ？」
「頼りにしてるってことだよ。頼むぜ、フェオ。前衛で走れんのはお前だけなんだ」
話している余裕は少ない。結論から入ろう。
「難しいことは言わない。フェオはいちばん前で、ただ走り回ってくれてればいい。隙があれば攻撃もしていいけど、あれくらいはそれでどうにかなる」
「そ、そんな簡単に……」
「大丈夫だよ」
懐から煙草を取り出し、着火した。直後、石人形の腕が上に大きく振り被られる。
それを見るよりも先んじて、俺は肺から煙を吐いた。――氷。
動きを押し留める。同時に肉体に走る痛みは、その一切を無視しておく。

護石では通用しない。ならば呪いを受けていても、自前の魔力で魔術を起動しなければならなかった。その反動に躊躇うことなんて、もちろんできるわけがない。

「大丈夫だ」再び断言した。「お前ならできるし、お前にしかできない。もし危なくなっても気にすんな。お前なら躱せる。躱せなければ俺が防ぐ」

「……」

「お前の姉貴が……シルヴィアが言ってたぜ？　フェオは私より才能がある、ってな。俺が信じられないなら、せめて姉貴の言葉は信じてやれ。お姉ちゃんは、そのほうが嬉しいものらしい」

「……できる、かな」

「お前にしかできないよ。少なくとも俺は無理。――ああ、シャルは適当にやって」

「適当って」

軽く噴き出すシャル。……今の、ものすごくレアな光景じゃないだろうか。

彼女は無意識だったのか、慌てたように表情を引き締めると、それから言った。

「まあいいけど、どうかな？　あいつの防御、抜けるかちょっと自信ない」

「幸い、奴の弱点なら思いっ切り目に見えてるからな。まあ、なんとかするさ」

「了解。任せた――始めるよ」

「了解。任せた――行くぜ、走れフェオ！」

返事は待たず、俺は煙草で《駿馬(エワス)》を刻み、肉体に加速の魔術を得る。

――直後。

魔術の停止から放たれた石人形(ゴーレム)が、その巨大な腕を叩(たた)き落とした。

※

地震(じしん)さえ起こそうかという衝撃(しょうげき)。だが、人間なら数人は軽く潰(つぶ)せそうな巨腕(きょわん)も、当たらないほど遠くで振るわれては意味がない――などと考えていては、その瞬間(しゅんかん)に命を落とす。

叩きつけられた石人形(ゴーレム)の右腕から、地面を伝って魔力が一直線に流れる。その流れを、俺たちは全員が察知していた。

「――右腕は任せろ！」

叫び、俺は向かって左から回り込むように石人形(ゴーレム)へと走る。

これは《左腕は任せた》という意味でもある。地面を流れる魔力と、真っ向からぶつかる軌道(きどう)だ。放っておけば魔術として成立する。先程、出入り口が塞(ふさ)がれたときのように。

フェオが右側から回り込むのを見て取って、俺は地面の魔力を、その流れの先端(せんたん)を強く

踏みつける――直後、対抗するように足から魔力を流し込んだ。

ふ、っと息を吐いて言う。

「――《車輪》」

この《車輪》のルーンは《駿馬》と同じく移動を意味するルーンだ。違いとして、車輪は移動先にこそ目的がある。

地面につけた足をくっと回し、爪先と踵で円を描いた。

車輪で作った、それが魔力の通り道となる扉だ。扉の出口は、俺たちからまったく離れた地点の壁。地面を走る魔力が俺に誘導され、見当違いの場所から躍り出た。

瞬間、その出口に、石で造られた棘が発生する。殺傷性の高い攻撃をしてくるものだ。

あんなもの、食らえば串刺しどころか身体の大部分が消失する。

それを確認して、俺はそのままさらに駆けた。石人形の動きは図体の割に速いが、それでも速すぎるというほどじゃない。腕が振り上げられるより先に、俺は魔物の腕まで辿り着いていた。――そのまま、俺は魔物の腕を駆け上がる。振り下ろされた腕など道だ。

巨大な石人形にとって、身体を駆け上がってくる俺は羽虫にも等しいらしい。奴は俺の存在を無視したまま、今度は左腕で溜めを作る。打ち下ろしを振り被る形ではなく、殴る形で腕を後ろに引き――その狙う先にはフェオが駆けていた。

だが、俺はフェオを助けない。彼女なら、ただの打撃など見ればフェオは、立ち止まって剣を抜いていた。本来、回御なんて論外だ。それができるような威力じゃない。直後、石人形の一撃が放たれる。ただの殴打が大砲のようを、フェオはただ、直立したまま待ち構えていた。それが避

「――――」

直前。フェオの身体が、ふっとブレる。まるで突然、残像突き抜けていく石人形の攻撃は、フェオの残像を貫いた。という行為そのものが、一種の魔術的な儀式だ。それが彼女――見切り。巨大な腕による打撃を、彼女はただ一歩を前ほとんど倒れこむようにして徹底した彼女の身体能普段の性格からは想像さえつかない、それは鋭さを極めた

「さすが……っ！」

称賛は小さく。俺は俺の仕事をするのだから。

無造作な、それでいて目を瞠るほど素早い身のこなし。剣士と力は、それ自体がひとつの魔術である。

剣士の姿だった。

二発の攻撃を躱され、石人形がバランスを崩す。肩まで駆け上った俺は、

「――《長成(anakreB)》――」

魔術を起動。俺だけが使える、それは逆式の印刻。込められた意味を成立させた魔術が、石人形の成長のルーン。その逆意として阻害の意味を成立させた魔術が、石人形の鞭のようにしなり、巨体を覆っていく。《成長(ベルカナ)》のルーンが本来持つ、魔力で構成された樺の木の幹だ。

途端、全身を強く震わせて暴れ出す石人形。ただでさえ無理のある解釈を、しかも逆転させた意味で成立させているのだから。逆式印刻は、本来の魔術より効果が薄い。だが充分だ。暴れる石人形の肩から飛び下り、落下したまま魔術を起動。大きく移動することで、煙が広い範囲に効力を及ぼしている――それ自体が狙いのひとつだった。

「――《氷(Isa)》《必要(Nauthiz)》――」

落下しながら重ねたのは、遅延や停滞を意味する《氷》に、加えて《必要》のルーン。求めるということは、すなわち欠乏しているということ。それは束縛であり、しがらみである。合わせて三重の印刻全てが拘束として機能し、石人形が完全に硬直する。

地面へと至る最中、ふとフェオと目があった。《氷》を自分にも使うことで、落下速度を減退させているからだろう。フェオの剣に魔力が通い、ばちばちと火花を発していた。

――やれよ、フェオ。

視線で告げて、さらに俺は最後にもうひとつルーンを起動する。

「――《巨人（ゴライアス）》」

そこに込められた意味は、雷神（らいじん）の槌（つち）。

刹那（せつな）、印刻の加護を得てフェオが爆（は）ぜた。そう見えるほどの加速を見せた。

「――ふっ」

という呼吸の刹那、蹴（け）り抜いた地面を爆発させかねないような勢いでフェオは石人形（ゴーレム）の胴体（どうたい）を、垂直に駆け昇っていく。

そのまま石人形（ゴーレム）の身体を、その如（ごと）き勢いでフェオの身体が、空中で上下に交錯（こうさく）した。

俺の身体とフェオの身体が、空中で上下に交錯した。

矢の如き勢いでフェオは石人形（ゴーレム）の胸まで至ると、そこからさらに跳（は）ね上がって宙に身体を躍らせる。帯電している剣から、膨大（ぼうだい）な量の魔力が溢（あふ）れ出ていた。

――雷（かみなり）の属性とは、また珍（めずら）しいものを持っている奴だ。

それは電気の力を用いた加速術式。肉体の性能限界を強引に引き上げて跳躍（ちょうやく）した彼女の前には、脈動するが如く魔力を放つ血色の魔晶――石人形（ゴーレム）の心臓。

飛び上がったフェオは空中で身体を一回転させて、

「――っ、らあ……っ！」

剣を振り下ろす。それは石人形に下された、雷神による審判。
雷撃の刃は、切断というよりほとんど打撃に近い破壊力まで達している。
剣に纏わせた膨大な雷の熱量が、圧倒的なエネルギーとして魔晶へと叩き込まれていく。
石人形が、堪らずその巨体の膝を突く。
魔晶にひびが走り、漏れ出た魔力が空間の瘴気に溶け込んでいった。
それが再度、空間の瘴気ごと再吸収されていく――石人形の復元が始まったのだ。
フェオはそのまま地面へと落ちていった。空中で器用にくるくると回り、落下の衝撃を殺して着地する。猫のような動きだった。
再生の速度は速い。だが俺とて、その隙を見逃すつもりはなかった。
フェオが上体を破壊したなら、下部を受け持つべきは俺だろう。せいぜい足を引っ張ってやる。その仕込みなら、すでに終わっているのだから。
逆式として使っていた《成長》を、再び反転させ元の意に戻す。地面に立った俺が次に用いるのは、《豊穣》のルーンだ。それによって《成長》のルーンが、成長する。
秋の実りのように。凄まじい勢いで圧力を増した拘束が、そのまま石人形の足を締め上げ――粉砕する。巨大な質量が、轟音を伴って地面へと激突した。耳朶を揺さぶる轟音。
ここが迷宮でなければ、きっと床には大きな陥没ができていたことだろう。

倒れ込む石人形を避けて、こちらに来ていたフェオと目が合う。
俺は片手を上げ、
「ワンダウン――だろ？」
「……ん」
フェオが頷き、ぱちりと表情を歪ませる。彼女
は今しがた触れた手を、まじまじと眺めていた。そして、その
シャルの儀式魔術が完成していた。
白い円柱が、突如として石人形の全身を覆ったように見えた
描き出し、そこから熱線が放射されたのだ。
その陣は、言うなれば豪華な装飾照明だ。だが降り注ぐ光線
がら、実際には暴虐的なまでの熱量を秘めた破壊の軌跡である
もはや完全に過剰攻撃とさえ言っていい魔術攻撃だった。文
魔術を、シャルは十全に使いこなしている。
これだけの連携が行えれば、そうそう魔物に遅れをとること
「とは……言うものの、ねぇ」
確かに石人形は破壊できた。三人だけでの戦果としては充分だ。

問題はこの石人形（ゴーレム）が、破壊された程度では死なないということだろう。

事実、全身を焼き尽くされた石人形（ゴーレム）は、それでもまだ再生を続けていた。じわりじわりと、砕（くだ）けた石の身体が元の形にひっつき、復元されていく。

「……ごめん。倒しきれなかったみたいだ」

謝罪するシャルに首を振って答える。

「いや、充分だよ。実際、一回分は殺せてるだろ。再生機能はどうしようもない」

「で、どうする？」

追撃するか、それとも。彼女の問いに、俺（おれ）は迷いもせず答える。

「――今のうちに逃げるとしよう」

この調子なら、無理をすれば勝てないこともない。

復元さえ許さないほど隔絶（かくぜつ）した高火力か、あるいは復元の手の再生能力を持つ魔物の対応方法なんて、だいたいパターンは決まっている。

攻撃力、速度、再生能力――どれを見ても、この石人形（ゴーレム）は以前見た合成獣（キメラ）以下だ。防御力だけは勝っているかもしれないが、少なくともフェオとシャルなら貫ける。

だが俺はこの状況で、無理をしてまで勝つ理由がないと思うのだ。

というより、このとき、この場では――絶対に無理をするべきじゃない。

それは危険だ。

実際、フェオはわずかにふらついている。一気に魔力を放出したからだ。シャルは余裕そうだが、彼女にだって魔力の限りはあるのだから。迷宮では、常に帰り道のことまで計算に入れておかなければならない。行きはよくても帰れないでは間抜けすぎる。

だいたい俺に至っては、魔力の有無に関係なく、大技を放とうものなら反動で吐血してしまうのだ。事実、現時点ですでに身体の内側に異常をきたしている。

三十六計逃げるに如かずだ。

再生にはさすがに時間がいるらしく、石人形は動かない。逃げるだけなら余裕だろう。

「でも、逃げるって、どこに？」

苦笑して訊ねてくるシャル。あれだけの儀式魔術を放ってなお、彼女は平然とした表情だった。魔力量的に、どうやら結構タフらしい。

なるほど考えてみれば、その様子は少しだけ――彼女の父に似ている気がした。

「さて、まあ後ろに逃げられない以上」肩を竦め、せいぜいおどけて答えた。「前に逃げるしかないな」

「それ逃げるって言うの？」

「さあな」

ただ、この手の魔物が階層を越えて追ってくることはないと言っていたが、彼女は何も言わず

も階段を通るのは物理的に不可能なサイズだ。

復元を続ける石人形（ゴーレム）の横を抜けて、広間を出る。そのまま下の階層へと下った。

もしかしたらフェオが何か言ってくるのではないかと思っていたが、

俺たちに従った。さっきから妙（みょう）に静かで、なんだか怖い。

――ともあれ。俺たちは十二層へと向かうことになる。

「……」

去りしなに、俺はひとり、少しだけ振り向いて石人形（ゴーレム）を見た。先程から考えていることがある。大広間を駆け抜けながら、そのことについて思考していた。

石人形（ゴーレム）の胸に嵌（は）め込まれていた紅色の巨大な魔晶。その――真理（しんり）。

本来、ゴーレムは錬金魔術（れんきんまじゅつ）の分野だ。魔物としてではなく、魔術師が作る使い魔としてのゴーレムだが。それに関して以前、義姉（ぎし）のマイアが教えてくれたことがある。

曰（いわ）く――『完全に創造されたゴーレムは絶対に破壊できない』。

「……」

俺は思う。今のは本当に魔物だったのだろうか。単なる石人形（ゴーレム）ではなく、それは錬金魔

術で言うところの《泥の胎児（ゴーレム）》――一種の人造人間（ホムンクルス）だったのではないだろうか。

違うとは思う。少なくとも、その動きは確実に魔物のそれだった。それでも、あの胸に刻まれていた《真理（Emeth）》の文字列が、俺に疑念を抱（いだ）かせる。

確か、魔術師はゴーレムを創るときに、決まった文言をそのどこかに刻むらしい。

「《聖なる四字の神の名前（シェム・ハ・メフォラシュ）》だったかな……確か」

――やはり、あんまり覚えていない。そもそもこちらの話を聞いたのは義姉からじゃなかった気もしてきた。

そうだ。確か、こういうことに詳しい眼帯の珈琲屋（コーヒーや）から聞いたのだ。俺はこの手のことにとんと疎（うと）い。オーステリアに戻（もど）ったら一度、あの店を訪れてみようと思う。

※

「……どうかした？」

と、前を行くシャルに訊ねられた。俺はかぶりを振って、

「すまん。ちょっと考えごと」

「何？」

「あー……珈琲が飲みたい、って」
「……こーひー？」
ああ、この国じゃほとんど飲まれていないんだっけ。俺は苦笑して説明する。
「黒くて苦い汁だよ」
「……そんなのが好きなの？　変わってんね」
「人生の味がするからな」
「馬鹿じゃないの」
呆れた表情のシャルに、何か妙なモノを見るような視線をこちらへと向けていた。まっすぐな痛罵を喰らってしまう。
黙っていたフェオでさえ、確かに間抜けな物言いではあったか。ちょっとしたジョークだったのだけれど。
「どうでもいいけどね。アスタが妄言を吐くのはいつものことだし」
「どういう意味だ」
「これからどうする？」
完全に無視。水筒から水を呷って、シャルは言った。
現在、俺たちは第十二層まで降りてきていた。適当な場所に結界を張り、そこで休憩を取っている。以前、同じような状況で罠に引っ掛かったことが思い出された。

一応、普段以上に気を使って結界を張ったつもりではあるはどうしようもない。そう思ってしまうことにしよう。――しかし。

「どうする、って訊かれてもなあ……」

俺は煙草を取り出し、少し離れた位置で一服しながら考える。

実は、特に腹案があるというわけでもなかった。

「どうしようね？」

「何それ」

言葉に、シャルはわずかな苦笑を見せた。呆れられるよりは割にリラックスしているシャルから目を離し、俺は視線をのほうへ向けた。

彼女は何も言わず、ただ難しい顔をして押し黙っている。ら今の状況は不測の事態ということだ。両腕で脚を抱えたまま、暗い表情で俯いている。

彼女とて相応に迷宮へ入った経験はあるはずだが、それが絶対の安全を保証するかと言えば違う。だから不安になるのも無理のないことだとは思うか。なんだか別のことを考えているようにも見える。

「壁を壊して、戻ることってできないかな？」

何も言わない俺たちに代わり、シャルが一案を提示した。壁、というのは先ほどのゴーレムが作り出し、逃げ道を塞いだものことだろう。

だが、生憎(あいにく)とそれは不可能だ。俺は試そうとさえ思わなかった。

「無理だろうな」

「どうして？」

「あの壁は、たぶん壊せない」

そもそもの話、なぜ内部で魔術師や魔物が暴れても迷宮自体は崩れることがないのか。普通(つう)に考えれば、こんな石の壁程度、ちょっと威力のある魔術なら余波だけで破壊してしまいかねないだろう。

その答えは単純で、どれだけ攻撃しても壊せないほど迷宮の壁は硬(かた)いからである。至極明快。それ以外の理由などなかった。

――というのも、迷宮とは、それ自体がひとつの結界であり、魔力(まりょく)によって自動で成長する結界を作る》という言い換(か)えるなら《力では破壊できず、喪失魔術(ロストロジック)があり、それによって造られたものが迷宮だということ。

迷宮は、現代の魔術師では破壊できない。少なくとも正面からの力技では。

にもかかわらず、あの石人形(ゴーレム)は迷宮に魔力を流し、その床や壁面(へきめん)の形を変えていた。そ

れも一種の破壊であること
宮で生まれたものだったか
――ともあれ。あの石壁
「よって破壊することもで
先に倒すか――」
もしくはそれ以上の理不
「あんた、あの場でそんな
「ま、これでも元冒険者だ
「元冒険者、ねえ……」
なんだか胡乱な視線を向けてくるシャルだった。何かを
……そういえば彼女は、俺が元七星旅団だということを知
俺が魔法使いの弟子だったことは知っていたのに。むしろ
ほうが遥かに少ないはずなのだけれど。そのことはレヴィで
「そっか。冒険者、だったんだ」
ふと、フェオが小声でそう言った。
一瞬聞き逃しかけた声を、なんとか拾って俺は答える。

には違いがない。それが可能だっ
らだろう。その割に人工的な香り
も、形こそ変われど、迷宮の一部
きないってわけだ。方法があると
尽を持ってくるかだ。そのどちら
ことにまで気がついてたの？」
も今は望めない。

「学院に入る前までではな」

「なんで……冒険者なんか？」

一瞬、答えが出てこなかった。フェオの視線に妙な迫力を感じたからだ。

大して語勢が強いわけでもない。小さな声で、か細く訊ねられただけ。答えなければ、それで終わりだっただろう。

ただ――瞳だけはやけに真剣な色を帯びていた。

「学院に入学できたってことなんでしょ。なら――」

「まさか。金持ちの家に生まれたってことは、金持ちの家に生まれたどころか、そもそも俺に親はいない」

この世界には、だが。

それを言うこともできないため、俺は孤児という設定で通している。

「そもそも別に、誰も彼もが金持ちの子どもってわけじゃないぞ、あそこは」

まあ確かに貴族や名門の子弟が多い事実は否めないが。

それだけなら、俺が入学できるわけもない。

「冒険者をやってた理由は、まあ、わかるだろ。生きるためには金が必要で、ガキが手っ取り早く稼ぐには冒険者になるくらいしか手がなかったってだけの話。単純なもんだ」

決して露悪趣味でも不幸自慢でもない。そこは勘違いされたくなかった。

――この世界で、それは別に珍しいことではないのだから。
ここは地球とは違うのだ。
いや、ある意味どこの世界にも通じる話ではあるのだろうが。
「学院に入れたのは、まあほとんどコネだな。冒険者時代の伝手だよ」
「――だから、そんなに強いの？」
「……強いって、俺がか？」
あの戦闘を経て、出た感想が称賛とは予想外だ。攻撃はほとんど任せきりだったのに。
「どうして。どうしてそんか悲痛なまでの瞳で。
フェオは言い募る。どこ
彼女は、俺の肩を掴んでいた。
「……お前。いったいどうした？」
――どうして。フェオはそれじゃ馬鹿みたいじゃん。どうそう言って唇を震わせる。
「だって。だってわたし、弱々しくもない。ただ淡々と彼女わかったはずなのに。ひとり
「わたしは、すぐには決められなかった。戦うしかないってじゃ勝てないって気づいたから――そこから動けなかった。信じられなかった」

「……フェオ、お前――」
「わたしは迷宮の攻略パーティにさえ入れてもらえなかったのか。仲間から認めてもらえなかったわたしの代わりに、学院から人を呼んできた」
――それが。フェオが、
「どうしてわたしは……こんなに弱いんだろう」
彼女は至極大真面目に、どころか半ば悲痛なほどの視線を俺に向けている。
その色には、見覚えがあった。いつだったか、それは鏡で見た表情なのだから。
だから、俺は言う。これだけは言っておかなければならない。
「――いや、だからお前充分強いだろ」
「え――？」
「その歳でそんだけ戦えて弱い弱い泣き言言われても。そんな知るか」
別に説教をするつもりはない。無論、お節介でなどあり得ない。
彼女が何を考えているのかは理解しているつもりだ。
「つ、強くなんてない！　わたしだって馬鹿じゃないんだから」
フェオは咄嗟に立ち上がった。目尻がわずかに濡れている。
「迷宮に入ってからずっとアンタが道案内してたことくらいわかってる！　罠にはひと

つもかからないし、戦闘だっていつもわたしが動きやすいようにしてたし……わ、わたしがひとりだったら、こんなところまで来られなかった！　あんなすごい魔術使えるし、最後の一撃だって、なんか援護さえなかったっ!!」

ひと息に言い切るフェオ。それが、彼女の中でわだかまっていたものだったらしい。

その気持ちが、わからなくはずっと同じことに悩んでいたのだから。俺には言えない。俺だって、魔術なんて、俺には最初からほとんど使えなかった。どれだけ訓練したって、印刻以外の適性は何ひとつ持ち合わせていなかったんだからこそ――俺が、言ってやろうと思ったのだ。

「は？　何それ？」

と。フェオがぽかんとした表情になる。俺はその隙に言葉を重ねた。

「その歳であんだけ動けて、まだ不満なの？　なんだそれ、嫌味のつもりか。俺じゃ逆立ちしたってあんな真似できねえぞ、喧嘩売ってんのか？　それとも遠回しに自慢してんのか。こちとら魔術使うたびに反動で血を吐くんですけど、そこんとこどう思う？」

「え、ええ……!?」

俺のあからさまな罵倒に反動で、彼女は面食らって狼狽えている。後ろでシャルまでがぽかん

としていた。そちらは、まあ、とりあえず無視しておくとしよう。今はフェオだ。

「気づいてないかもしれないけど、俺はさっきの戦闘の反動でだいぶダメージ受けてるからね。これ言わないでおこうと思ったけど、もう知らん。呪われてんだよ、俺。護石とか作っておくならともかく、自分の魔力使うだけで筋肉とか骨とか内臓が軋むからね？　実は血を吐いてたからね、さっき。隠れて。どう？　羨ましい？　代わる？」

「の、呪い……？　ええ……？」

「いや別に俺の話はいい。でもお前の話も同じくらいどうでもよくない？　それをごちゃごちゃといきなり語られても知るか。つーか、そんな嫉妬で噛みつかれてたの、俺？　それなんか俺と関係ある？　ねえ？　こっち完全に当たられ損だよね、それ？　なんで俺、あんなにお前から攻撃されなきゃ駄目だったわけ？」

「……あ、あの」

「あれなの、そんなに学院に入りたいの？　なら別に紹介するけど？　来る？　これから学生やる？　学生やってもいいけどさあ、この歳にもなって思春期拗らせるのやめてくれよ。やっぱ義務教育制度のない世界は駄目だな。そういうのは中学校で済ませとけ！」

途中から、自分でも何を言ってるのかよくわからなくなってきた。

フェオはもはや怯えている。

「ご、ごめっ、ごめんなさ……」
「だーっ、たっくもうー！　俺はカウンセラーじゃねーし、えんだよー　それが何いきなりコンプレックス全力疾走してんだ、ああ!?」
「か……かうんせ？　こんぷ……？」
「いいか、よく聞けー　さっきも言ったがもう一回言うぞ！　お前は――強い!!」
アホ丸出しの言葉をまくし立てた俺に、フェオは目を白黒させている。意味もほとんどわからなかったろうに、勢いに押されてしまったらしい。
その脇では、シャルが呆れたような目でこちらを睨んでいる。呆れたような、というか、もう完全に目が「馬鹿じゃないの」と語っているレベルだった。
容赦ない蔑視の目と、潤んで弱々しい瞳。そのふたつを受けて、さすがに俺も冷静さを取り戻した。……というか、ぷっちゃけ恥ずかしくなってきた。
何言ってんだ俺。いちばん馬鹿みたいなのは俺だった。
古い煙草を揉み消し、俺は新しい煙草に火をつけてから改めて言葉を紡ぐ。
「まあ、あれだ。弱いとしたら、それはなんだ、あれだ。心とか、なんかそんなんだろ。知らんけど。別に自分ひとりでなんでもできる必要はないんだ。できる奴がいるなら、できる奴に頼ればいいんだよ。俺はそれを恥だとは思わない。もしそいつにできないことが

あるんなら、次はそのときに力を貸してやればいい」

別に精神論へ話をすりかえるつもりはない。要は尺度の問題だろう。

いや、もともと彼女が言っているのは精神的な話なのだろうが。そんなことは知らん。

現実は現実として認識するべきだ。そのために俺は、それが正しいかどうかなんて、この場合は問題じゃない。

い。今、この場だけでも、俺の言葉に騙されてくれれば、それで充分だった。

「強度なんて所詮は水物だろ。絶対なんてない。そんなことを考えるだけ時間の無駄だ」

魔術師は特に。強さなんて相性やコンディションでいくらでも変わる。それで敵わないときは別の戦い方を考えるなり、ほかの誰かに任せるなり、そもそも戦わない方法を考えるなりすればいい。それで目的は達成できる。

相手がいたとしても、その

強い奴が勝つんじゃない。勝った奴が強いわけでもない。

――弱いままでも、勝てばいいだけの話だ。

たぶんシルヴィアだって、俺と同じことを言うだろう。

「お前もさ、まあ魔術は剣より苦手なのかもしれないけどとないんじゃないのって話。さっきも言ったけど、今だって充分に強いわけだし。少なくとも剣の才能はあったわけだろ？　そこに胡坐をかくわけでもなく、きちんと努力もして

きた――それくらいは見ればわかる」
彼女は。フェオ＝リッタ＝ーは。
何も答えなかった。それで構わない。俺の言ったことなど、嘘ばかりだ。
「だから、まあ、なんだ――そんなことで、うだうだ悩むなよ」
「別に、悩んでないけど」
ありがとう……ございました」ふっと視線を逸らし、赤らんだ表情でフェオは呟く。「でも、
「お礼なんて言わなくていい。いきなりキレるから適当なこと言っただけだ」
「……そうだね。バカみたいだった。勝手なこと言ってくれちゃってさ」
フェオはそっぽを向いて言う。だが、その表情にはわずかな笑みが浮かんでいた。ならば
俺も、適当なことを好き勝手に言った甲斐はあったのだろう。
それで充分だ。俺は話題を変える。
「しかしお前、それだけの実力があって自分に自信がないってのも妙な話だな。銀色鼠の
攻略部隊は、お前よりそんなに強いのか？」
「いや……さあ」
「さあって、お前……」
なんとなくの質問だった。特に意味はない。

だがフェオの反応が、俺にとって余りにも予想外だった。
「自分のクランだろ。お前より強い奴がいたんじゃないのか？」
「姉さんには勝ったことないし、かといってさすがに子どもの実力なんて、わかんないよ」
「ほかの連中は？」
「どうだろう。最近は新入りのヒトが多いから。わたしは知らないけど、強いヒトがいっぱい集まってるんだと思うよ。選んだのは幹部メンバーだから、わたしは基準までは知らないけど。攻略部隊のヒトの半分は、ほとんど話したこともないよ」
――いや、待て。
それは、かなりおかしくないか？
「――――」
俺は意図せず押し黙る。
待て待て待て。落ち着け地面を向いて考え込んだ。
冷静になれ。今、俺は何を《おかしい》と感じたんだ？　違和感があっても、それを言語化できなきゃ意味がない。冷静に考えろ。
「……アスタ？　どうかした？」
訝るシャルの声が聞こえたが、答えている余裕がない。

俺はしばらく無言で考え、そして考えた。
迷宮の攻略に、寄せ集めただけの新入りを使うだろうか。
だ。いや、それはいい。問題は、なぜそうしたのかを考えることのほうだ。
――銀色鼠（シルバーラット）の挑戦（ちょうせん）。増え続けるクランのメンバー。その割の選抜（せんばつ）。フェオが選ばれなかったこと。謎（なぞ）の監視（かんし）。転移の指環（ゆびわ）。
オーステリア迷宮。タラス迷宮。合成獣（キメラ）と石人形（ゴーレム）。前回の事件との繋（つな）がり。
その共通点。その目的。
「……ど、どうかしたの……？」
様子があまりにもおかしかったからか、シャルだけでなくフェオまで不審そうな視線を向けてきていることには気づいていた。
なんだかフェオが、しおらしくなっている気がする。だがやはり今は構っていられない。思索（しさく）を重ね、深め――
「――今から俺は魔術を使う」
「え……？」ふたりの声が重なった。
俺は続ける。言い含（ふく）めておかなければならないことがある。
「で、たぶんそのあと俺は血を吐（は）く。けど、俺のことは無視してくれ。周りだけ見てろ」

「……何する気？」

シャルが俺に問う。頷き、俺はこう答えた。

「――今から、この迷宮の全域に、索敵魔術をかける」

「そ、そんなことできるわけ……」シャルは言いかけ、しかし首を振る。「あるから言ってるわけね……本当、でたらめばっか」

「やろうと思えばな。ただ魔力をかなり使うだろうから、時間もかかるし、反動もかなり大きくなる。だけど――何があっても俺のことは無視してくれ」

「――それはできないな」

そう言ったのはシャルでも、フェオでもない。もちろん俺であるわけがない。

彼女たちは反射的に魔術を起動し、剣を抜き放っていた。通路の先。まったく気づかないうちにその場所に立っていた人影に、シャルが魔弾を放ち、フェオが斬りかかる。

そして――その両方がそいつに直撃した。

魔弾がそいつの身体を撃ち、剣がそいつの首を落とす。その瞬間に影は消え、

「それはできない。君を無視することなんて、僕にできるわけがないんだ」

まったく同じ声が、俺たちの背後から聞こえてきた。
振り返り、そして俺は言う。
「まさか本当に釣られて出てくるとは、あんまり思ってなかったよ」
「といっても、完全にブラフってわけじゃなかったんだろ？　を得ないさ」
「まあ、出てこなければ本当にやったな。言ったことも――久し振りだね」と、枯れ草色の外套を纏った男が言う。
「そこまででもないだろ」と、肩を竦めて俺は答えた。
「あえて動かなかった辺りはさすがだね。お陰で不意打ちはできなかった。ま、するつもりなんてなかったけどね。――さて、まあ一応言っておこうか」
男が。あの迷宮で出会った、枯れ木のような男が言う。
「引き返してはくれないかな？　ここで君たちを相手にするのは、正直本当に骨が折れる」
「悪いがそれはできねえよ。こっちにも事情があるし、あとお前たちには聞きたいことができた。前は逃げられたが――今回は、そっちにとっても不測だろう？」
「――不測の事態は、諸手を挙げて歓迎しろ」
まるで下手くそな舞台役者のように、男が気取って両手を広げる。その様子は隙だらけ

としか言えなかったが、そう簡単には動けない。《逃げる》ことが得意だと言ってのけたこいつを目の前にしては。

「それが僕らの団長の方針でね。逆らいたくても、こればかりはどうしようもない」

「……なるほど。あらゆるところが杜撰なわけだよ。そのせいでね。でも、それならよかった。だって君らは、僕らの敵だ」

「意図したわけじゃないけどね。

「そうまで言うんだ。名乗るくらいはしてくれるんだろうな？」

「――もちろん」

一歩。男がこちらに歩み寄った。

俺は動かない。背後でふたりが身構える。状況的には三対一だ。負ける要素はない。

はずだ。そう頭では判断できても、決定的な行動が取れないでいる。

それがわかっているから。もう一歩、男はこちらに近づいて、そして笑顔を形作った。

今にも折れそうな枯れ木のような姿で。彼は。

「《七曜教団》がひとり――《木星》のアルベル＝ボルドウック」

――以後よろしく頼むよ、僕の敵。

俺の敵が、そう名乗る。

のちに幾度となく命を奪い合うことになる相手。正義を謳い、美徳を信条に、救済を叫

び――七星旅団（セブンスターズ）を敵視する最大の敵。

――もうひとつの、七つの星の一員が。

第五話 もうひとつの、七つの星

「――七曜教団、ね。聞いたことがないな」

そう言った。そんなことを言うので、俺は精いっぱいだった対するアルベル――《木星》などと名乗る男――は苦笑(くしょう)を零(こぼ)して肩を竦める。

「だろうね」

「なんだ？　その名前は、七星旅団(セブンスターズ)をリスペクトでもしてるのか？」

「まさか。でも、そんなところかな」

「どっちだよ……で、何？　お前のその《木星》ってのは、二つ名か何かか？」

「どちらかというと暗号名(コードネーム)かな」

「てことは、ほかにも《火星》だの《水星》だのがいるわけか？」

「まあ、そうなるだろうね」

「……さっきからずいぶんとペラペラ喋るが、聞いたからには生きて返さないって、そういう腹か？」

「まさか。この程度、聞かれたところで何も困らない。というよりも――」

アルベルがさらに一歩、こちらに近づく。

俺は――やはり動かなかった。

「聞かれたくらいで終わるようなら、それは初めからそういう《運命》だったというだけの話だよ。といっても、これは受け売りなんだけどね」

「そうか」要するに、会話をするだけ無駄なのだろう。「まあ、お前がどんなクランに所属していようと知ったことじゃない。道を空けろ、邪魔するなら押し通るぞ」

「ずいぶんと上からものを言うね、大罪人の分際で」

煽るでもなく、アルベルは平易な口調で言う。

だが問答に付き合う時間はなく、だから俺は魔術を起動させようと腕を持ち上げた――

その瞬間。

それを留めるように、枯れ草の男は口を歪めた。

「――ふたつ、勘違いを正そうか」

「何……？」

「ひとつ目に、僕たちは軍団じゃない――教団だ」

「……宗教者か、お前」

「そう。《七曜教団》だからね。教えに殉じて世界を救う。僕たちは、正義の味方だ」
「それで俺は教えに背く罪人だと？　勝手な物言いだな」
「仕方ないさ。真の正義は、いつだって他者から理解されないものだから」
狂信者はいつだって同じ言葉を発する。そんな妄言に取り合うつもりはなかった。
アルベルもまたそのことを理解していたのだろう。残念そうに肩を揺らし、ただ続けた。
「そしてふたつ目の勘違い。――悪いけれど、君をこの先に通すつもりはない」
いっそ芸がないとさえ言える宣言に、俺は小さく苦笑を零した。的外れな発言だと思ったからだ。なぜなら俺は、そんな勘違いをしていたつもりはない。
この状況で奴が出てきた意味くらい、姿を見た瞬間からわかっていた。
「足止めのつもりか」
「そうだね。――君の予想は大方のところ的中している。シルヴィア＝リッターには、この迷宮の中で死んでもらおうと思っている。それが僕たちの目的だよ」
アルベルはもはや、それを隠すことなく言葉にした。
すでに確定した事実を述べるように、アルベルの態度に気負いはない。
「――お前」背後で、フェオが震えた声を出す。「姉さんに、何をした」
怒りが彼女を覆っていた。当然だろう、アルベルは今、彼女の身内の死を宣言したのだ

から。

だがアルベルは、フェオの怒(ど)気など意に介した様子もない。

「別に何も。僕は何もしないし、誰も何もしない。彼女が死ぬのは運命だ、何かをする必要なんてない。いや、僕らが手を下してはいけないとさえ言える」

「ふざけるな！」

「生憎と本気だよ、理解はされないだろうけれどね。これは必要なことで、その邪魔をするほうが害悪なんだ。君も人間なら、世界の礎(いしずえ)になれる姉を誇(ほこ)れ」

「貴、様……っ！」

あくまで冷静に宣(のたま)うアルベルに、対するフェオが激昂(げっこう)する。

咄嗟に俺(おれ)は叫びを発した。

「――フェオ。挑発(ちょうはつ)に乗るな」

「うるさい黙れ！」

「冷静になれ！」大声で叫ぶ。「俺を足止めするってことは、今ならまだ間に合うって意味だ。お前の姉はまだ生きてるよ。ただ殺すつもりなら、わざわざ迷宮に呼び寄せたりするわけがない。奴らなりに、なんかの条件を満たさないと殺せないんだろう」

「……っ」

シルヴィアを引き合いに出したからか、フェオはわずかながら冷静さを取り戻したようだ。憎々しげに歯噛みしたようだが、ひとまずの激昂は抑えられたらしい。

挑発のつもりさえなかったのか、アルベルは顔色ひとつ変えない。俺は目の前の男から視線を外さないまま、背後のふたりに向かって告げる。

「俺に任せて先に行け。シャルもだ」

これもまたありがちな台詞か。思わず失笑が漏れそうになる。

「……いいの？」

と、答えたのはこれまで黙っていたシャルだった。

前を向いたままで頷き、アルベルにも聞こえるように言うフェオはシルヴィアを、シャルはピトスを頼む。俺もすぐに追いつくから」

「……格好つけるね」

真顔のままで言うシャルに、視線をずらして笑い返した。

「ま、これでも男だ。女子の前なら格好くらいつける」

「だからって、そう簡単に通してくれるとも思えないけど？」

シャルは視線を、悠然と立つ目の前の男へと向けた。

視線を受けたアルベルは、すり切れた外套をはためかせて
「別に通っても構わないよ。僕が足止めをするのは、あくまで
君たちが向かったところでアスタ＝セイエルひとりだ。
「だ、そうだ。行け、ふたりとも。俺がこいつを止めておく」
「……わかった」
しばしの逡巡のあと、シャルは頷いて前に進んだ。
その後ろをフェオが追う。
「ごめん。……その、ありがとう」
反応は返さなかった。去っていく足音を耳だけで聞く。
アルベルは、それを止めようとさえしない。本当に、脅威だとはまったく見做していないのだろう。奴らが何を考えているのか、俺にはちっともわからない。
やがて、通路の奥にふたりが消えるのを待って、俺は静かに口を開く。
「……なぜ見逃した？」
「僕は君を舐めていない。目」
あっさりと。アルベルは答える。
俺の隠している秘密を当然のように口にした。

もちろん、知られていることは知っていた。だから俺も動じない。

「――もうひとつ。なぜこの期に及んで俺を止める？　止めよ来る前に、俺を止めればよかっただろう？」

「それはできないと僕は知っている」アルベルは首を振った。ころで、君は必ずこの迷宮にやって来るらしい。それはもうどうしようもない」

「……言ってることの意味がまるでわからん」

「いいんだよ、別に。どうせ、あのふたりには何もできない。宮に自ら来て、そして死ぬ。初めからそう決まってる。僕らはそれを早めただけだ」

「お前らの神様が、そう言っていたから――とでも言うつもりか？」

「そんなところだね。いずれにせよ、彼女たちには何もできない」

「そうか？　お前は俺を舐めてないのかもしれないが、でも、彼女たちが弱いとは思わないよ。戦えば僕より強いかもしれない。――だが」

で解決できることのほうが、世界には少ないものだからね」

「……不服ながら、その意見には同感だな。――だが」

それでも、やはりアルベルは見落としている。

所属を明かされたその代わりに、俺はそれを教えてやることにした。

「――あのふたりは、ただ強いだけなんかじゃない」

同時。

俺は魔術を励起した。

※

発動したのは捕縛術式だ。魔力そのものを隠蔽して、アルベルの姿を認識した瞬間から捕らえて――そして、殺すために。

手心を加えている余裕はない。確実に殺すつもりでいた。

準備していた。

アルベルは俺を舐めていないと言ったが、俺だってアルベルを舐めてはいなかった。

元よりこいつは、俺の索敵魔術を掻い潜ることのできる魔術師なのだから。

一度目はオーステリアで転移の罠に嵌められ、最下層で二度目は見破ったものの、この短期間で術式を改良したということだ。

タラスで三度目にリベンジを受けている。要するに、アルベルはこの男は間違いなく最高峰にいる。そ

こと自らの存在を隠蔽する魔術に関して言えば、

の技術が暗殺というベクトルに傾いたとき、どんな結果をもたらすのかは想像に難くない。
だが、それでも俺はアルベルを舐めていたのだろう。というよりも見誤っていた。
迷宮の床に魔力が走り、アルベルの足元に拘束魔術が起動する。
それをアルベルは、ただ一歩前に出るだけで回避した。
冷静極まりないその対処は、実戦慣れを示す明確な証拠だ。一瞬で術式を読み、《その場所にさえいなければ捕まらない》ということを奴は理解している。
即座に俺は失敗を悟った。
拘束術式の対象をアルベルという個人に向けた場合、発動前に気づかれる恐れが高い。
だから俺は床を経由させることで隠蔽性を増したのだが、それは同時に《人間》ではなく《場所》を魔術の対象にしたということだ。
一歩を前に出たアルベルは、当然ながら躱される。読まれていた。
術の範囲から逃れれば、すなわち、それは反撃の猶予を与えているということだ。
――魔弾だ。
直感的にそれを悟った。
最下級の基礎魔術だが、純粋魔力をそのまま撃ち出すという、攻撃手段としてはおよそ対人ならば充分な殺傷能力だ。当たれば骨くらいは軽く砕ける。

何より発動が速い。

失敗した術式は即座に破棄し、代わりに隠し持っていた護石を起動する。

直後、俺の眼前に半透明の防壁が現れ、射出された魔弾を防いだ。

同時にアルベルが魔弾を放つ。砲丸大の不可視の弾丸が連射されていった。

さり、残りが背後へと飛んでいった。

どうやら、威力と狙いは相当に甘いらしい。

何かに特化した魔術師は、別の分野を極端に苦手とするものだ。

魔晶に《防御》を刻んだ護石は、あらかじめ用意しておくことで瞬間的な防壁の展開を可能にする。現状、俺の戦力は大半が事前準備による護石だ。発動だけなら魔力さえ必要としない。印刻使いの戦い方とは、突き詰めても《書く》ということに終始する。

その欠陥たる速度を補うために、魔具を準備しておくのが俺の戦い方だ。

とはいえ、持てる量にも、作れる量にも限度はある。何より、効果が遥かに薄かった。護石に込めた魔力だけで対処できる相手ではない。

「言わなかったかな。隠れることと、逃げることだけは得意だって」

誇るでもないアルベルの言葉に、俺は隠さず舌打ちをした。

「……お前を相手に、こっちの隠蔽は通じないみたいだな」

「隠れることが得意ということは、見つけることも得意ってことだよ」
「その割に、攻撃のほうは得意じゃないみたいだが」
「戦いは苦手なんだ。――これでも、平和主義だから」
「づ――っ!?」
「どこが――」と、言いかけた刹那。
俺は背後から強い圧力を感じ、咄嗟に身を捩って跳んだ。
右へ回るように半身を捻り、背後からの一撃に回避を試みる。
だが遅かった。もともと魔力圧を感じた時点で遅すぎる。
これでも足りなかった回避のツケを、背中を掠めた魔弾が払う。
――誘導弾……っ!
というより、単に戻ってきただけの、いわばブーメランの防壁に殺されなかった魔弾は、まだ生きていたのだ。威力と精密性を犠牲に、そんな小技が術式に込められていたらしい。
気づけなかった。本当ならば、見ればそれがどんな魔術であるか、ある程度読むことはできたはずなのに。
――術式それ自体を隠蔽された。

アルベルの魔術は、使われるまで、いや使われて実際に効果を発揮するまで、それがどんな術であるのかを看破できない。普通なら術式や状況からある程度読み取れるそれを、奴は完全に隠蔽する。存在の気配さえ隠し切る。地力が弱く、読み合いとはったりで戦わなければならない俺にとって、その相性は最悪と言っていいだろう。

慢心の代償はそれだけではなかった。

気づけば、すぐ目の前にアルベルがいる。一瞬でも意識を離すと、即座に見失うほどの影の薄さだ。まるで、人間の意識の間隙に住んでいるかのよう。

そして――衝撃が俺を襲った。

体勢を崩し、前のめりになっていた俺は、そのまま折れた腹部を蹴り抜かれて飛ばされる。そのまま一気に数メートルを吹き飛び、背中から迷宮の床へと激突した。

「が――っ」肺から、空気が搾り出される。「――ぶ」

蹴られた顔の痛みより、背中への衝撃が先行していた。魔弾でできた擦過傷を、迷宮の床で殴られる。口から血が漏れた。どこか内臓がやられたかもしれない。

だが、その場に留まっているわけにもいかない。口許の血を指につけ、そのまま俺は地面に印刻を記した。ほとんど血を飛ばすように。この行為には一秒もかからない。

「――《防御（Shield）》、《野牛（Ox）》……っ」

根源的な力を意味する《野牛》で強化した《防御》の防壁が、直後、アルベルの発した魔弾を完全に防いだ。魔術的に、血液は媒介としてかなり優秀な概念を持っている。

その間に俺は立ち上がり、血で辺りを汚しながらも防壁の先へ目をやった。

「……汚いな」

魔弾を防がれたアルベルが、わずかに憎々しげな表情で呟いた。

「本当に生き汚い。吐いた血まで魔術の媒介かい？　頭の回転、それでも見せた嫌悪の色だ。

「……はっ。仕留め切れなかったくせに、よく言う……」

「お願いだから、僕を失望させないでくれよ。僕の《忍耐》を無にしないでほしい」

「はあ……？」

「七星旅団――僕の敵。頼むから、僕にとって大きな試練であってくれ。君が魔術を使うことで弱体化されても困るからだ。ただでさえ呪われているんだって、望むところには至れないだろう？」

だからね。その程度では僕

「……言ってろ、狂信者」

俺は懐から煙草を取り出し、悠長に火をつけてそれを吸った。

湧き上がる咳を気合いで抑えつける。まったく優雅じゃない――このザマじゃきっと笑

われてしまう。
結局、俺が見誤っていたのはアルベルではない。自分のことと呪われた俺が簡単に対処できるほど、甘い相手ではなかったということ。
「――《紫煙の記述師》」
ふとアルベルが、呟くようにそう言った。
愉快そうに眇めた右目は、余裕のつもりか、それとも別の意図があるのか。
「君の二つ名は知っている。今度はその煙草が魔術の媒介か？」
問いには答えず、俺は一方的に別の言葉を吐く。
「いや、確かに俺は七星じゃいちばん弱かったけどな」
「うん……？」
「それでも、俺のせいで七星の評判を下げたとあっちゃ、あいつらに何言われるかわかったもんじゃない」
防壁はまだ生きている。あと一撃なら防げるだろう。だから無論、防いでいるだけでは意味がない。それはわかっているし、俺がわかっていることは目の前の男もわかっているだろう。
余裕ではなく、ただ純粋に疑問だという風にアルベルが俺へ問うた。

「それで、どんな忍耐を見せてくれるんだい？」
「――お前。俺の二つ名前で呼ばれてんのか、つまり知ってるってことだよな？」
「……それが？」
「なんでそんな恥ずかしい――なら、お前だって俺を舐めている。
肺に溜めた紫煙を、俺はふうっ、と自分で張った防壁に吹きかけた。
途端、まるでその息に押されたかのように、防壁がそのまの形で、前に向かって吹き飛んでいく。まるでスライドするように。――ただし、駿馬の如き加速を得て。
「は――？」
目を細めるアルベル。当然だろう、盾の形を取る防御の魔術は普通、出したその場から動かない。押されて動くような盾では、初めから壁の意味を為さないからだ。
だが俺の防壁は、初めから薄い板の形をした魔弾であったかのように射出されている。硬い壁が高速で動けば、それだけで充分に攻撃として成立する。
「小細工だ」
アルベルは咄嗟に魔弾を放ち、防壁を相殺して砕いた。
まるで脆いガラスのように砕けた防壁が、きらきらと細かい破片となって散乱する。

――そして、その全てが再度、空中で加速してアルベルに襲いかかった。

「な……っ」

今度こそ驚愕し、アルベルは大きく目を見開いた。

襲い来る無数の破片を、アルベルは防御術式を起動することで防ぐ。円形の盾に、破片が飛び散って突き刺さった。

直後――その防壁が爆発する。

「ぐっ――う!?」

爆風に晒され、アルベルはそのまま弾き飛ばされたかのように見えた。

とはいえ、奴も自分で作った防御の魔術が、まさか自分に害を為すとは想定外だったろう。予想外を畳みかけることで威力を殺したらしい。

防壁を作っていた右腕に、アルベルは裂傷を負っていた。

ぽたぽたと、指先からわずかに滴る血が、迷宮の床に染みを作っている。だが、結局のところがそれだけだ。それだけで、アルベルという魔術師は倒れない。

――だから、それだけで終わりにするつもりはない。

瞬間、アルベルが後ろを振り返った。目の前の俺から視線を外し、無防備に逆の方向を

見るアルベル。

一見してあり得ない隙のたのだ。きっとそうするだ

――ガシャン、という音れた音の再現。ただ音を繰けれど。口の意味を持つ《主神》のルー

「なん――」驚愕するアル危機を感じたから振り返す単純に書いた文字では、たのかわからなかっただろう。

俺が書かなければならなのは書くという行為そのも不定の煙を、文字という、けた防壁の欠片も、懐にあ見えるか見えないかなど

「――《氷》、《巨人》」

当然だろう。

のだから。

のに、そこには何もなかったからこそ、たったそれだけのことアルベルに気づかれる。奴には俺う。あのメロでさえ、まったく同じが、いつの間に魔術を起動し策に引っ掛かったのだから。いと思っている時点で、すでに勘違いも甚だしい。俺に必要なことにして解釈できる俺だ。ならば割れた硝子の破片でも、砕る携帯灰皿の中の灰でさえ――その形は、俺にとっては印刻だ。大した問題じゃない。俺が認識できるか否かだ。

ルーンを起動する。地面から、氷の棘を生やす魔術を。なんただ後ろを振り向かせただけの一瞬で、正面からの攻撃は不意アルベルの正面の床から、斜めに生え出た氷の棘。それが、鮮血が、舞う。確実に殺ルの肉体を削ぎ抉っていくすつもりで放った魔術だ。それは必――そして、それだけだった。

「――っ」

膝からくずおれ、アルベルはこちらへと向き直った。憎々し血の滴る右腕で押さえたその脇腹からも奴は血を流していを貫けてはいなかった。氷の棘は、アルベルの脇腹を掠めて裂一瞬で？」

「躱した……のか？　あの

信じ難かった。おそらくレヴィにさえ不可能だ。ましてアル戦闘に長けているとは思えない。おそらく身体能力なら俺以下重傷ではある。だが死んではいない。確実に殺ったと思った身を捻って躱したとか、魔術で防御したというのならわかる動けていないし、魔力の障壁が張られた様子もない。氷の棘による攻撃は確かに当たって

いた。にもかかわらず、中途半端な効果しか与えられていないのは――それが不可解だ。

何をされたのか、俺には見当もつかなかった。把握できる事実はひとつ。

アルベルが、今もなお生きているということだけ。

「……凄まじい、処理能力だね。――ぐっ」

自分が負傷した事実を確認して、アルベルが小さく口を開く。その声には確かに驚きの色合いがあった。その怪我さえ無視して呟いたアルベルに、俺は何も答えられない。

ただ、代わりに血を吐いた。奴と同じく、俺も。

「ぐ――、ぶっ」

無茶な魔術の反動が、肉体を内側から削っていた。狭くなった魔力の出口を、強引に押し広げた反動だ。護石を介さず、しかもこれだけの連発だ。与えたダメージはこちらのほうが多いのに、受けた反動でその差が均されてしまっている。

俺の攻撃は必殺でなくてはならなかった。

「……やっていることは基礎的だ。《法則の書き換え》――ただそれだけ。魔術の基礎」

アルベルは淡々と言う。「空間に固定されているはずの防壁を、その術式を書き換えて、動くものであると世界を騙す。それを割られたら今度は炸裂させて、破片がこちらの防壁へ刺さった瞬間に魔力を通じて支配権を乗っ取った……。その次に、どうやったのかは知

らないけれど、背後に意識を向けさせた。全てが計算されている。それが、《紫煙の記述師》の戦い方か」

純粋な感嘆を漏らすアルベルだったが、俺からしてみれば皮肉にしか聞こえない。

「……饒舌（じょうぜつ）、だな。うるさいお喋（しゃべ）りは、嫌（きら）われるぞ」

「そう言うなよ。感心しているのは……本当だ。一度完成された魔術をあとから書き換えるなんて、魔術の常識に照らせばあり得ないことだ」

驚くアルベルだったが、何も俺の専売特許というわけじゃない。確かに難易度は高いが、俺以外にも同じことができる魔術師はいるだろう。本来なら不要な技術でもある。

そもそもの出力が低い俺だからこそ、こういう小細工も必要だっただけ。威力が低ければ、まず隙を作るところから始めなければならない。

それだけの話であり、そして――それさえ通じなかったという話でしかない。

「僕の術式を後出しで書き換えたことまで含めれば、都合四回、あの一瞬の間に術式を変え続けたっていうわけだね。挙句に別の魔術さえ用意していた――畏（おそ）れ入ったよ。確かに、舐めていたのは僕のほうらしい」

「お互（たが）い様だろ、なんだあの魔弾。当たるまで気づけない攻撃なんて、それだけでもう必殺だ。逃げ隠（かく）れするだけが能じゃないみたいだな」

「防いだくせによく言うよ。普通なら、当たってから気づくっていうのに」
純粋な感嘆を見せて、それからアルベルはゆっくりと立ち上がる。
こちらをまっすぐに見据えながら、静かに言葉を作っていた。
「立ち止まり煙草を吸ったまま、ただの一歩も動かず戦場全てを自在に書き換える」
「……」
「それが君の二つ名の由来だったね――さすがは記述師。七星を舐めたのは撤回しよう」
「――は」
と、俺は笑った。なんの慰めにもなっていない。
アルベルが饒舌なのは、もう勝ちを確信しているからに過ぎなかった。
ジリ貧であることに変わりはない。というか、すでに詰んでいる。魔力は枯渇寸前。加えて連続して魔術を使った反動で、肉体のあちこちにガタがきていた。口の中が鉄の味で満ちている。それは、けれど、敗北よりはずっとマシな味だろう。
「残念だよ」
アルベルが言う。俺の事情を、奴もまた完全に掴んでいる。
こいつの考えを書き換えることは、どうもできそうになかった。
「やっと会えた敵が、ここまで技術を持つ魔術師が――それ以上のことを何もできないな

んて。迷宮で受けた呪いは、どうやら相当に君を蝕み続けていたらしいね。今も」

「……」答えられない。

事実だからだ。こんな小細工を弄するくらいなら、普通に攻撃したほうが遥かに速い。

俺がそれをしないのは――つまり、しないのではなく、できないから。

なにせ俺は、魔力を使うだけで負傷するのだから。騙し騙し切り札の術式改変も見せてしまった。これも知られた以上、二度目は通用しないだろう。

綿密に術式を構築すれば済む話だからだ。それだけで俺は干渉できなくなる。アルベルの防壁を乗っ取って破壊できたのは、あくまでそれが咄嗟に構築された粗い術式だったからに過ぎない。ネタが割れては、それだけで詰みになる、せいぜいが二流の宴会芸だ。

「それに、使える魔具ももう少ないんだろう？　アレは使い切りだ、あらかじめ用意していた数を使い切れば、それ以上はない」

「……さてな。まだ隠し持ってるかもしれないだろ……？」

嘘だ。少なくとも防御の魔具はすでに全て使い切っていた。攻撃の魔具は、たぶんそもそも奴には通じない。だから反動を覚悟で、わざわざ自分の魔力を使ったわけで。

もちろんアルベルは、俺の言葉を信じない。

「印刻魔術は便利なようでいて――その実、実戦にはまるで向いていないね」

「おいおい、それは早計だぜ。まだ切れる札はいくつかある」
これは事実だ。だが同時に強がりでもあった。
確かに決め手は二、三ほど考えられるが、外せば死ぬし――仮
まい。自爆を覚悟する必要がある。アルベルの言う通り、本当に
五大迷宮に立ち入って、俺は様々なものを失った。
その代わりに得たものが魔力制限の呪詛だというのだから、ま
折り損を通り越している。
「本当は、ここではまだ君を殺すはずじゃなかったんだけどね。
あまり減らさないほうが望ましい。けれど、まあ、君ひとりくら
「なんだよ……お前ら、俺らのこと殺そうとしてるのか？」
「恨みがあるわけじゃないけどね。いずれ、僕らの邪魔をすると
除できるに越したことはない」
「また、ワケのわからねえことを……結局は殺したいんじゃねえ
「それでも殺せないのが困ったところでね、君らのような人間は
ない。だから、本当に不要になるまではとっておかないと。――
変えられる人間はつまり、それを悪い方向にさえ動かすことがで

「意味不明な理屈で、勝手なコトばかり言いやがって……。君がここで死ぬ運命なのなら仕方ない。これも運命だというコトなんだろう。見込み違いだった。焦がれて、求めて、嫉妬して嫉妬して嫉妬してその全てに耐えたその先がこの結果だなんてね。まったく――なんて因果だろう」

答える言葉なく、俺はただ灰になった煙草を床で揉み消した。

まずい。本当にまずい。これほどの危機は本当に久々だ。

切り札を切った俺に対して、おそらくアルベルはほとんど全力を出していない。

――この男は強い。

単純な魔術師としての強さというより、純粋に戦闘者として鍛えられている。魔弾の攻撃は大したものでない代わりに、状況判断力も高く、隠蔽術式に至ってはまるで見抜けない。その戦い方は、誤魔化しと騙りで実力を偽る俺と、実は隠蔽で騙すアルベルと、改変で騙る俺。違いなどその程度だ。

ましてこの男、実力的にはかつての仲間たちに近い段階にある。タイプが同じなら、あとは自力の差が勝敗を決するだろう。

――俺にとって、アルベル＝ボルドゥックは間違いなく天敵だ」

「……君は、僕にとって天敵だった。

それとまったく同じことを、アルベルは俺に向かって告げた。
「だからこそ、ただの力だけで勝敗が決まってしまうことが悲しくてならない。これに耐えろというのだから、運命は本当に残酷だ」
とだろう。なら喜んだらどうだ」
「……お前は俺を殺したいんじゃないのか。俺たちの戦い方は、敵に全力を出させないこ
アルベルは答えなかった。だがこの結果は、奴にとってさえ不本意であるらしい。
何を考えているのかは知らない。だが冷静な判断でもって舐められているのは確かだ。
今や俺は、慢心ではなく元を掬われかねないからね。速度は
「術をやり取りすると、足らない。君がいちばん苦手とするのは、結局のところ、純粋な力押しだろう」
言い放ち、アルベルが魔術を展開する。
作り出したのはやはり魔弾だ。それも相応の威力が込められた一撃。挙句、目には見えないときた。アルベルの周囲に、濃密な魔力が集中していくことだけが感じられる。
呪いがない状態ならば、という魔力量だ。残存する魔力では、きっとこの攻撃を防げないだろう。
「……でも」

それでも諦めることだけはできない。最悪、死にさえしなければ相討ちでいい。
その覚悟でもって、俺は悪足掻きのようにルーンを起動する。さきほど、やろうとしてアルベルに止められたことを、今度は本当にやってやる。まあ今の状態では、その魔術を使っただけで自爆してしまうかもしれないが――それでも、諦めるわけにはいかないのだから。
彼女と。そう約束した以上は。絶対に死ぬわけにはいかないのだから。
――直後、視界の全てが光に包まれた。

※

「な……っ!?」
と驚きの声を発したのはアルベルだった。
俺もまた目を見開いている。
なぜなら、俺とアルベルの間を裂くように、突如として天井から光の束が降り注いだのだから。なんの前触れもなく思わず目を剥いた。
その変化に、揃って思わず目を剥いた。

円柱形の巨大な光の本流が、天から降り注いで地に突き刺さる。神の雷とも表すべき、圧倒的な魔力量。シャルの儀式魔術でさえ、ここまでの密度は持っていないだろう。

けれど、それは攻撃ではなかった。ただの光。もしそれに物理的な攻撃能力があれば、その余波だけで俺もアルベルも吹き飛ばされていただろうほどの魔力を持つ、光の筒。

まるで抜け道のように。絶対に破壊できないはずの迷宮を、まるで散歩に来たみたいな気軽さで俺とアルベルの間に降り立つ少女。

そして。突如として発生したその空洞から、小柄な人影がひょいと身軽に降りてくる。

彼女は俺の姿を認めると、にたり、と嫌らしい笑みを浮かべてこう言った。

「んー？　これはこれは。え、何？　もしかして負けそうなの？　元七星旅団の六番目にして、《紫煙の記述師》の二つ名を持つアスタさんともあろう者がー？」

「……いきなり現れてそれかよ。そのこっ恥ずかしい二つ名を口にするんじゃねえ」

「いやいや、ごめんね。まさかアスタがこんなところで、こんな風になってるとは思わなかったからさ。うん、ちょっと驚いちゃったんだ」

軽い口調だが、彼女の目は笑っていない。答える言葉を持たない俺は、ただ押し黙るよりほかになかった。代わるように口を開いたのはアルベルだ。

今まで一度とて見せなかった強い感情で、この上なく憎い相手を目にした口調で。

「なぜ貴女がここにいる……なぜ、なぜ今このとき、ここに来る！」

「あたしがどこにいようとあたしの自由でしょ？　あたし的にもほら、アスタに貸し作れる機会なんて滅多にないっていうか、むしろこれで今までの借りを返せるチャンスっていうか？　うん、主に借金的な意味で」

「馬鹿な。どう急いだって間に合うはずがない。それがなぜ――」

「なぜも何も。見たでしょ、普通に降りてきただけだよ」

「……あり得ない」

呆然と呟くアルベル。その気持ちはよくわかる。というか、俺でさえ意味がわからない。どうやってここに来た。なぜこの場所がわかった。というか今いったい何をした。そもそもどの辺りが《普通》だったというんだ。

本当に何ひとつ理解できなかった。理屈とか理論とか、そういった諸々を一切合財無視している。

とはいえ、驚くことではないのだろう。彼女はそういう存在だ。なぜなら《天災》は、人間の常識などに囚われたりしないのだから――。

「――てなわけで。死にかけ吐血野郎のアスタくんに代わって、こっからはメロ様の出番ってコトで。よろしく頼むよ、知らないヒト？」

そう。メロ＝メテオヴェルヌにとって、常識とは破壊の対象でしかない。

そのことを、俺はきっと知っている。

「……メロ。お前、どっから降ってきた」

思わず呆然と呟いた俺に、メロはくるりと踊るように立ち上がって答える。

「上からだよ――ほら」

メロが天井を指で示す。

その途端、彼女の降りてきた天井の穴が塞がり始めた。まず石壁が再構築され、続けて周囲の光景と同じ白い壁面が綻びを修繕するように広がっていく。まるで迷宮の壁を、内側から塗装していくかのように。

「なんかさ、オーステリアから戻ってくる途中で、妙な奴らに襲われたんだよねー」

「妙な奴ら……？」

「うん。揃って白尽くめの格好した、いかにもな感じの魔術師が十人くらい。まあ倒したんだけど。たぶん、あたしたちのこと見てたの、あいつらなんだろうね。そこそこ楽しめたからいいけどさー。うん、あと十人は欲しかったよね」

「お前を襲うとか……自殺志願者かよ、そいつら」

十人いれば、メロに勝てるとでも思ったのだろうか。俺が十人いても、メロとは絶

対に戦いたくない。ほかの九人を囮にしてでも逃げようと
人間如きが天災に対抗しようだなんて――考えるほうが
「んで、そいつらなんかが。転移の術式が刻まれた指環を持っ
「……なるほど」そりゃまた、見過ごせない情報ではある
「うん。――それ見て、転移魔術覚えたから使ってみた。
さすがのあたしも完全には無理だったよ。ま、間に合った
「……」
さすがに絶句した。おいおい。いやいやいやいや。
そう思う一方で、まあメロならやりかねないと思う自分
術式を読み解くのと、それを再現するのとでは話がまっ
ても、それを自分で再現することなんて絶対にできない。
だがメロは違う。彼女の魔術は次元が違う。ただ術式を
ことのない魔術をオリジナルのものとして再現する――。
天才ならぬ天災の、それが所以のひとつだ。
「いわば発想の転換だったね。迷宮を壊せないなら、壊さ
「……もうなんか落ち込んでくるよ、お前見てると……」

「何言ってんだか。ほら、さっさと立つ、アスタ。その程度であ。アスタが弱いとあたしが困るんだからね？」
「……勝手なこと言ってくれるよ。見えないのか、今にも血をいうかもう吐いてんだけどほろぼろだよ」
「嘘つけ、ばーか」メロは笑って言う。「アスタがこんなこと回以上死んでるっての。ていうか、その前にあたしが殺しちゃ手使ってでも生き残ってたでしょうが。後ろに何を隠してんのばらすなよ……あと、さっさと恐ろしいことを言うな」
「当たり前でしょ」
ふん、とメロは鼻を鳴らした。
それが当然の権利だとばかりに、メロはこんな主張をする。
「あたしのことを倒したんだから。そのアスタが、こんなところで負けるなんて認められるわけないじゃん。――あたし以外の人間には負けるな、ってヤツ？」
「……そうかよ」
呟き、俺は立ち上がる。
「――とんでもないことを確かにまあ、こんなところでヘタレないでもらえるかな、当然のように言うなあ……まったく」

と、そう呟いたのは俺じゃない。アルベルだ。若干の平静アルベルの復活は早く、そして対応は迅速だった。
周章狼狽から脱した奴は、腕を濡らす血を振り払って宣言する。
「逃げさせてもらうよ」
あえて口に出したのは、奴なりの縁起担ぎだったのだろう。
さすがのアルベルも七星旅団の団員をふたり敵に回して勝つ自信はないらしい。
……いや、違うか。メロひとりで、きっとお釣りが来るだろう。
そのメロは、アルベルの逃亡宣言を聞くや否や、酷く嬉しそうに口角を歪ませていた。
実に嫌らしい顔をしている。どちらが悪役かわかったものじゃない。
「逃げる？　うん？　君、今あたしを前にして逃げるって言ったの？」
「かの《天災》を前に勝ちを拾えると自惚れるほど、僕は自分を過信していない」
言葉としては冷静だった。実際、それがいちばん妥当な判断なのだろう。
ときおり狂気じみた物言いをするアルベルだったが、根本の軸は強固な理性に保たれている。アルベルは、あくまで理性的に壊れていた。
だが、それは奴にとって、決して有利に働く事実ではないメロ＝メテオヴェルヌは――理屈が通じないからこその《天災》なのだから。

天敵というのなら、それこそ俺たちのようなタイプの魔術師にとって、メロ以上はいないことだろう。

理性ある災害は、酷薄な笑みをかんばせに浮かべる。

獲物を眺める、それは狩人の瞳だ。

「このあたしから逃げられると思う時点で、普通はそれを自惚れって言うんだけど」

「……傲慢は大罪ですよ、天災」

「そうだね。実際――君は何かしてきそうだし」

――すごく愉しみだよ。

言うなり、メロは無造作に前へと足を進めた。完全に無防備な挙動だ。

対するアルベルの反応は、いっそ憐れみを誘うほどに性急だった。俺を殺すために用意していた魔弾を、アルベルは一斉にメロへと放つ。

不可視の弾丸――アルベルの《隠蔽》によって、それがそこに在るという感覚さえ希薄なそれは、もはや必中の攻撃と評してもよかっただろう。

極まった魔術師同士の戦いは、たとえるなら将棋やチェスに近いものがある。

魔力の流れを視認し、構築される術式を読解し、次に採るべき最適の行動を選択する。

それが魔術戦における読み合いというものだ。術式はあくまで魔術師の脳内にしか存在し

ないが、それがもたらす結果は現実の世界に反映される。そから推測し、空間を流れる魔力を見て、相手が選ぶ行動を推を構築する――。

だからこそ、自らの手を隠蔽できるアルベルの特性は効果が透明な状態で、勝負に臨まなければならないということだそんなものは、もはや必勝を別の言葉に置き換えたようなものでしかない。

――相手が、天災でさえなければ。

放たれた必殺の弾丸を、メロは無造作に掌で、受け止めた。いとばかりに。まるでキャッチボールの相手をしているだけメロは片手を適当に動かして、全ての魔弾を余さず弾いた。

「く……っ！」

呻くアルベル。当然だろう、こうも簡単に攻撃を無効化されては、アルベルも立つ瀬があるまい。そもそもの威力が低い以上は仕方ないが、絶望的な光景だったと思う。

それでも冷静さを失わなかったのは見事だと言えた。あるいは状況程度は予測していたのだろう

が、実際に目の前で見せられると、まず心のほうを折られてしまう。魔術師という人種はど、彼我の戦力差に敏感な臆病者はいない。

ひとたび精神の調子を崩せば、魔術とは発動さえ難しくなるものだ。魔弾を撃ちながらも下がっていくアルベルは善戦しているが、逃げ出す隙は見当たらないようだ。

そして。抗えば抗うほどに、天災はその脅威を増していくと、メロは魔弾を止めた手をつ

「なるほど……こうやって、るんだ」

――面白いなあ。そう呟い、と軽く振った。

直後、彼女の周囲に夥しい数の魔弾が浮かび上がる。

数にして優に数十。瞬きの間に構築された魔弾は、彼女の手の動きに指揮された軍勢の如く、宙を漂って整列する。狭い迷宮の通路が、瞬く間に光で満たされた。

視界の全てを埋め尽くさんばかりに乱れる魔弾の海――。

それは、彼女が自分の師を真似た戦法だ。戦いにおいて決まったやり方というものを持たないメロだが、それでも魔弾で相手を飽和するこの戦術はよく使っている。

だが、彼女が天災たる所以はその先だ。メロはそれだけじゃ終わらない。

ぱちん――と、メロが指を鳴らした。

瞬間、魔弾の海が全て隠、敵され、認識不可能な弾丸へと変貌を遂げる。本来は光を放つ

魔力が、完全に目には見えなくなり、迷宮の通路に暗さが戻った。

「――馬鹿な」

今度こそ、アルベルは呆然と自己を失った。

当然だろう。あの《隠蔽》は奴が編み出した固有魔術だ。

の世にアルベル以外の使い手が存在しないという意味である。

それを――メロはただ一見しただけで、完全に再現してみせた。正確には再現などしていないのだが、少なくともそう見えるだけの現象を彼女は起こす。

「わ、さすがにこの量はちょっと難しいな。……でもまあ、あっけらかんと宣うメロに、言葉を返せる者がいるはずもなく。

――天災。

メロ＝メテオヴェルヌ。

彼女は得意な魔術など持たない。メロは決して魔術の天才ではないからだ。既存の枠に当て嵌まる意味では。

儀式魔術、元素魔術、印刻魔術、治癒魔術、混沌魔術、結界魔術、概念魔術――ありとあらゆる既存の分類に属する魔術を、だから彼女は決して使えるが、それを自身の技とはしというより、使えない。他人の技術は頻繁に真似あるいは使う意味がない。

魔術とは、魔力によって言うならあらゆる魔術に違いはない。それぞれ別の名前があるとして分類されているだけで、本質的には全て同じものだ。中で次第に簡略化され、扱える人間が増えていくうちに名前だけ。体系化され、確立された手法を学ぶことで、ヒトは零から学ぶより簡単に魔術を会得する。

だが、メロはそんなものを学んだことはない。一度でも目にした魔術ならば、彼女は自分なりに再現できるのだから。むしろ自分なりにしか再現できないというべきか。

その場に応じて即興で、彼女だけの理屈で術式を改良するのだ。

だからメロは他者の魔術は再現できても、自分が過去に使った魔術は再現しない。興味を失い忘れるからだ。

そう、メロはその場で魔術を創る。新しい魔術は、常に最新の魔術だけだった。

言うなれば、常に世界の法則を新しいものに変えているということ。彼女は戦闘を運営する。それは扱う全ての魔術が、メロという個人の観念が、現実世界に優先される。

それは七星旅団の団員どころか、きっと三人の魔法使いにだけに許された固有魔術――。

「――それじゃ、自分の魔術の上位互換。避けられるものなら、避けてみせてよ」

最強の一角に名を連ねる、世界にただひとりだけの《即興魔術師（マジックメイカー）》。
それが《天災》、メロ＝メテオヴェルヌの戦法（あそびかた）だった。

直後。空間を埋め尽くす不可視の魔弾が、彼女によって射出される――。

※

目に見えない弾着を、通路に響き渡る轟音（ごうおん）と、床面（ゆかめん）から巻き上がる埃（ほこり）が伝えていた。
空間そのものが、奇妙（きみょう）にぶれている感覚。迷宮とはひとつの結界であるから、魔力の余波を受けて構成力が弱まることもあるだろう。理屈の上では、だが。
それこそアルベルから盗（ぬす）んだ隠蔽の術式など、児戯（じぎ）にも等しくして――天災。
系化された魔術の歴史そのものを、ひとりで更新（こうしん）していく天才。
呆（あき）れたものだ、相変わらず。七星旅団（セブンスターズ）の仲間はどいつもこいつも魔術師としては異次元と言ってもいい実力を持っているが、異常性という観点ならばメロは一、二を争う。
天才ならぬ俺としては、本当に、言葉がないとしか言えなかった。
「……うわ、うっそ。マジかー……」

やがて視界が晴れる直前、メロが呟く。その視線の先に、た。肉片さえも残らなかっ……というわけではさすがにな
不可視の飽和攻撃を前に本当に逃げおおせたらしい。
「躱されないことを優先して、アルベル＝ボルドゥックは
さすがのメロも驚きに目たつもりだったけど、逆に失敗だ
視界が完全に塞がれる。を丸くする。あれだけの規模の攻
――隠れることと、逃げつ、どうやって逃げたのか、メロ
アルベルの言葉は確かにることだけは得意だと。
師はこの世に存在しない事実だった。こと隠蔽と逃亡の技
メロと同じ、常識から外れた突然変異の奇才。魔術の世界
「駄目だ、本当にどうやって逃げたのかわかんないや。して
逃亡せしめたアルベルの手腕を、メロは手放しで称賛する
いくらメロとて、敵を故意に見逃すほど甘い性格ではない
ともかく、逃げに徹したアルベルを捕捉するのは彼女にとっ
「転移、じゃないのか……？」
俺は口に出してみる。言いながら、どこかで違うのだろうとは思っていた。

どこかに《転移》の魔術者がいることは間違いない。前回の事件や、指環になっているという魔具がそれを証明している。だが、

「違うんじゃないかな……その割に、空間が干渉された様子がまるでないし」

言うなりメロが、ふとこちらへと掌を向けた。

なんだ、と疑問に思うも一瞬、俺はその掌の中に魔力が集まっていることに気がつき、

「――どわあぁぁぁあっ!?」

狙いを察して、慌ててメロの背後まで転がるように逃れた。それは放射状に広がっていく、俺が背中側に回るが早いか、メロは掌から魔術を放つ。これは回避できないだろう。巨大な空気砲のような風の攻撃だ。たとえるなら迷宮に存在する空気を、そのまま通路に沿って押し動かしたみたいな。通路の先に誰かがいても、これは即興で編み出したものである。と、それはともかく。

今の魔術も、もちろんメロが「いきなり何すんだ、お前」

俺は叫んだ。叫んだ瞬間、今し方の緊急回避の影響も合わさったのか、肋骨の辺りが軋みを上げた痛い痛い痛い。

だが叫ばずにはいられなかった。もしメロの攻撃が直撃していたら、俺は後方へと弾き飛ばされてお陀仏まっしぐらだ。仏様が異世界にまで存在しているのかは知らないが。

俺の抗議を受け、メロは悪びれもせず笑ってみせる。
「ほーら、やっぱ動けんじゃん。苦しそうなフリしてさー」
「言うことそれだけ!?　苦しいのは事実だっつーの、このバカ！」
「えー。助けてあげたのにバカとか酷くない？」
「助けた亀を今、自分で殺そうとしてたじゃねえか……」
「かめ？」
「いや、まあそれはともかく。やるならせめて言ってからやれよ……」
「だって、言ったら気づかれるかもしれないし」
要するにメロは、まだ近辺にアルベルが隠れ潜んでいる可能性を考慮したわけだ。転移で逃げたわけじゃないのなら、確かにまだ近くにいるかもしれない。
それを潰すために、避けようのない攻撃を行ったというわけだ。その目的がわかれば、確かに、言ってからでは逃げられたかもしれないけれど。
その代わりに、普通に俺が死ぬところだった。
「いいじゃん、避けたんだからー」
ぜんぜんよくない。
が、愉しげに笑うメロにはきっと、何を言っても無駄だろう。

俺は観念して、迷宮の床にそのまま尻をついた。それから、俺は顔を見ないで、かつての仲間へとこう告げる。

「……悪い、助かった。ありがとう」

「んや、別にー。いいんだよ、これくらい」

首を振りつつも、だがメロはとても嬉しそうに妙なステップを踏んでいた。たんたん、と跳ねるようにして両足を揃え、姿勢を低くして俺の顔を覗き込んでくる。

まったく。普段からこういう顔をしていてくれれば、可愛らしいんだけどなあ……。

そう思う俺だったが、もちろん言葉にはしない。あり得ないだろう。メロも含めて。

「そろそろ行こう。この先でシャルとフェオが――ピトスが待ってる」

「なんか、女の子ばっかだね……やれやれ」

「やれやれじゃねえよ」

女の子、なんて表現は似合わないだろう。メロも含めて。

という台詞もやはり口にはせず、俺たちは迷宮の先へと駆け出していった。

第六話　治癒の能力を持つ少女

アスタと別れてからしばらく。ある程度まで進んだところで、迷宮の様相が一変した。
シャルロットと、そしてフェオが、その場で思わず足を止めた。
石造りの壁が、床が、天井が見た目を変え、まるで平たい金属の板で作ったかのような通路になっている。空気を濁らせる迷宮の瘴気が、ほとんど感じられなくなっていた。
天井には、おそらく魔術で作られたのだろう、一定の間隔を空けた淡い光源が確保されている。鈍い銀色の世界が、白い光によって照らされ、なんだか異様な風景だった。
もしこの場にアスタがいれば、「ファンタジーというよりSFだな」なんて風に嘯いただろうか。まるで牢獄か、収容所か、病院か――いや、いちばん近い比喩を探すのなら、当然、異世界なんて概念さえ知らないシャルロットとフェオが、そんな発想を抱くことはなかったけれど。それでもこの場の異質さは、まざまざと感じさせられる。
「……これ、は――結界？」

小さく呟いたのはフェオだ。ここまで走ってくる間、魔物や罠に行き遭うこともなく、だから冷静さを取り戻していたのだろう。彼女はことのほか、魔力の流動に敏感だ。

言われ、シャルロットも辺りを見回した。確かにこの場所は、なんというか、人工的な気配に満ちているよう思われる。迷宮だって人工物であることに変わりはない――少なくともその説が最も有力である――のだが、そういう意味ではなく。長い年月を経て魔境と化した迷宮とは違い、今も誰かがここにいるような。そんな感じがした。

辺りが清掃されたようにきれいだからか。それとも通路に灯りが用意されているからか。いずれにせよ、何かしら人間の気配を感じてしまう。迷宮の奥深くにもかかわらず。その違和感に眉を顰めながらも、シャルロットはフェオの言葉に返答する。

「……たぶん、そうだと思う。誰かが迷宮の中に結界を張ったんだ」

結界とはすなわち《空間を区切る》魔術のことだ。ごく簡単な定義ではあるが、その意味で言うのなら迷宮という場所それ自体も、一種の結界である。いわばこの場所は、結界内結界とでも表すべきだろうか。

「いったいどうやって、誰が……？」

フェオはもう、わけがわからないとばかりに頭を抱えた。結界は、この先かなりの長さに亘って続いているらしい。瘴気の気配がないからだ。その分、魔物や罠にぶつかる可能

性もなくなったと考えていいのだろうが――それで安心することはできない。

ここまでの規模の結界魔術。維持するだけでも相当な魔力が必要とされるだろう。

というより、もはや単独の人間に可能な魔術の域を超えている。複数人の卓越した魔術師が一斉に大がかりな儀式を行ったか、あるいは。

「……迷宮の魔力そのものを利用してるのか」

呟いたシャルロットは、後者の可能性が高いだろうと考える。オーステリアでの一件を思い出せば、迷宮そのものを悪用する人間の存在が自然と思い浮かんだ。

「どう、する……？」

フェオに問われ、だがシャルロットは答えなかった。というより答えられない。

彼女との距離感の掴み方が、シャルロットにはよくわからなかった。フェオもまた、あれほど言い合っていたからだろう、シャルロットに対して大きな遠慮が見えている。

だが、このときシャルロットは、フェオに対するわだかまりなんて一切残していなかった。

というより、そんなものは初めから感じていなかったのだ。

シャルロットには人間関係というものがわからない。別に切り捨てようと考えているわけではないのだ。必要なよくわからないというだけで。受け入れるつもりはある。ただ、

シャルロット＝セイエルは――否、シャルロット＝クリスファウストは思う。

――わたしには、他人の気持ちがわからない、と。

どころか自分の気持ちさえわからない。学院に来たのは魔術を学ぶためだけで、他人と話すのはそれが必要なことだから。それ以外のことは、よくわからない。

ただ、魔術の極みに至ること。

それがシャルロットという少女に課された唯一の行動原理。彼女にとって、それ以外の全ては些末な余分にしか過ぎない。あの、アスタ＝セイエルの存在でさえ。

「……」

人類史にたった三名のみの超越者――魔道を極め、世界の外側へと至った存在――すなわち《魔法使い》。その娘として生み出された以上、彼女には創造主たる父を追う以外の存在理由が認められなかった。

魔術師には、全部で十一の位階がある。王国によって管理、認定される、技量を表した魔術師としての地位だ。

第十位階――新参者。

第九位階――熱心者。

第八位階――理論者。

第七位階――実践者（プラクティカス）。
第六位階――哲学者（フィロソフィアス）。
第五位階――小達人（アデプタス・マイナー）。
第四位階――大達人（アデプタス・メジャー）。
第三位階――被免達人（アデプタス・イグゼンプタス）。
第二位階――教会の首領（マジスター・テンプリ）。
第一位階――魔導師（メイガス）。
そして第零位階――魔法使い（イプシシマス）。
これは戦闘（せんとう）の強さや特異な才能によらず、ただ純粋（じゅんすい）な魔術の技量だけで測られる。この位階のうち、シャルロットが属しているのは、未（いま）だ第五位階でしかなかった。
若い魔術師としては破格だろう。おそらくレヴィでさえせいぜい第七位階といったところだ。
それでも――魔法使いには遥か遠い。足元さえ見えないというほどに。
それは、いわば呪（のろ）いだ。
行動原理を、価値基準を、生存因果の全てを縛（しば）る、拭（ぬぐ）い去れないただひとつ。
シャルロット＝クリスファウストという生命（そんざい）は、世界に創り出された瞬間から、《それ

以外》というモノを持たなかった。何も、何ひとつ――持って生まれてはこなかった。

オーステリア王立魔術学院に入学したのも、だから理由はほかにない。

魔術を修めるならば学院に入るのがいちばんの道だったし、ならばその中でも頂点の呼び声高きオーステリア学院を選ぶのは自然な流れと言ってよかっただろう。

彼女はクリスファウストの姓を隠し、父が使っていた偽名からセイエルの姓を借りた。

そして、魔術学院に入学する者だけが集うオーステリア学院においてさえ突出するほどに。

彼女は優秀だった。才あるシャルロット以上は、学院元より魔術に対する適性は血によって遺伝する部分が少なくない。

その意味で言えば、それこそ魔法使いの血を引き継いでいるシャルロットこそ稀少だろう。

どころか世界中を探してさえ稀少だろう。

だから当たり前のようにそうなるはずだった。

学生が数人、学院に存在してしまったことだろうか。

だから誤算と言えば誤算だったのは、そんな彼女にさえ匹敵する――あるいは凌駕する

彼女の入学した年代は、長い学院の歴史全てを紐解いてさえ最上位に位置するとされる

当たり年だと、そう評されている。

その《当たり》に名を連ねるレヴィ＝ガードナーやウェリくの優秀な魔術師を輩出した歴史ある家系の出だ。魔具製作ラ＝フルスティもまた、現聞いていた。魔術がいかに癒魔術は、初めから魔術と能力者は一代限りの、いわだから、実のところあま確かにあの四人は強い。少なくとも、あくまで《及ばないという自覚がある　シャルロットは、いわゆ　多くの魔術に精通し、とにかく《不可能を減らしていく》しては、もっとも典型的な　一方、学院のトップ層にレヴィとウェリウス。こ

例外は治癒魔術師、ピトス＝ウォーターハウスくらいのもいうよりも一種の《異能力》と呼ば突然変異とでも称すべき技能である。この手り気には留めていなかった。魔術師として、そして何より人間人間》としてのそれを測るなら、る万能型の魔術師だ。言い換えれば真っ当とも表現できる。ことに重きを置く。魔術師とて広く。位置する四人は少し異なる。のふたりは《戦闘》に重きを置いている。あくまで戦う者とし

て魔術を修めているわけだ。そういう意味では特化型と言えるだろうが、ウェリウスはおよそ元素魔術師としては最高の適性を所持しており、その応用範囲は凄まじい。レヴィもまた対人戦闘では学院で一、二を争う腕前ながら、魔術師としてはむしろ万能型だ。

また治癒魔術――ひいては人体干渉魔術に精通し、補助型武器職人として世界に名を馳せているシャルロットは四人に遠く及ばない。

個々の技能において、もちろん、特殊な治癒魔術を除いたほかの技術ならば、彼ら四人ができないことはシャルロットにもできるだろう。逆に彼女が可能とする魔術を、ほかの四人にできる可能性は高い。

だが同じ土俵に立ったとき、その技術の練度においてシャルロットでは四人に太刀打ちできない。正面きっての戦闘ではレヴィに勝てず、遠距離からの撃ち合いではウェリウスに負ける。どんな魔具を作ってもエイラには及ばない。治癒魔術など、逆立ちしたって真似ごとさえ不可能だ。それへと位置づけてしまう。

万能までは届かない器用貧乏。

なんでもできるのに、なんにもできない。

それが魔術師としてのシャルロット＝クリスファウストの立ち位置だった。

「――ねえ」

ふと、前方から声がした。
それが自身に向けられたものだとは気づかず、一度目にシャルロットは返事をしなかった。
「ねえってば」
二度目に声をかけられて、ようやく彼女は意識を浮かせる。
少し前に立っていたフェオが声を投げている。
まさか、声をかけられるとは思っていなかった。それが意外で狼狽してしまう。
「あ……ああ。何？」
「その、」一瞬だけ言い淀んで、しかしフェオは意を決したように言う。「ごめん。わたしが、えっと……悪かった、です」
「え……？」
言語としては理解できる。それは謝罪の文句だった。
だが、それがなぜ自分に向けられているのかがわからない。心当たりがなかった。
その反応をどう受け取ったのか、フェオは小声で言葉を重ねる。
「馬鹿みたいに突っかかったりして。そんなことしてる場合じゃなかったのに」

「……」

「勝手に嫉妬して、ひどいこといっぱい言いました。だからついにフェオは立ち止まり、シャルロットを振り返ってその……ごめんなさいっ」

シャルロットはもう、何を答えていいのかわからない。

――わたしに人間関係は言葉の数々に、本当のところ、わからない。

フェオから浴びせられたように見せただけだ。本当は、怒ってなんていなかった。

と、シャルロット自身は思っている。

怒ったような反応を見せただけだと。あくまで《そうするのが自然だろう》と判断しただけだと。シャルロットは一切の感慨を持てない。シャルロットには、そういう風に自覚している。

やない。シャルロットには、不快という感情がわからない。本当に不快に思っていたわけじ

そんなはずがない、ということが、――そんなはずがないのに。

彼女は生まれてから、ずっと魔術の修練しかしてこなかった――それも全て独学で。アスタのことを兄弟子と呼ぶのは、単なるあてつけでしかない。だってシャルロットは、父親である魔法使いの顔を見たことさえ一度もないのだから。

そんな彼女に、気の利いた返事は難しい。シャルロットが返す反応は、ただどう返すの

が自然なのか、という判断に基づいていた。感情なんて、ひとつも考えられていない。
「いいよ、別に気にしないで。わたしもいろいろ言い返したから。おあいこでしょ？」
謝られたから。許すのが普通なんだと思うから。
だから、そう答えただけ。
きっと望まれているように、そう振る舞ってみせるだけ。それで充分だ。
「……ありがとう」
だがそれでも、そんな一切の感情が籠もらない無為な返答にも、なんらかの意味はあったらしい。恥じらうようなフェオの笑みに、シャルロットは正解を引いたのだと判断した。
だから、シャルロットはまたそれっぽい返答を口にする。
彼女には自分がないのだから。
笑ってみせても、怒ってみせても、酔って醜態を晒しても、全て演技でしかない。
たとえ誰かと友達になったのだとしても——そんなもの、全て演技でしかない。
そのはずだ。そうに決まっている。
「本当に気にしなくていいから。それより、さっさと進もう。——行くんでしょ？」
「……うん、もちろん」力強く頷き、それからフェオは破顔した。「ありがとね。こっち

の事情に巻き込んじゃったのに」

「だからいいって。わたしも、ただ仕事で来てるだけだから仕事だから、助けることにしただけだから。

そこに、シャルロット＝クリスファウストの意思なんて介在していない。

「……」

シャルロットは胸中で、自己のない自身を嘲った。それこそが感情の萌芽なのだと、彼女に教える人間が存在しなかったから。だから彼女にはわからない。

それから、ふたりは互いに無言になった。

理由はそれぞれだったが、直後、ふたりは弾かれるように顔を上げる。

「――誰か来た」

フェオが呟いた。その視線は、通路の先へと続いている。

この状況で現れる存在を、味方だと思うほどシャルロットは呆けていない。

ただ静かに自己の内側に魔力を回転させ始め、訪れる存在を待つ。

――そして、ひとりの少女が現れた。

「ピトスー　無事だったんだ」
訪れた存在の顔を見て、シャルロットはふっと張り詰めていた
この場で彼女と合流できたのは心強い。ひとりでいる理由は不
きることの重要さは誰にだってわかる。シャルロットは一歩を前
「……ピトス？」
ずるずる、ずるずる。
俯いたまま、遅い歩調でピトスはまっすぐ歩いてくる。
ずるずる、ずるずる。
その手に何かを引きずりながら。
「――は……？」
その《何か》を視認した瞬間、フェオが間抜けな声を上げた。
驚きはシャルロットも共有していた。なぜ彼女が、そんなものを
理解できない。いや、するべきではないという思考が働き、け
だから、ふたりは見てしまう。ピトスが引きずっていたものを
「姉……さん？」
シルヴィア＝リッターの、血に汚れた身体だった。

まるでシルヴィアの肉体を筆に、その血をインクにして線を描くかの如く、ピトスは無言で歩いている。

そのままわずかに離れた位置で立ち止まると、その手から、どちゃり、と。

床に落とされたシルヴィアは、しかしなんの反応も見せることがない。意識を失っているようだ。

――異常な事態だった。

「姉さん！」

叫び、フェオが前へと駆け出す。その無防備を責めるのは不用意だったことは否めないだろう。彼女が、その隙を逃がした。そのように見えた。

瞬間――ピトスが、爆発のような勢いでピトスは一気に距離を詰め、フェオの元へ突進する。刹那だった。その威力は殺されることなく、完全にフェオを捉えている。

「く――!?」

大砲に撃ち出されたかのか、咄嗟に鞘を盾にしたフェオだったが――間に合わない。

さすがの反応というべきか、剣が鞘ごと弾かれ、フェオは大きく仰け反った。両手が上に跳ね上がり、その無防備な

腹部が露わになる。――ピトスは、その目の前で身を屈め、
「……っ!!」
間に合わないと知り、咄嗟に拳を強く握り締めている。
次の瞬間、握り締めていた拳を――ピトスが前に突き出し後方に跳んだフェオ。それは英断だっただろう。
うより、その鋭さは刺突に近い。そう、突きだ。殴打といまるで至近距離から石弓が勢いのままに後方へと弾き飛ばされ、フェオは迷宮の床を数度、跳ねた。それでも放たなかった剣を、杖代わりになんとか立ち上がるも、表情は痛みに歪んでいる。
追い打ちはなかった。フェオとその顔を前に向ける。
そこには――微塵の感情も浮んでいない。
どこかで見た顔だ。シャルロットは、そんな呆然とした考えを得ていた。
「――来ないで、ください」
動けもしないふたりに、ピトスは淡々と告げた。無感情な双眸。隙のない立ち姿。握り締められた彼女の拳は、それだけでひとつの凶器だった。
その先をふたりに突きつけると、ピトスは再び、感情のない口調で言葉を吐く。
それは宣告であり、そして命令だった。

「それ以上こちらに来たら——殺します」

あとがき

昔から、あとがきを書くのが夢でした。

という書き出しで第一巻のあとがきを書いたのですが、これはそんなに古くからというわけではないのです。というか秘めていたのかというと、それがいつからの夢なのかを覚えているかと問われれば答えは否で、ならば記憶している限り最古の夢は何かというと——小学生の頃、僕は探偵になりたかった。

探偵。もう探偵って聞くとそれだけで格好いい感じがしませんか。僕はそう思っていましたし、なんなら今でも思っています。探偵。嗚呼、なんて甘美な響きだろう、と。

なぜ探偵に憧れたのかというと、これはもう、きっと誰もがそうであるように、小説の中にいる名探偵の影響です。僕は子どもの頃からミステリを愛好していました。物語の中で、巧みな推理や卓越した弁論で犯人を追いつめる名探偵。それが最高にクールでした。

ですが、では僕がそんな物語の中に登場するような名探偵になりたかったのかと問われれば——いや、なぜか違うんですよね、これが。なんでなのかは今でもわからない。鋭い

論理で犯人を追いつめる名探偵ではなく、僕がなりたかったのは、あくまでも努力と根性と体力で、離婚や素行の調査をする現実的な探偵でした。本当になんでだろう。

すごく犬とか探したかった。怪しい男の尾行とかめっちゃしたかった。変装してホシに話しかけたかったし、夜のバーで煙草をくゆらせながら「マスター、いつもの」とか言いたかった。当時の僕が何を考えていたのか、今の僕にはまったくわかりません。ホシってなんだよ。バーくらい好きに行けばいいよ。もう後半はなんか違うだろうと。

ともあれ、そうして探偵を志していた僕は、けれどいつの間にか探偵ではなく小説家を志すように変わっていて、今では本当にあとがきを書いているわけです。

人生、どう転ぶかわかりませんね、本当。なんの話をしたかったのかもわかりません。

というわけで、改めましてお久し振りです。涼暮皐と申します。

あるいはこの第二巻をたまたま書店などで手に取って、今いらっしゃるでしょうか。その場合は初めまして。第一巻と第二巻、合わせてご購入いただけると、きっと幸せになると思います。少なくとも僕は幸せになります。

さて、お陰様をもちまして『セブンスターズの印刻使い』できる運びとなりました。誠にありがとうございます。

第二巻を、このようにお届け

ウェブ連載版では第二章――その前半部分を改稿する形でのお届けとなっております。

というわけでタラス迷宮編でした。この第二章で、『セブスタ』のメインキャラクターはおおむね出揃った形となります。同時に敵の正体もお目見えする巻でした。

いかがでしたでしょう。

誰もが胸に何かを抱えており、それを簡単には表に出してこない。それを表現して仮面を被るなどという言い方がありますが、実際のところ、素顔で外を歩く人間のほうが実は少ないのではないかと思います。誰だって、それぞれの都合と思惑の中で生きている。

ネタバレになるので詳しくは伏せておきますが、書籍版から入られた読者様は、ラストの展開に多少なりとも驚いていただけたのではないかと思っています。またウェブ版からお付き合いくださっている読者様も、新規に追加されたシーンや、まさかここで終わるのかというような、新鮮な驚きがあるんじゃないかなあ……というのも。

第一巻はまだウェブ連載版をそのまま書籍にした部分が多かったのですが、この第二巻は全ての文章を一から書き直しております。どうでしょう。書籍版から触れてくださった方も、ウェブ連載版からの読者様も、同じようにお楽しみいただければ嬉しいです。

しかしながら、やはりウェブ連載版と書籍版での最大の違いは、書籍版にはイラストが

あるという点だとも思うのです。作者の立場からしても、やっぱりイラストが届くときの嬉しさは言葉にしづらい大きさがありますね。信じられないほどテンション上がります。

今回も素晴らしいイラストを添えてくださった四季童子先生に感謝を。もう本当に完璧でした。みんなすっごく格好いいし、可愛らしい。イラストが届くたびにニヤニヤ笑っております。

並びに編集部、そしてイケメン担当編集のKさんにも感謝を。電話口で「ガチャでいいキャラ当てたんでスクショ送ります」とか言われたときはこの野郎と思いましたが、僕も目玉キャラを引き当てたのでノーサイドですよね、これ。決着はまだついていません。

最後に読者の皆様へ。今回もお手に取ってくださりありがとうございます。ウェブ連載版ともども、引き続きよろしくお願いします。

以上を謝辞に代えさせていただき、しかしあとがきはまだ続きます。

脈絡なく思いっきり話が変わるのですが、僕は埼玉に住んでいます。生まれたのは新潟で、幼少期は東京で過ごしたのですが、物心つく頃には埼玉に移り住んでおり、以来今日まで埼玉での生活を続けています。たぶん死ぬまで埼玉に定住し続けると思います。

なぜなら埼玉が好きだから！

……いや、ネタとかじゃないんですこれマジなんです。と不当に評価されすぎじゃないですかね？　本当はいいところらしき場所は少ないし、なんか東京様の腰巾着感が否めないんです僕は。完全無欠の美少女より親しみやすい子のほうが好よくないといろいろビハインドは抱えてますが、そういう感じです。違うか。違うな、それは違う。

でも埼玉が好きなのは本当です。住むには便利ですよ？

ものなら揃っていますし、だから逆に特色はないけれど、でともあれ、そんなわけで東京が近い。たいていのものぐさな僕にとって、遠出せずとも必要なものが手に入る好きすぎて、県を代表するゆるキャラのグッズを買い集め埼玉、ＬＯＶＥ。

「セブスタ」の主人公アスタくんも、だから出身は埼玉です彼は埼玉好きですよ。県の鳥も県の木も県の花も、全て暗残念ながら、その情報が作中にて公開される日は――おそらく永久に来ないのですが。

――だから埼玉は東京の腰巾着とか言われちゃうんでしょうね。

末筆代わりに。

同じ埼玉県民の後輩との意味がわかんないんですけど」

「――というわけで俺は埼玉トーク。

「いやまず関東ランキング三位だと思うんだけどどうだろう？」

「流れでわかるだろ。ニュアンスでいいよ。どう？」

「三位は千葉だと思いますが」

「……（絶句）」

「そんなにショック受けるようなこと言ったとは思えないんだけど」

「ええー……お前それでも埼玉県民かよ」

「いや、だいたい涼暮さん、割とちょくちょく埼玉県のこと罵倒してますよね？」

「それは俺なりの愛だからいいんだよ。埼玉県民は埼玉県を積極的に推さないけど、他県民からの風評には敏感なんだよ。ハートがガラスなんだよ」

「うわ、めんどくさ」

「なんだよもう。俺もうお前のこと、同じ埼玉県民だと思わないからな」

「私は先輩のこと同じ人間だと思ってませんけど」

「……」

あの、ハートがガラスだって言いましたよね僕？

二〇一五年師走　涼暮皐

ファンレターのあて先　ご意見、ご感想をお寄せください

〒151－0053　東京都渋谷区代々木2－15－8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
涼暮 皐 先生／四季童子 先生

HJ文庫
612
http://www.hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

セブンスターズの印刻使い2

2016年1月1日　初版発行

著者――涼暮 皐

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-15-8
電話　03(5304)7604（編集）
　　03(5304)9112（営業）

印刷所――大日本印刷株式会社

装丁――coil／株式会社エストール

乱丁・落丁（本のページの順序の間違いや抜け落ち）は購入された店舗名を明記して
当社パブリッシングサービス課までお送りください。送料は当社負担でお取り替えいたします。
但し、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

禁無断転載・複製

定価はカバーに明記してあります。

©Koh Suzukure

Printed in Japan

ISBN978-4-7986-1132-7　C0193

異世界に転生した青年を待ち受ける数多の運命、そして――。

精霊幻想記 1. 偽りの王国

著者／北山結莉　イラスト／Ｒｉｖ

孤児としてスラム街で生きる七歳の少年リオ。彼はある日、かつて自分が天川春人という日本人の大学生であったことを思い出す。前世の記憶より、精神年齢が飛躍的に上昇したリオは、今後どう生きていくべきか考え始める。だがその最中、彼は偶然にも少女誘拐の現場に居合わせてしまい!?

シリーズ既刊好評発売中

精霊幻想記 1. 偽りの王国

最新巻　精霊幻想記 2. 精霊の祝福

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン

HJ文庫毎月1日発売！

命がけのゲームに巻き込まれたので嫌いな奴をノリノリで片っ端から殺してやることにした 1

著者／中田かな
イラスト／ともぞ

生き残りの権利を賭けた頭脳戦が、始まる――

新井和馬は気が付くと見知らぬ空間にいた。突如現れた「ナナシ」により、クラスメイトや教師たちと生き残りを懸けたゲームをさせられることを知った和馬は、超高校級の女優・鉄山徹子をパートナーに、その頭脳を武器に嬉々としてゲームに臨むのであった。

発行：株式会社ホビージャパン

HJ文庫毎月1日発売

不器用な天使の取扱説明書

不器用でも、なにかに一生懸命な女の子が好きです。

高校入学を機にオタクをやめ、楽しい一般人ライフを目指す峰本信哉だったが、教室の隅でひたすら漫画を描いていたクラスメイト目崎凛が起こした騒動をきっかけに凛に元オタを見破られてしまう。その後元オタをネタに凛の漫画を手伝う羽目になったり、騒動解決以来クラス委員の沢渡千佳に頼られたり。過去と現在の狭間に揺れる信哉の決断は？

著者／黒木サトキ
イラスト／町村こもり

発行：株式会社ホビージャパン

HJ文庫毎月1日発売！

断罪官のディタラメな使い魔

「私たちは恋人以上の関係ですよ」

世界の理を歪める魔法使いから、魔法を取り除くことが出来る唯一の存在――裁判官。
陸也と緋澄の男女コンビは、時に国家以上の権力を行使しながら、裁判官として世界各地を巡る旅を続けていた。
そんな彼らが次の任務で訪れたのは、魔法使いによる連続殺人事件の噂が囁かれる国で――。

著者／藤木わしろ
イラスト／菊月

発行：株式会社ホビージャパン

HJ文庫毎月1日発売！

金属バットの女

著者／ちゅーばちばちこ
イラスト／ｒｙｕｇａ

「アイしてるぜ」そんな台詞が確かにあった。

５月のクソ暑い日、ど田舎の駅のホームで世界一可愛い女の娘と出会った。次の日、起きると家族が殺されていた。全員だった。そこには金属バットを持った世界一可愛い女が立っていた。そいつは化け物から世界の危機とやらを救う選ばれた女ということだった。

発行：株式会社ホビージャパン

平凡な高校生が召喚された先で受けた任務は――吸血鬼退治!?

高1ですが異世界で城主はじめました

著者／鏡 裕之　イラスト／ごばん

異世界に召喚されてしまった高校生・清川ヒロトは、傲慢な城主から城を脅かす吸血鬼の退治を押し付けられてしまう。ミイラ族の少女に助けられ首尾よく吸血鬼を捕らえたヒロトだが、今度は城主から濡れ衣を着せられてしまい……？度胸と度量で城主を目指す、異世界召喚ラブコメ！

シリーズ既刊好評発売中

高1ですが異世界で城主はじめまし1～6

最新巻　高1ですが異世界で城主はじめました7

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン

麗しき戦乙女たちを従え、少年は異世界で覇道を征く!!

百錬の覇王と聖約の戦乙女（ヴァルキュリア）

著者／鷹山誠一
イラスト／ゆきさん

戦乱の黎明世界ユグドラシルに迷い込んだ周防勇斗は、何の因果かわずか十六歳で数千の軍勢を率いる宗主にまで上り詰めていた！　異世界で王になった少年と、彼と義家族の契りを結んだ麗しき戦乙女たちが織りなす、痛快無双バトルファンタジー戦記！

シリーズ既刊好評発売中

百錬の覇王と聖約の戦乙女（ヴァルキュリア）1～8

最新巻　百錬の覇王と聖約の戦乙女（ヴァルキュリア）9

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン